

氣仙沼市文化財調査報告書第8集

嚮 館 跡

Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う
発掘調査報告書

2016

氣仙沼市教育委員会

嚮 館 跡

Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う
発掘調査報告書



本吉郡北方岩尻村分間絵図（上が北） 東北歴史博物館蔵

刊行にあたって

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、東日本の沿岸部を襲い、気仙沼市でも壊滅的な被害をもたらしました。被災家屋約 16,000 棟、被災世帯約 9,000 世帯、1,200 人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災からの一日も早い復旧・復興を目指し、個人での住宅再建をはじめ、高台への集団移転、各種産業施設やインフラ関係等の多くの大規模な開発が計画されました。本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など 180 カ所以上の遺跡が周知されていますが、これらの多くは沿岸部の丘陵上に立地しているため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財との関わりが増すという地理的な状況にあります。

本市では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との調整を図るために、職員の再任用や任期付職員の採用に加え、他自治体へ職員の派遣要請を行い、埋蔵文化財の発掘調査に対応する専門職員を確保するほか、文化庁、宮城県教育委員会等の支援により、調査体制を整備してまいりました。

本書は、平成 26 年度に、国の東日本大震災復興交付金事業として実施した櫛館跡の発掘調査成果を綴った報告書であり、周知の遺跡への防災集団移転促進事業としては、最大の面積のものとなりました。櫛館跡が所在する本吉町は、平成 21 年 9 月 1 日に気仙沼市と合併しましたが、合併以降町内で初めて行われた本格的な埋蔵文化財の発掘調査となりました。

櫛館跡は、これまで江戸時代の大肝入の屋敷推定地とされていましたが、今回関連資料が発見されたことから、遺構の一部を保存することができました。市内の集団移転促進事業で遺構が保存されたことは初めてであり、調査成果とともに、大震災後の本市の復旧・復興に向けたまちづくりの一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査や遺構の保存に対し、御理解・御協力をいただいた関係者の皆様、文化庁、宮城県教育委員会や発掘調査のため支援をいただきました全国からの自治法派遣職員の皆様並びに派遣元自治体の皆様、さらに実際の調査に当たられた皆様に対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 28 年 5 月

気仙沼市教育委員会

教育長 白幡 勝美

例　　言

- 1 本書は、東日本大震災の復興事業の防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に係る柵館跡の発掘調査報告書である。
- 2 確認・発掘調査は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力支援を受けて、平成26年度に実施した。
- 3 整理・報告書作成作業は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力支援を受けて、平成26・27年度に実施し、印刷・製本は平成28年度に実施した。
- 4 第2図は国土地理院発行の「気仙沼」「津谷」(1/25000)電子地形図(2015)を使用した。
- 5 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。方位は真北である。
- 6 使用した遺構略号は、SA：柵列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SE：井戸跡
SI：堅穴建物跡 SK：土坑 SX：包含層・集石土坑・不明遺構などである。
- 7 遺構・遺物の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
遺構：堅穴建物跡・掘立柱建物跡 1/60・1/80 土坑 1/40 井戸跡 1/60 埋設土器 1/20
遺物：土器 1/4 土器片 1/3 土製品 1/2 (土偶は 1/1) 剥片石器 4/5 磚石器 1/2・1/3
古銭 1/1 金属製品 2/3
- 8 土器の断面に○があるものは、繊維の混入を示している。土製円板の一は、研磨箇所を示している。打製石斧は、自然面を裏面（右側）に置いて図化してある。
- 9 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表及び写真図版の遺物番号は一致する。
- 10 発掘調査成果の内容や土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記等を採用した。土色の記載は『新版標準土色帖』を使用したが、本書には掲載していない。
- 11 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は㈱イビゾク、B地区の遺構配置図は㈱アスコにそれぞれ委託した。本書の遺構のデジタルトレースは㈱とつべん、石器（石製円板を除く）実測及び石器写真撮影業務は創和システム㈱、遺物（石器以外）の写真撮影は㈱アートプロフィール、黒曜石の原産地推定は㈱パレオ・ラボ、報告書の編集作業は㈱とつべんにそれぞれ委託した。
- 12 本書の執筆は、第Ⅲ章2（1）・（3）の土偶・（4）、第Ⅳ章1（黒曜石分析のコメントを除く）を堤が、他の執筆と編集は野崎が行った。なお、SUMMARYは阿部嘉子氏に英訳をお願いした。
- 13 出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、気仙沼市教育委員会が保管している。
- 14 発掘調査から報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご指導・ご協力を賜った。
相原淳一 阿部嘉子 小野寺昭英 宮本毅 山内繁 九州陶磁文化館 仙翁寺 東北歴史博物館

目 次

刊行にあたって

例言

第Ⅰ章 遺跡の概観	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 確認調査	6
3. 本調査	8
4. 遺構保存地区	9
5. 発掘調査方法	10
6. 基本層序	10
7. 遺跡の名称について	10
8. 調査体制	10
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	12
1. 遺構	12
(1) B区	12
(2) D区	13
(3) 経塚	13
2. 遺物	32
(1) 繩文土器	32
(2) 土師器・陶磁器	52
(3) 土製品	53
(4) 石器	58
(5) 古銭・金属製品	77
第Ⅳ章 まとめ	87
1. 繩文土器と石器	87
(1) 土器	87
(2) 石器	88
2. 近世の遺構について—大肝入小野寺宮内との関連—	91
SUMMARY	96
附編 黒曜石原産地推定分析	97
写真図版	101
報告書抄録	

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	1	第 28 図	SX13 包含層上層出土土器 5	42
第 2 図	周辺の遺跡	3	第 29 図	SX13 包含層上層出土土器 6	43
第 3 図	開発地点位置図	4	第 30 図	SX13 包含層中層出土土器 1	44
第 4 図	開発区域及び調査区図	7	第 31 図	SX13 包含層中層出土土器 2	45
第 5 図	確認調査トレント配置図	7	第 32 図	SX13 包含層中層出土土器 3	46
第 6 図	B 区遺構配置図	15	第 33 図	SX13 包含層中層出土土器 4	47
第 7 図	B 区詳細遺構配置図 1	16	第 34 図	SX13 包含層下層出土土器	48
第 8 図	B 区詳細遺構配置図 2	17	第 35 図	土師器・磁器	52
第 9 図	B 区遺構実測図 1	18	第 36 図	土製円板 1	54
第 10 図	B 区遺構実測図 2	19	第 37 図	土製円板 2・土偶	55
第 11 図	B 区遺構実測図 3	20	第 38 図	遺構出土石器 1	64
第 12 図	B 区遺構実測図 4	21	第 39 図	遺構出土石器 2	65
第 13 図	B 区遺構実測図 5	22	第 40 図	SX13 包含層出土石器 1	66
第 14 図	B 区遺構実測図 6	23	第 41 図	SX13 包含層出土石器 2	67
第 15 図	B 区遺構実測図 7	24	第 42 図	SX13 包含層出土石器 3	68
第 16 図	B 区遺構実測図 8	25	第 43 図	SX13 包含層出土石器 4	69
第 17 図	D 区詳細遺構配置図	26	第 44 図	SX13 包含層出土石器 5	70
第 18 図	D 区遺構実測図 1	27	第 45 図	SX13 包含層出土石器 6	71
第 19 図	D 区遺構実測図 2	28	第 46 図	SX13 包含層出土石器 7	72
第 20 図	D 区遺構実測図 3	29	第 47 図	SX13 包含層出土石器 8	73
第 21 図	経塚実測図	30	第 48 図	古銭 1	78
第 22 図	遺構出土土器 1	36	第 49 図	古銭 2	79
第 23 図	遺構出土土器 2・ 遺構保存地出土土器	37	第 50 図	古銭 3	80
第 24 図	SX13 包含層上層出土土器 1	38	第 51 図	古銭 4	81
第 25 図	SX13 包含層上層出土土器 2	39	第 52 図	古銭 5	82
第 26 図	SX13 包含層上層出土土器 3	40	第 53 図	古銭 6	83
第 27 図	SX13 包含層上層出土土器 4	41	第 54 図	金属製品	84
			第 55 図	閑館跡周辺絵図	91

表 目 次

第 1 表 遺構観察表	31	第 8 表 金属製品一覧表	77
第 2 表 土器観察表	49	第 9 表 古銭一覧表	85
第 3 表 土師器観察表	52	第 10 表 層位別土器分類表	87
第 4 表 陶磁器観察表	52	第 11 表 石器石材組成表	89
第 5 表 土製品一覧表	56	第 12 表 磨石分類表	90
第 6 表 石器一覧表	74	第 13 表 小野寺宮内関連年表	92
第 7 表 古銭計測値比較	77	第 14 表 江戸時代初期の災害・凶荒の被害年表	94

写真図版目次

卷頭 本吉郡北方岩尻村分間絵図		図版 15 SX13 包含層上層出土土器 2	115
図版 1 勝館跡空中写真 1	101	図版 16 SX13 包含層上層出土土器 3	116
図版 2 勝館跡空中写真 2	102	図版 17 SX13 包含層上層出土土器 4	117
図版 3 B区遺構写真 1	103	図版 18 SX13 包含層中層出土土器 1	118
図版 4 B区遺構写真 2	104	図版 19 SX13 包含層中層出土土器 2	119
図版 5 B区遺構写真 3	105	図版 20 SX13 包含層中層出土土器 3	120
図版 6 B区遺構写真 4	106	図版 21 SX13 包含層中層出土土器 4 · 下層出土土器・土師器	121
図版 7 B区遺構写真 5	107	図版 22 土製品	122
図版 8 D区空中写真	108	図版 23 遺構出土土器	123
図版 9 D区遺構写真	109	図版 24 SX13 包含層出土土器 1	124
図版 10 経塚	110	図版 25 SX13 包含層出土土器 2	125
図版 11 経塚・その他	111	図版 26 SX13 包含層出土土器 3	126
図版 12 遺構出土土器 1	112	図版 27 SX13 包含層出土土器 4	127
図版 13 遺構出土土器 2 · 遺構保存地区出土土器	113	図版 28 古銭 1	128
図版 14 SX13 包含層上層出土土器 1	114	図版 29 古銭 2 · 金属製品	129

第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 地理的環境（第1図）

気仙沼市は宮城県北東端の太平洋岸に位置し、北・西側を岩手県と接しており、宮城県から少し飛び出した場所にあるため、岩手県南の沿岸部と地理的・歴史的結びつきが強い場所である。市域は北上山系の支脈に囲まれ、そこから流れる河川は西から東に向かって流れ、太平洋に注いでいる。

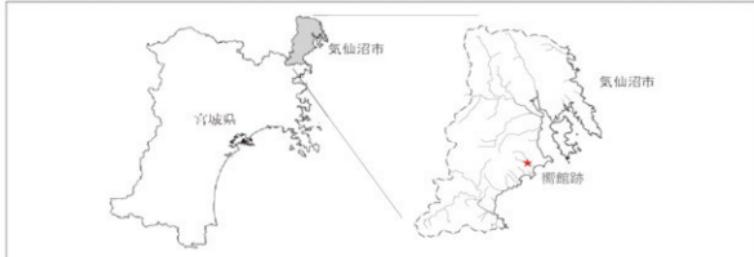
青森県八戸市から宮城県石巻市の金華山まで、北上山地の南北 254km、海岸延長約 600km が三陸リアス式海岸で、その三陸沖は世界三大漁場と呼ばれるほど漁業資源が豊かな場所となっている。このため、岩手県久慈市から気仙沼市までの南北約 180km が陸中海岸国立公園に指定され、東日本大震災後の平成 25 年 5 月に、八戸市の種差海岸等を編入して三陸復興国立公園が創設された。

またこの一帯は、太平洋プレートの沈み込み帯である日本海溝に面し、日本でも古い地質を持つ北上山地があることから、古生代から新生代の 5 億年に及ぶ大地の歴史が刻まれ、化石が多く出土するなど特徴的な様相を呈している。これにより、青森県八戸市から気仙沼市までの海岸線約 300km、面積 6,000 km² を超える地域（三陸ジオパーク）が、平成 25 年 9 月に日本ジオパークに認定された。一方で、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震をはじめとする地震や津波に、繰り返し見舞われている。

三陸リアス式海岸は、北部は隆起海岸のため直線的であるが、岩手県宮古市以南は沈降地形のため、湾と岬が交互に連続する海岸となっており、特に大船渡湾以南は沈降と隆起を繰り返したため、海岸線に沿って平らな丘陵が並ぶ海岸段丘を形成している。気仙沼市内では、この海岸段丘上に多くの遺跡が点在している。また、大きな海湾の中に小刻みに屈折があり、小さな入り江が点在する崩れ谷も見られる。

嚮館跡は、合併前の旧気仙沼市域の南側で、旧本吉町の北端に位置する。東海岸から約 750 m、南の大谷海岸から約 1.1km の内陸にあり、沖の田川と滻根川に挟まれた標高 30 m 程の丘陵上に立地する。

この丘陵は、標高 487 m の長森山から派生して、北側を沖の田川と並行しながら東西に横たわり、東側の大谷漁港方面に向かってなだらかに傾斜する。丘陵の南側を流れる滻根川は、丘陵と並行して東流するが、大谷小学校周辺で、大谷海岸に向かって南流する。沖の田川などの川の周辺の沖積地は開田され、丘陵地帯は畑として一部耕作されているが、宅地を除き総じて山林となっている。



第1図 遺跡位置図

海岸寄りの水田の多くは東日本大震災の津波を被り、再圃場化が進められている。遺跡の周囲には、湧水を利用した溜池が散見できる（第3図）。調査前の状況は大半が荒蕪地であったが、以前は田畠の耕作が行われていた。

2. 歴史的環境（第2・3図）

震災前の気仙沼市域では、これまで遺跡の所在する箇所での開発が少なかったこともあり、発掘調査はあまり多くなかった。本遺跡周辺は、国道45号線や旧JR気仙沼線が海岸線に沿って総断するが、遺跡も海岸線に沿った海岸段丘上に点在し、その多くが縄文時代と中世の城館跡である。しかし、震災に伴う高台への集団移転などにより、調査が増加し、少しずつ遺跡の概要が解明されてきている。

○縄文時代

南最知貝塚（31）や前浜貝塚（14）、平貝遺跡、藤ヶ浜貝塚、田柄貝塚、磯草貝塚、平館遺跡などで調査が行われ、震災後は、杉の下貝塚（20）、台の下遺跡・貝塚、波怒棄館遺跡、磯草貝塚、高谷遺跡、緑館遺跡（38）、石川原遺跡（23）などで調査が行われ、遺構が見つかっている。衙館跡（1）の東隣の野々下遺跡（2）でも調査が行われたが、遺構は確認されなかった。

○古墳時代

市内に明らかな古墳と思われるものは少ない。衙館跡の南側の三島古墳群（12）は、現在8基が残存するだけであるが、当初は21基あったと言われている。平成25年の個人住宅の調査で、新たに1基の古墳が確認されている。明治時代末期、付近の宅地造成で多量の玉類が出土し、現在東京国立博物館に所蔵されている。また、衙館跡のすぐ南に寺谷古墳群（4）があり、円墳状の高まりが2基残る。

○古代

市内の周知の遺跡は、十数遺跡程度である。このうち、市内北部の塚沢横穴古墳群では、8～9世紀の横穴墓が10基以上確認されている。また、石兜貝塚などで遺物が確認されているが、発掘調査で遺構が確認された例は少ない。ところが、震災以降の発掘調査により、星谷遺跡（42）、緑館遺跡（38）、南最知貝塚（31）、杉の下南遺跡（19）などで、古墳時代後期～平安時代の堅穴建物跡が確認されている。

人々、この地域は一大産金地と知られ、奥州藤原氏の繁栄は、その金の採取が背景にあると言われば、藤原秀衡の第四子本吉冠者高衡の居城があったことからもその重要性が窺え（推定地は、南三陸町の志津川城旭館）、今後、遺跡や遺構が増加するものと思われる。また、田東山の経塚群（11基）も、はつきりはしていないが藤原氏の造営だと推定されている。この他に旧平磯村の大谷鉱山跡も、古代には採掘していたと言われるが、定かではない。

○中世

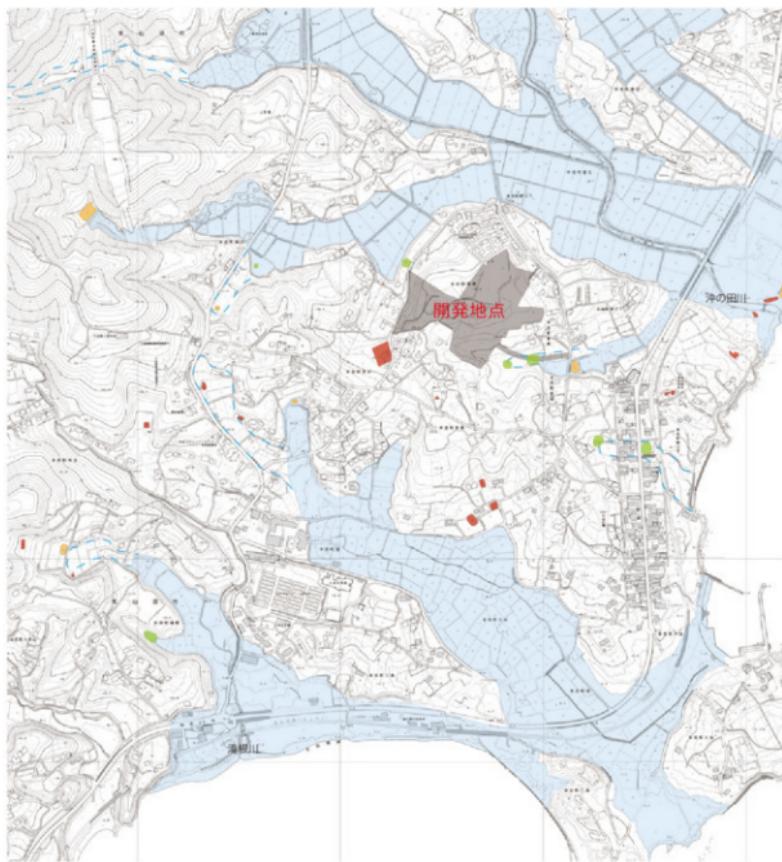
城館跡は市内に80か所以上と極めて多い。震災前には、猿喰東館跡（39）や陣山館跡で確認調査が行われているが、実質的な調査は行われていない。震災以降、猿喰東館跡で調査が行われ、堀跡などが見つかっている。

峰平館跡（6）は、本遺跡の北約1kmに位置するが、修驗（本山派）の大寿院跡である。ここに、桃生郡中島城主の小野寺出雲守道広の六代孫の小野寺道重が、天文年間（1532～1555）に当地を



1. 櫛館跡（縄文・古代・近世）2. 野々下遺跡（縄文・古代）3. 風京館跡（中世）4. 寺谷古墳群（奈良）5. 洞館跡（中世）
 6. 峰館跡（中世）7. 畠合館跡（中世）8. 直伝遺跡（縄文）9. 塚館跡・土久戦場館跡（中世）10. 照合館跡（中世）11. 中学校付近遺跡（縄文・古代）12. 三島古墳群（古墳）13. 鳴壹館跡（中世）14. 市史跡 前浜貝塚（縄文）15. 府中館跡（中世）
 16. 平穠古館跡（中世）17. 波路上西館跡（中世）18. 波路上西遺跡（縄文）19. 杉の下南遺跡（奈良・平安）20. 杉の下貝塚（縄文）
 21. 波路上東館跡（中世）22. 岩井崎遺跡（縄文）23. 石川原遺跡（縄文）24. 道貫館跡（中世・近世）25. 菖蒲沢遺跡（縄文）
 26. 南最知館跡（中世）27. 内田遺跡（縄文）28. 畠合館跡（中世）29. 長磯浜遺跡（縄文）30. 森館跡（中世）
 31. 市史跡南最知貝塚（縄文・古墳）32. 末永館跡（中世）33. 長磯高遺跡（古代）34. 最知中館跡（中世）35. 塚館跡（中世）
 36. 海蔵寺遺跡（古代）37. 海蔵寺北遺跡（古代）38. 緑館遺跡（縄文・古墳・古代）39. 掘塙東館跡（中世）40. 猿喰西館跡（中世）
 41. 荒沢遺跡（縄文）42. 星谷遺跡（縄文・古代）43. 相馬館跡（中世）44. 八幡館跡（中世）45. 長平遺跡（縄文）
 46. 寺沢遺跡（古代・近世）47. 古館跡（中世）48. 高谷館跡（中世）49. 金取館跡（中世）50. 曲要篠松下遺跡（縄文）

第2図 周辺の遺跡



凡例	
■	溜池（絵地図に無、現在は有）
■	溜池（絵地図に有、現在は無）
■	溜池（絵地図に有、現在も有）
■	沖積地帯
※	破線部は絵地図で沖積地と想定される地域

第3図 開発地点位置図 (1/12,000)

賜り、平館を築いたとされる。その子（重房）や孫（但馬）が山伏となり、大和国大峰に入峰し、孫が吉祥院中将公權大僧都に補せられたので、峰館と云われるようになったとされ、そのことを契機として、平館と峰館を合わせて、峰平館と呼ぶようになったとされる（岩尻邑風土志）。ここで重要なのは、但馬の子が小野寺宮内であり、嫡子弥惣エ門とその子円寿院に峰館を譲り、仲子の兵左衛門と櫛館を築いたことである。

なお、元禄9（1696）年に、仙台藩第四代伊達綱村が岩尻村峰屋敷源内宅に宿泊していたが、この峰屋敷とは峰平館のことである。

○近世

櫛館跡が所在する本吉町長根は、江戸時代には岩尻村で、明治8年に岩尻・平磯村が合併して大谷村となるが、両村の境が滝根川である。

大谷は、仙台藩と南部藩を結ぶ気仙道の宿場町として、1600年代に順次整備されたが、明治29年の津波で大きな被害を受けたと言われる。この道は、仙台から石巻市小野で石巻街道と別れて、柳津を経由し海岸沿いに大谷、気仙沼を通り南部領に至るが、先の津波で低地を通るルートは被害を受けている。なお、気仙道は、明治に入ると陸前東浜街道と称されるようになる。

本吉郡では、金・鉄・塩が重要な産業となっており、仙台藩において重要な位置を占めていたと思われ、鮎貝家などの一部を除き、直轄地となっていた。金に関しては、岩尻村内にも岩倉金山と岩尻坑があり、元禄6（1693）年に仙台藩第四代伊達綱村が、「ふることのためしを誰もいわじりに今を春べと黄金花咲く」と詠んでいる。鉄に関しては、近隣ではその痕跡を認められないが、塩はやや時代が異なるが波路上で大規模な塩田が営まれていた。寛永3（1626）年に、伊達政宗は塩の専売制を実施し、この頃、市内には、内の脇と鹿折村の蔵底に塩田があったとされ、天和2（1682）年に、波路上塩田の開発が許可されている。当然、これ以前にも製塩がおこなわれており、近年の調査で古代から中世の製塩土器が出土し始めている。櫛館跡は、中世の屋敷として遺跡登録されているが、実際は、江戸時代の慶安年間（1648～1651年）に小野寺宮内が屋敷を構えた場所と認識されていた。

仙台藩第五代伊達吉村が、享保15（1730）年7月に本吉郡を巡視し、『続隣松集』の同年7月23日には、「岩尻の小野寺何がしとかやいふもののやどりに着ぬ。四五日足をとどめて山野逍遙し侍り。このやどりはわきて異方より景色勝れ海のおもても居ながらに見わたされて後は廣野田地につつきいく日ありともあきたるまじき所なり」とある。この小野寺某の屋敷については、後述する。

なお、経塚の周囲は墓地（地目も墓地）となっており、江戸時代の天和2（1682）年～安政年間までの墓石40基が確認されたことから、発掘調査期間中に改葬され、仙翁寺の墓地の一画に集められた。また、追加伐採された地点から、江戸時代の明和～天保年間までの墓石14基が確認され、こちらは女性や子供の墓が多く見受けられた。こちらも、併せて仙翁寺に改葬された。

市の経塚の調査例としては、国道45号線のバイパス建設時に発見された赤岩館経塚がある。経塚からは経石が8740点出土し、大半が一字一石であったと報告されている。この経塚は2回の埋納があり、1度目が享保3（1743）年で、2度目は時期が不明となっている。

第II章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

震災により、約 9500 世帯が被災し新たな居住地確保が必要となり、新たな造成による集団移転先が検討され、平成 23 年度に、「今後の住まいに関する意向調査」が実施された。大谷地区についても、地元の協議会と気仙沼市の間で協議がなされ、本吉町長根地区に移転する方向性が決まり、平成 24 年 11 月 20 日に本事業の国土交通省の大臣同意が得られ、測量・設計・用地取得に着手することとなった。また、災害公営住宅に関しては、平成 24 年度に「今後の住まいに関する意向調査」が実施され、集団移転事業地に併せて建設されることとなった。

平成 24 年 7 月 12 日には、防災集団移転候補地の現地踏査が、宮城県教育委員会、気仙沼市教育委員会、気仙沼市用地課の三者によって行われ、大谷地区的集団移転先候補地である嚮館跡における確認調査の必要性が認識された。

平成 26 年 5 月 7 日付で、埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出されたことから、5 月 27 日、県教育庁文化財保護課、市教育委員会、市防災集団移転推進課の三者が現地で協議をし、雑草などの除草終了後、7 月頃から確認調査に入ることを確認した。

6 月に除草状況の確認のため現地に赴いたところ、竹林となっていた墓地の一画に塚状の高まりがあり、その上に石碑を確認した。後日、拓本を取ったところ、心と 137 文字が彫られていて、延宝 7（1679）年に小野寺宮内が経石を埋納した経塚であることが判明した。

その後、6 月 16 日に、事業者の市、工事主体者の大成建設及び市教育委員会の三者で打合せをした。この段階では、地権者が開発に同意し、発掘調査の承諾は得られていたものの、立木は未買収のため伐採できないことから、とりあえず調査可能な範囲のみを対象とし、確認調査の状況によって対応することとした。また、経塚に関しては、調査の状況によりその取り扱いを協議することとした。6 月 19 日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出された。

なお、調査費用は、確認調査が市教育委員会分、本調査並びに整理・報告書作成が市役所（防災集団移転推進課）分で、いずれも国の東日本大震災復興交付金によるものである。

2. 確認調査（第 4・5 図）

確認調査は地権者からの同意を得て、用地買収に先立って平成 26 年 7 月 1 日から開始し、8 月 6 日で終了した。本事業は、防災集団移転 37 戸、災害公営住宅 67 戸（いずれも調査開始時点）、対象面積は 5.07ha（未伐採区域を含む）であり、便宜的に A～D 区の調査区を設定し、63 か所のトレチを調査した。調査面積 2,184 m² であった。

事業地の地目は、田、畑、山林、ため池、原野、雜種地、墓地、公衆用道路であり、調査前には、過去の造成工事で、かなり改変を受けているという情報を得ていたが、結果的には、改変を受けているものの、遺構が残っていることが確認できた。

調査の結果、B・C・D 区の一部で、下記のような遺構が確認された。

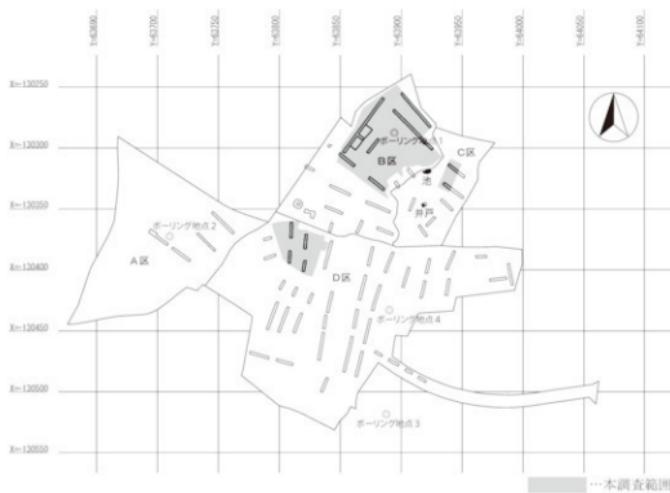
B 区－縄文時代の包含層、土坑・ピット多数

C 区－縄文時代の土坑、ピット若干

D 区－柱穴と落とし穴



第4図 開発区域及び調査区図(1/4,000)



第5図 確認調査トレンチ配置図(1/4,000)

これにより、7月23日に、県文化財保護課、市教育委員会、調査員が現地で協議し、本調査の計画について協議を行い、B・D区を本調査とし、特に包含層にサブトレンチを入れて、詳細なデータを得ることとした。C区で遺構が見つかった箇所については盛土予定地であることから遺構保存地区とし、遺構を確認できなかった場所については工事の着工を認めることとした（追加の確認調査個所を除く）。

経塚の東側の墓地に関しては、8月4・5日に仙翁寺に改葬が行われ、調査員が立会い、最終的に墓石の数を40基と確定した。

なお、遺跡台帳で土壘とされていた高まりを墓地の東側及び南側の一部で確認したが、トレンチ調査の結果、耕地掘削により墓地側に土を寄せたかのように観察され、近年のものと判断した。

3. 本調査

確認調査の結果を受け、8月1日に、市教育委員会、事業者の市防災集団移転推進課と工事主体者である大成建設の三者で協議した。復興調査では、原則として調査の対象は工事によって壊される範囲までとされているが、B・D区は最大5mの削平を行う予定であり、計画変更是困難なことから本調査を実施することとなった。なお、後述するC区は、東側半分が盛土されることから、遺構保存地区とすることとした。調査期間は9月から12月いっぱいとし、墓地の南側（D区）を先行して調査を終えることとし、立木による未調査部分については、今後立木の伐採の進捗に合せて追加の確認調査を実施することとした。なお、この追加伐採地区（対象面積2,400m²）については、11月5日～7日に確認調査を行い、計5か所（112m²）のトレンチを入れたものの、遺構は確認できなかった。また、確認調査を要しない追加伐採地区に20基程度の墓地が見つかり、こちらも改葬された。

経塚に関して、事業者から設計変更により保存できる余地があるということから、8月20日付で、市教育長から市長宛に要望書を提出した。

本調査は9月1日から墓地の南側のD区において調査を開始し、9月19日には一連の調査を終了し、10月9日に、D区の空中写真撮影を実施し、この地区的調査を完了した。調査面積は1,229m²であった。

B区は、9月5日から表土除去を始め、断続的に行い、表土除去は11月19日に終了した。調査は9月10日から調査を開始し、徐々にD区からB区に移行し、9月24日からB区のみの調査となつた。

9月16日には、地元の大谷小学校6年生（42名）と教員2名を対象に、B区のSX13で体験発掘を実施した。また、11月29日に現地説明会を実施する予定だったが、降雨のため中止にした。ところが、近隣住民を中心来場者（約60人）があつたため、急きょ簡易的な説明会を実施した。

経塚に関しては、この場所に集会所を建設する計画であったが、設計変更により保存されることに決まったので、一部トレンチ調査を実施し、現状のまま保存した。

C区に関しては、工事による削平箇所の一部の表土を改めて除去し（338m²）、遺構が残存していないことを確認した。また、井戸跡については工事により削平されるが、周辺住民の聞き取り調査から、近代のものと判明し、截ち割り状況の写真撮影のみで終了とした。

11月下旬からは天候不順のため、調査の進捗が悪くなつたものの、なんとか12月10日に空中

写真撮影を終えることができた。12月25日には、機材の撤収を終え、すべての調査を完了した。B区の調査面積は4,130m²であった。最終的な本調査の範囲は、第5図を参照されたい。

発掘調査が完了したのを受けて、平成27年1月23日に、現地において、市防災集団移転推進課、大成建設、市教育委員会の三者で、今後の埋蔵文化財に関する取り扱いを下記の通り確認した。

①経塚は保存することとし、周囲の立木と竹の根を取り除くために表土を漉き取って、土を入れ替えること。②経塚は掘削せず、山砂と土砂で覆い、供養碑を建て直すこと。③C区の保存地区は、表土を30cm漉き取る際に立会い、災害公営住宅を建設するためには再度書類の届出が必要であり、災害公営住宅整備課に引き継ぎをすること。④B区の包含層(SX13)の西側については、重機による掘削時に立会うこと。

このことを受け、平成27年3月4日と5月14日に、SX13の西側を掘削し、遺物の回収を行ったが、遺物は少なかった。

4. 遺構保存地区

確認調査で、事業地の北東端(C区の一部)において、縄文土器や石器を伴う土坑などが若干見つかった。当該地区は東側に向かって下がる斜面にあり、一部浅い谷状となっており、最大110cmの表土が残っている。この個所は、盛土により遺構が破壊されないため保存地区とし、その面積は273m²である。平成27年3月9日に、保存地区的表土を30cm削平するため、立会っている。

ところが、5月29日に遺構保存区域で業者が表土の掘削をしているのを偶然発見し、すぐさま工事を中断させ、6月1日に状況確認の調査を実施した。その結果、保存地区的表土などが削平され、地山までは掘削が及んでいなかったものの、確認調査で発見した土坑に加え、新たに落し穴状の土坑1基を確認した。6月5日に当該地区的追加の表土漉き取りに立会っている。また、8月6日、保存区域の北端に擁壁を設置するための掘削に立会っているが、新たな遺構の発見はなかった。

遺構保存地区は災害公営住宅の事業地であり、2軒分の住宅が建設されることから、平成27年7月13日付で、埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、11月16日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出され、浄化槽掘削部分のみの確認調査となつた。

12月2日に、浄化槽掘削に関する打合せを現地で行い、平成28年3月25日に、浄化槽の確認調査を実施したものの、遺構・遺物は確認されなかつた。

一方、経塚に関しては前述の1月23日の現地協議にもかかわらず、5月26日に、工事業者が経塚の頂部の一部を掘削し、コンクリートの基礎を打つてしまつたと連絡を受けたため、現地に赴き作業を中止させ、コンクリートが固まつた29日に持ち上げ、状況を確認した。その結果、寛永通宝2枚を採集した。6月1日に、改めて掘削した土を精査したところ、76枚の寛永通宝を確認し、出土した扁平な石を洗浄したが、肉眼で経石は確認できなかつた。

経塚の保存に関しては、平成27年11月4日に現地で再度確認の打合せを行い、11月10日から整備工事に着手して、12月1日に保護工事を完了した。この際、数回立会い、前述の掘削土を埋め戻す際に、10枚の寛永通宝を追加で発見している。

なお、この一連の掘削行為に関し、事業者である市防災集団移転推進課と工事主体者である大成建設に抗議を行い、市防災集団移転推進課から再発防止のための始末書を提出させている。

5. 発掘調査方法

調査はまず重機で表土を除去し、その後人力により遺構確認し、この段階で出土した遺物は、10m グリッドメッシュで取り上げた。その後、必要に応じて人力で精査し、遺構は半截し掘り上げている。SX13 については、最初にサブトレンチを入れて土層を確認し、その後層位ごとに遺物を取り上げた。

D区の遺構の平面測量は、GPS による基準点測量を行い、株ソキア・トブコン製の自動追尾トータルステーションと株CUBIC 製の測量専用ソフト「電子平板遺構くん」を使用した。B区についても、平面及び断面の測量には、上記の測量機器を使用したが、最終的な平面図は、株アスコに測量を委託し図化した。写真撮影は、各調査員がデジタルカメラを使用して撮影した。

6. 基本層序

調査の段階で、基本層序のための図面は作成していない。これは、確認調査の段階で、表土の厚さに差異はあるものの、表土の下が確認面である岩盤などの地山であったからである。確認調査の段階でトレントごとに地山が一様ではないことが多かったのは、地元で「あま岩」と呼ばれている岩盤が、風化などにより土壤化する様々な段階の状況で確認されたものと言える。また、一見するとローム層のような土も確認されたが、土壤化する過程の一阶段であることが確認できた。

以下、工事用のボーリング調査結果があるので、それを掲載しておくが、学術的裏付けはしていない。ボーリング箇所は第5図を参照されたい。

○ボーリング1（B区） 表土の下 0.11 m で暗褐色粘土（泥質岩片を少量含み、全体的に固結粘土状を呈する）、0.43 m で強風化褐色泥質岩（風化作用が著しく、軟質で土壤化が顕著だが、岩組織は残す）、3.93 m で風化黒灰褐色泥質岩（やや軟質化しており、全体的に亀裂が発達している）である。

○ボーリング2（A区） 表土の下 0.23 m で強風化灰褐色砂質凝灰岩（著しく軟質化し、粘土状を呈する。亀裂面は不明瞭である）である。1.35 m より明褐色になり、岩組織は明瞭になるが軟質である。

○ボーリング3 表土下 0.18 m で暗褐色粘土（凝灰岩礫を含む）、1.86 m で強風化明褐色泥質岩（著しく風化し、土壤化するものの岩組織は残す）である。

○ボーリング4（D区） 表土より 0.25 m で暗黒色有機質粘土（腐植物を含み、一部炭化物が混じりやや固結粘土状を呈する）、0.48 m で強風化褐色砂質凝灰岩（風化作用によりコアは軟質化著しく、粘土状を示す。亀裂面は不明瞭であるが岩組織はやや認められる）である。

7. 遺跡の名称について

本遺跡は櫛館跡であるが、読み方は、「むかいたて」「むかいだて」「きょうだて」など様々なものがあり乱れていた。そこで、調査前に調査員で協議を行い、遺跡の呼び名は、紫桃正隆著の『史料 仙台領内古城館』に準じ、訓読みの「むかいたて」に統一することとした。

8. 調査体制

気仙沼市では、震災復興計画が策定される中で、集団移転事業など多くの開発事業が、周知の埋蔵文化財包蔵地で行われることから、震災以前の文化財保護体制では、発掘調査を迅速に行うことができないことが見込まれた。

そこで、市では平成 24 年 4 月に専門職員 1 名を再任用するとともに、平成 25 年 1 月からは、地方自治法 252 条の 17 項に基づく職員派遣（自治法派遣）により、鹿児島県からの派遣職員 1 名と宮城県が復興事業推進のため採用した任期付職員 2 名の派遣を受け、発掘調査体制の整備を図った。さらに、平成 26 年度からは文化庁の協力による自治法派遣を 1 名増員し、平成 25 年 4 月及び平成 27 年 1 月に市任期付職員各 1 名を採用して、体制の強化を図った。また、発掘調査の規模や内容等を勘案し、宮城県教育委員会に専門職員の派遣を随時お願いし、平成 26 年度からは報告書作成のためにも派遣協力を得ている。

各年度の調査体制及び宮城県教育庁文化財保護課の調査協力は、以下のとおりである。

調査担当 気仙沼市教育委員会 生涯学習課文化振興係

平成 26 年度

『事務局』

生涯学習課長 菅原京子 主幹兼文化振興係長 昆野賢一

主幹 増田寛治 原田享二（市任期付職員）

主査 千葉絢子 森幸一郎（鹿児島県派遣） 石川 郁（市任期付職員 1 月～）

技師 鹿島直樹（県任期付職員 ～8 月）

平成 27 年度

『事務局』

生涯学習課長 菅原京子 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 増田寛治

主幹 原田享二（市任期付職員） 永濱功治（鹿児島県派遣）

主査 千葉絢子 山本克美（横浜市派遣） 石川 郁（市任期付職員）

『嚮館跡調査体制』

平成 26 年度

○調査担当

課長補佐 鈴木實夫 主幹 野崎 進（山梨県笛吹市派遣）

○調査協力 宮城県教育庁文化財保護課

加藤勝仁（神奈川県派遣）細川金也（佐賀県派遣）小山 朗 高橋洋彰 傳田惠隆（宮城県）

○調査補助員

石田俊一 伊藤喜利子 伊藤大雅 伊藤正治 岩渕敏明 尾形良信 小国義雄 小野寺功

小野寺信幸 小野寺勝 片桐卓雄 梶木政夫 木下富男 熊谷昭徳 小松文一 小松正芳

佐藤善一 佐藤孝夫 佐藤廣幸 菅原哲也 菅原元和 千葉春夫 照井 修 常世俊市

畠山国藏 畠山孝雄 三浦重雄 三浦八朗 守 千秋 横山久義 吉田俊男

平成 27 年度

○整理・報告書作成担当 主幹 野崎 進（山梨県笛吹市派遣）

○整理・報告書作成協力 宮城県教育庁文化財保護課 堤 英明（佐賀県派遣）

○整理作業補助員

窪田 朋 齋藤千歳 千葉修一 藤本 愛 村上英年 村上英博

平成 28 年度 印刷・製本 気仙沼市教育委員会 生涯学習課

第III章 発見された遺構と遺物

今回、縄文時代早期・後期、古代、近世の遺構が確認された。縄文時代のものは、堅穴建物跡、堅穴状遺構、掘立柱建物跡、落とし穴、フラスコ状土坑、集石土坑、土坑、ピット、溝状遺構などである。古代は堅穴建物跡、近世は掘立柱建物跡、堅穴状遺構、井戸跡、経塚、柵列などである。

以下、地区ごとに概要を報告するが、主な遺構データは一覧表としてまとめて掲載してあるので、参照されたい。

1. 遺構

(1) B区（第9～16図）

この調査区は、後世に水田として土地利用がなされたため、もともと凹凸があった地形を平坦に削平したと思われ、遺構の残存状況は遺構ごとに異なっている。

建物跡（第9図）

SB41は、北側3間、南側4間と不整な形態の掘立柱建物跡で、主軸方向はN-65°-Wである。遺物は少ないが、縄文時代の所産としておきたい。SB43の主軸方向はN-70°-Eである。

SI81は、ピットの配列から建物と推定し、径4m以上の堅穴建物跡が削平されたものと考えた。

SI40は、堅穴建物跡と考えられる。一辺が6.1mで、遺物は縄文土器が1点出土しているのみである。ただ、SX13の包含層から古代の坏などがわずかに出土していることから、古代の遺構があつても不思議ではないことから、根拠はないが、古代の所産としておきたい。

集石土坑（第10図）

SX55は、当初集石土坑として確認したが、集石を取り上げた段階で、土器が複数出土し、小さな堅穴状の遺構となった。小堅穴は、2.7×1.9mと文字通り小規模なもので、土器から縄文時代早期とを考えられる。集石は82点の石が出土したが、一部は小堅穴の覆土の石を含んでいる可能性があり、やや大きさにばらつきが見られ、火熱や加工の痕跡は認められなかった。総体的に、長軸5～10cm、短軸4～8cmの自然礫が主体で、概ね亜円形の石が選別されていることが窺える。重量は200～400gに集中する。

SX42も集石土坑で、79点の石を確認し、76点が完存していた。火熱や加工の痕跡は認められず、長軸5～8cm、短軸4～7cmの概ね亜円形の自然礫が選別されている。重量は100～300gのほぼ範疇である。

埋設土器（第10図）

SX66は埋設土器で、重機で表土を除去した段階で確認できたもので、後世に上部を削平されている可能性が高い。周間に柱穴の配列を見つけることができなかつたので、屋外埋設土器としておきたい。

落し穴（第10図）

SK56は落し穴で、底面に小ピットが1個見つかった。覆土の状況から、縄文時代早期の可能性が高い。

井戸跡（第10図）

SE60は近世の井戸跡と思われ、あまり深くないことから、溜め井戸かと思われる。

土坑（第11～14図）

貯蔵穴と考えられるプラスコ状土坑は、13基確認された。削平されているため、深さは様々であり、最大で1.2mである。平面形態は概ね円形に近いが、多くは上端が崩落していた。比較的に残存状態がよいのがSK62で、上端に比べ下端の大きさが倍近くになっている。底面に小ピットを有するのは、SK27とSK62だけである。この他、土坑は35基中、22基を図化した。覆土の状況から、縄文時代と近世のものと考えている。

柵列（第15図）

柵列は、6列が見つかった。SA47・48は1個ピットが欠けるが、5～6個のピットが柱筋を揃えて南北に並ぶことから、同時期のものと考えられる。主軸方向は、N-6°-Wである。SA50～52は4個、SA54は3個のピットが並び、SA50の主軸方向はN-70°-E、SA52の主軸方向はN-69°-Eで軸方向が同じで、また、SA51の主軸方向はN-87°-E、SA54の主軸方向がN-84°-Eとほぼ同じ東西方向であることから、それぞれ関連性があるのではと思われる。年代の根拠は希薄だが、近世の所産と思われる。

包含層（第16図）

SX13は、確認調査時に多くの遺物が黒色土の広がりで出土したことから、本調査に入る大きな契機となった包含層（埋没谷）である。調査区内では、表土から深さ最大1.5mを測り、幅17mほどの谷が、南から北に向かって下がっている。サブトレレンチ調査により、大きく3層に分かれることが判明したため、層位ごとに遺物を取り上げている。土器は、重量換算で全体の約8割が出土した。

（2）D区（第17～20図）

縄文時代の遺構は、落とし穴3基である。SK01・02は、いわゆるTピットの下部と思われ、本来は上部が大きく開く形状だったと想定される。Tピットは、本吉町内では平貝遺跡で1基が確認されている。SK07は底面に小穴が2つを有する落とし穴である。

その他、掘立柱建物跡が3棟、竪穴状遺構1軒、井戸跡1基が確認されたが、概ね近世の所産とみられる。

SB10は、東西2間、南北6間の南北棟で、すべての柱穴で柱根跡を確認している。主軸方向はN-19°-Wで、平面規模は、北側柱列で総長3.82m、西側柱列で総長11.46mである。また、北側で間柱の柱穴を5個確認したことから、出入口などの施設があったと推測される。遺物は煙管が1点出土し、小泉編年の第III段階である。SB11の主軸方向は、N-20°-Eである。

SI08は削平されていたため、遺構確認段階で不整形であった。もともと掘り込みがほとんどない建物と想定されるが、柱穴などの痕跡は見つかっていない。土間状の硬化面が中央部に広がっていた。主軸方向は、N-17°-Wである。遺物は、陶磁器、釘や青銅製品が少量出土し、陶磁器は概ね17世紀後半から18世紀前半階のもの、煙管は小泉編年の第II段階である。

SK05は、その形状や深さから溜め井戸と考えられ、SB12はその周囲にあることから、井戸の間連施設かもしれない。主軸方向は、N-21°-Wである。

（3）経塚（第21図）

D区の北側、B区の南東端で発見されたもので、本吉町時代に行われた石碑の悉皆調査からは漏

れていたもので『本吉町の石碑』には掲載されていない。調査前には竹林となっており、周囲の墓石群は確認されていたものの、竹林の伐採後、塚状の高まりと頂部に供養碑が見つかり、その碑文から経塚（礫石経）と判断した。

経塚は、長軸（東西）7.3 m、短軸（南北）6.7 m、比高差は西側で1.5 m、東側で1.1 mの東西にやや長い長方形を呈する。東側の斜面の下部が緩やかな傾斜となっているため、東側が主たる登り口と推定される。表面には、扁平な河原石が散乱していた。頂部の標高は33.7 mで、調査区では一番高い場所に築造されている。表土は最大で約50 cmであるが、調査前に確認された竹や樹木の根によって攢乱されたものと思われ、元々は10 cm程度ではなかったかと推測される。

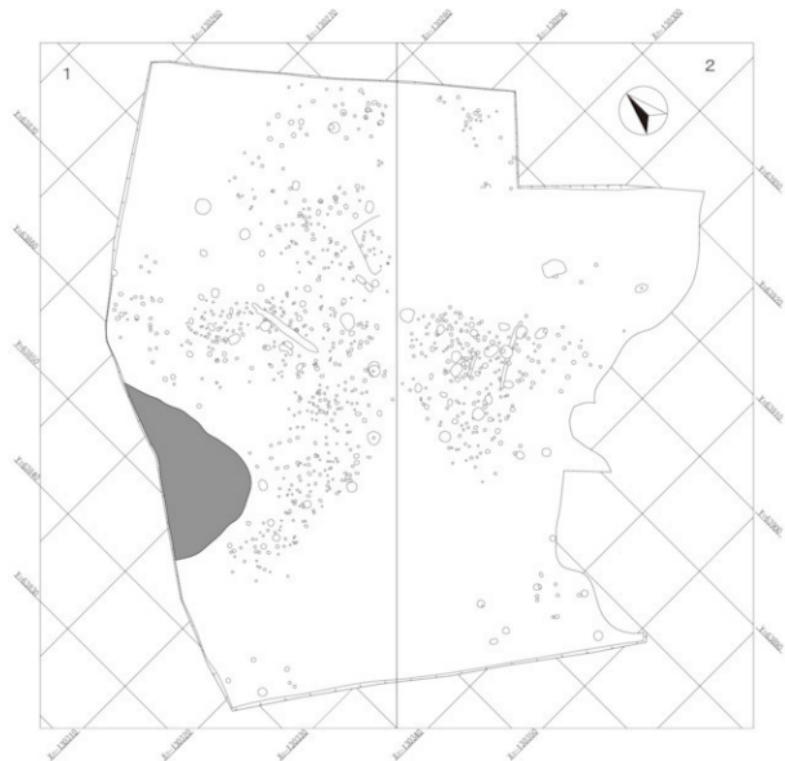
築造にあたり、地山面まで表土を削平し、五段階の盛土を版築状に掘き固めている。頂部の表土を除去すると、最上部の盛土に、蓋石のような平坦で大形の石が置かれ、周囲に小形の石が囲むように設置されていた。大形の石の上には玉石のような石が、表土から10 cmぐらいの深さから下にある程度固まって確認された。

遺物は、古銭が出土しただけで、他の人工的な遺物は出土していない。ただし、扁平な河原石が地表面やトレンチから採取できることから、肉眼や一部赤外線による観察をしたが、墨書は確認されなかった。古銭はすべてを発掘調査で確認したわけではないが、明確な集中は認められず、蓋石状の大形の石の周囲から平面や層位的にランダムに出土している。これらは、蓋石状の大形の石を設置する前後の段階で、地鎮的目的で古銭を撒いたものと思われ（散銭・撒き銭）、築造時に用意できた銭を使用したと考えられる。

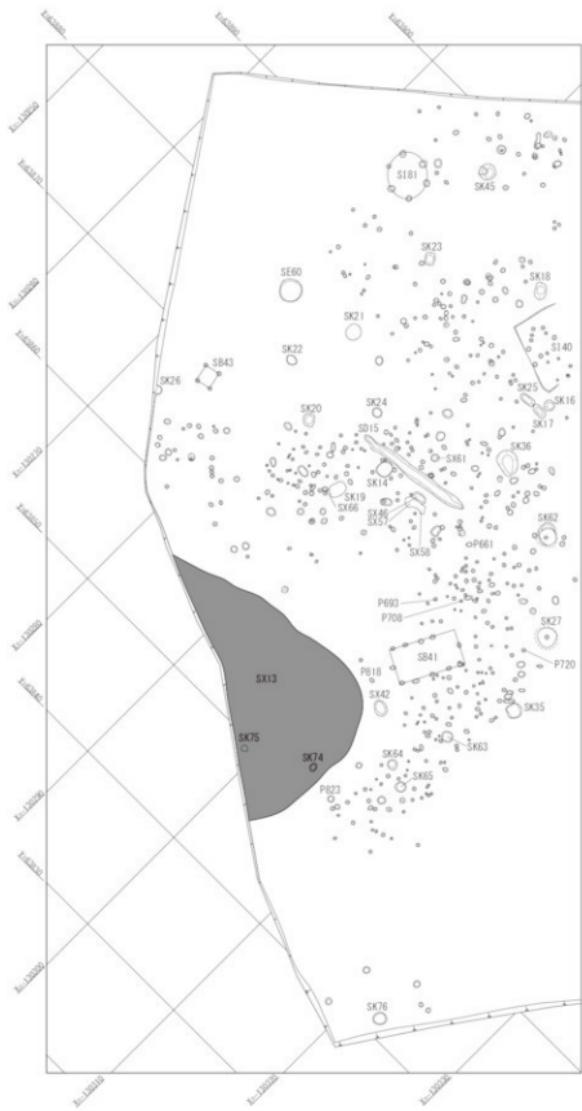
古銭は122点が出土し、渡来銭の元豊通寶（宋錢、篆書体、始鑄1078年）1点、古寛永通寶96点、新寛永通寶（文銭）23点、寛永通寶（新古の判読不明）2点である。古寛永通寶は、万治2（1659）年まで鋳造されたもので、新寛永通寶の文銭は寛文8（1668）年から天和3（1683）年の16年間に亀戸鋳造所だけ造られたものである。その後、元禄10（1697）年から、無背の新寛永通寶の鋳造が始まるところから、経塚の築造年代は、文銭の始鑄以降の寛文期から、無背の新寛永通寶の流通が始まる元禄期までと、概ね古銭から限定される。

一方、頂部で確認した供養碑は、長さ約165 cm、幅約65 cm、厚さ約30 cmで先端がやや尖った板状（いわゆる尖頂方形）の自然石を使用し、細部に若干の加工があり、正面上部にせん刻された心と137文字が彫り込まれていた。肉眼では判読が難しい文字もあり、拓本をとったところ、図版10のように判読できた。要約すると、大乘妙典一千部の読誦供養に、子孫繁栄を願って法華經八卷分を写経した石を入れた塚を、延寶7（1679）年に小野寺宮内が造立したとある。古銭の内訳結果とも顔額がなく、信憑性は高いと言えよう。

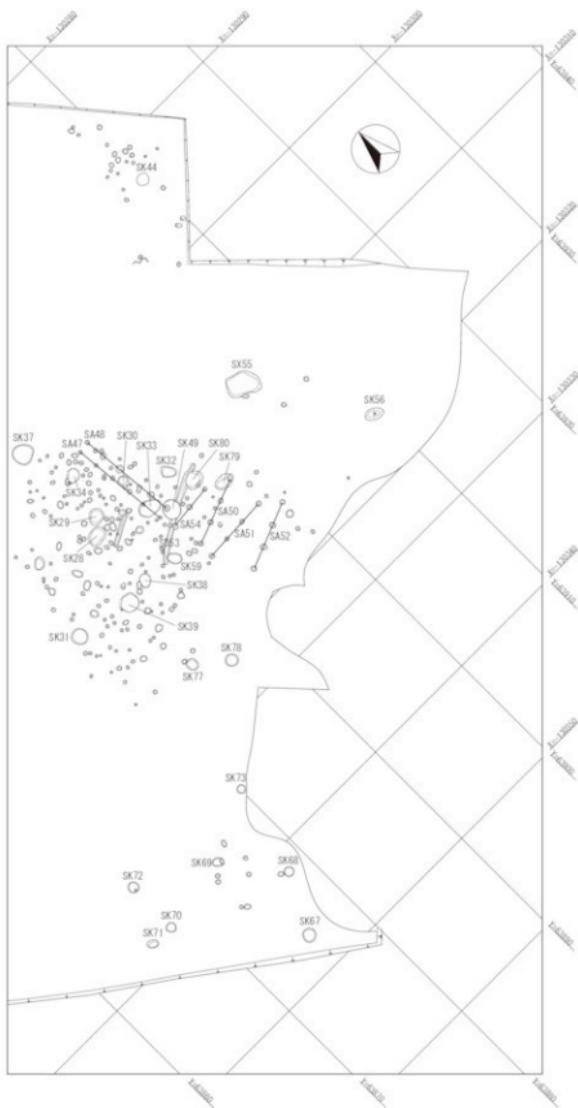
この経塚は市内で最古の経塚（礫石経）であり、小野寺宮内については後述するが、築造者が大肝入を務めた人物と特定できることから、一部トレンチ調査を実施しただけで、保存に至っている。



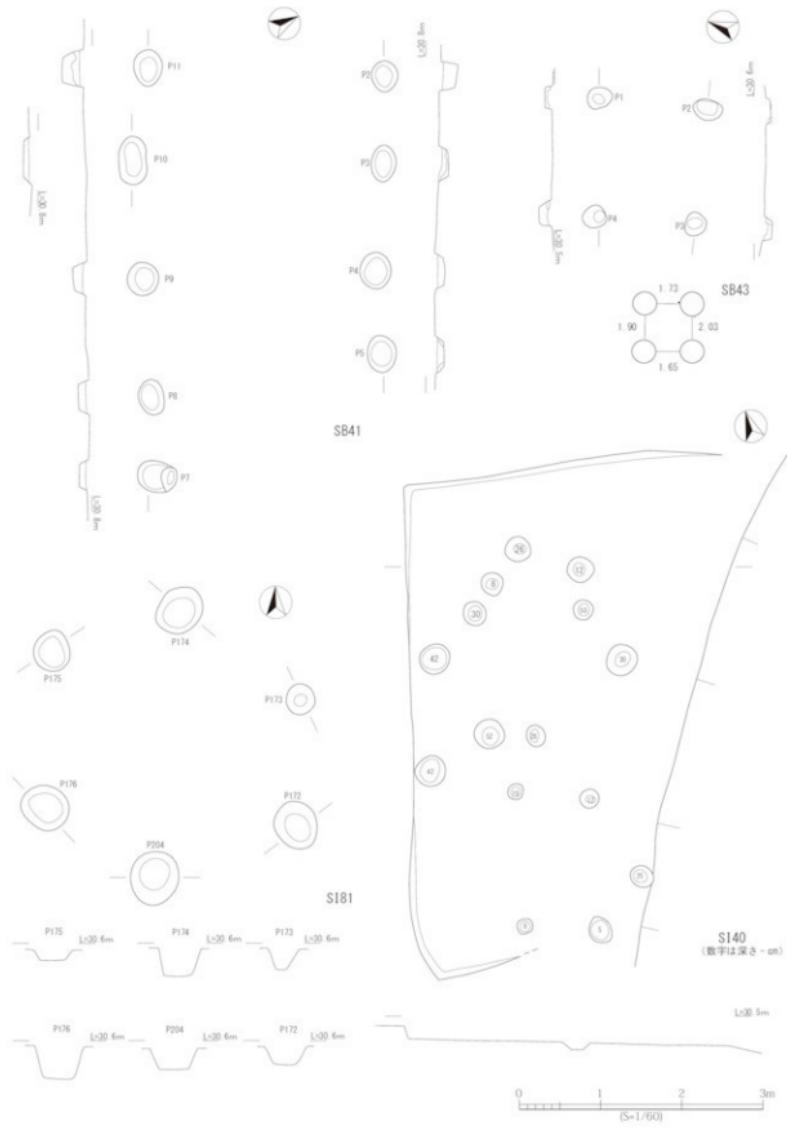
第6図 B区造構配置図(1/600)



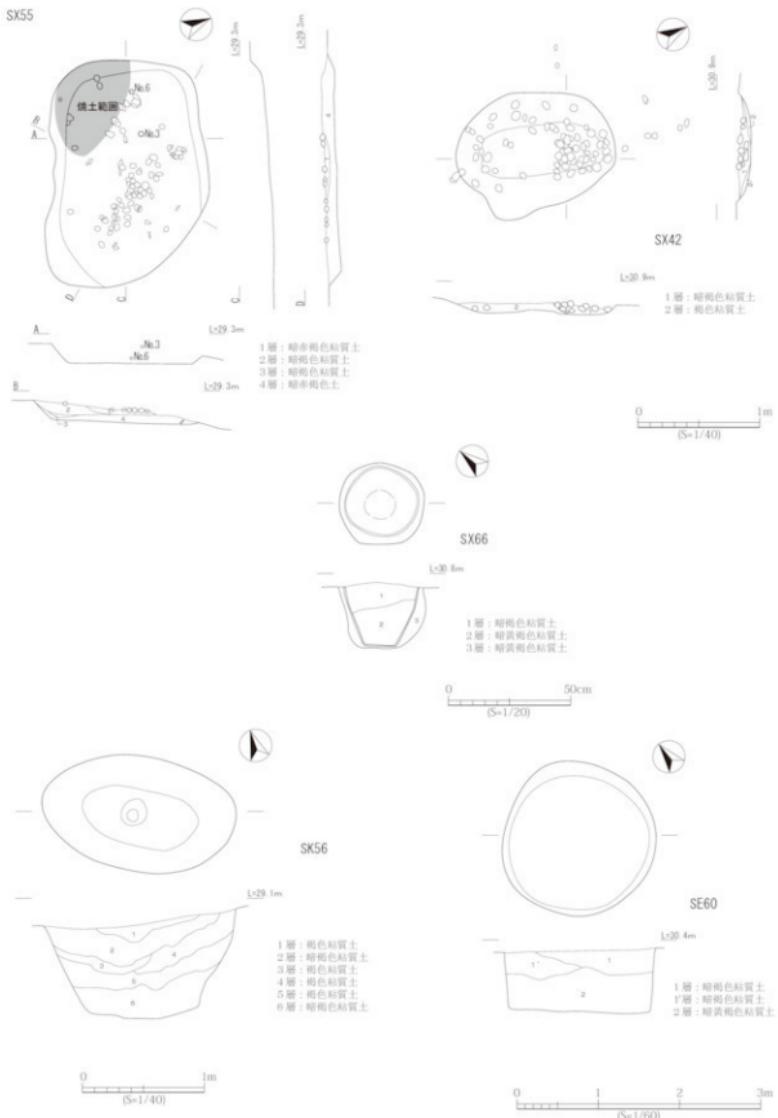
第7図 B区詳細遺構配置図1 (1/400)



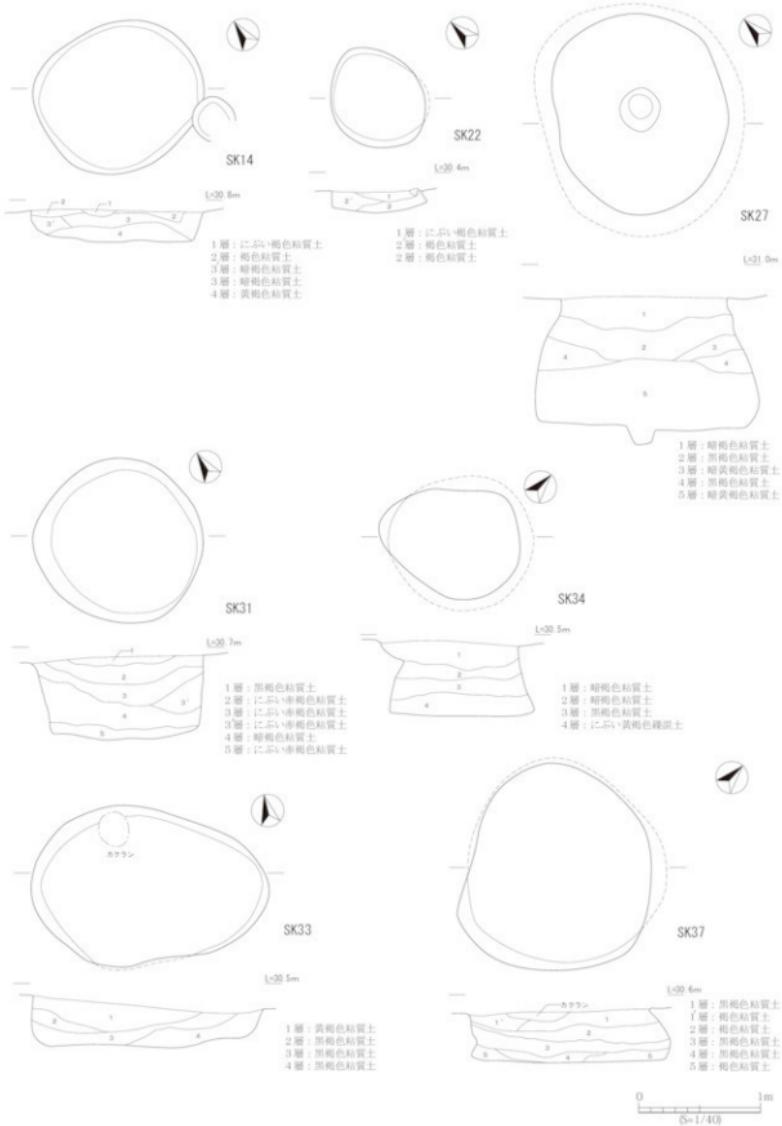
第8図 B区詳細遺構配置図2 (1/400)



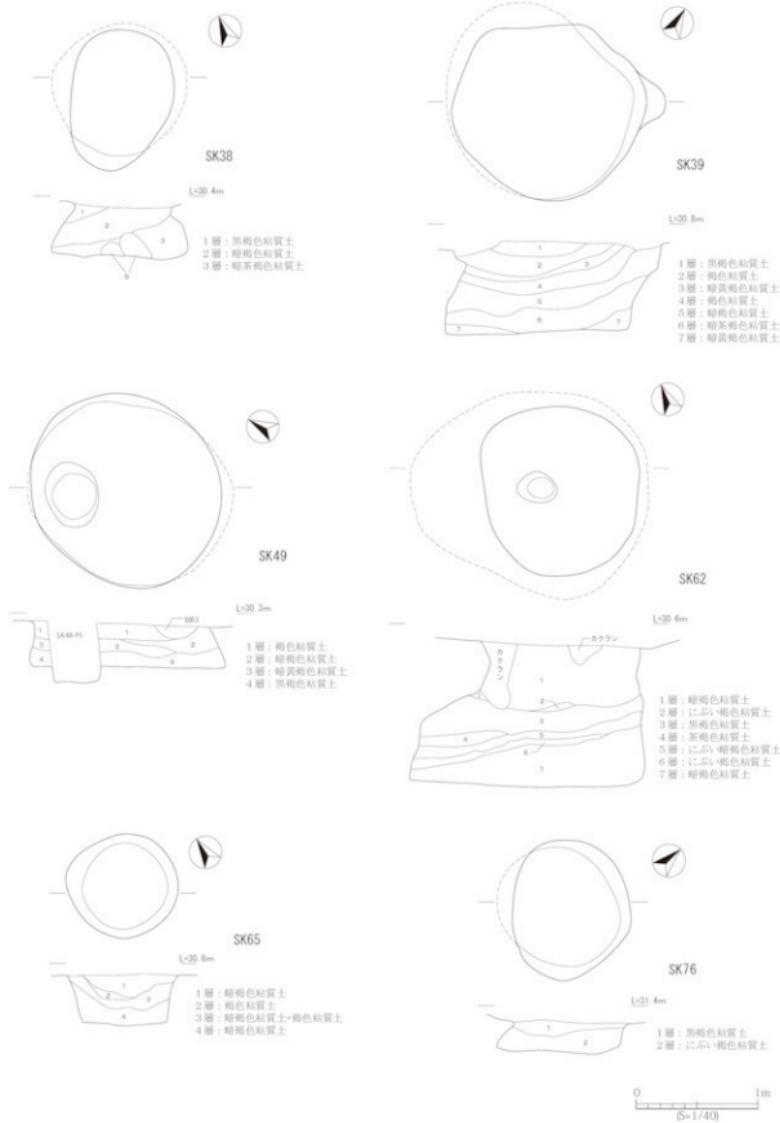
第9図 B区遺構実測図 1



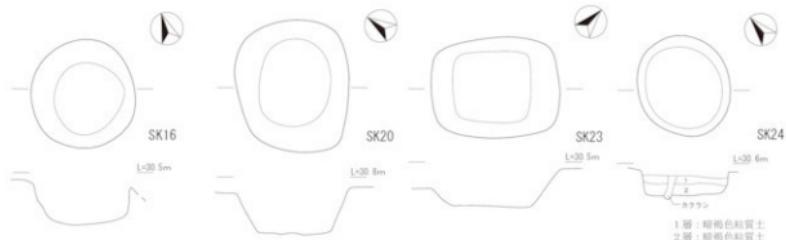
第10図 B区遺構実測図2



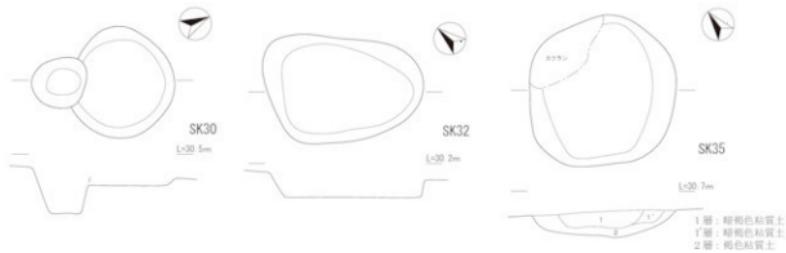
第 11 図 B 区遺構実測図 3



第12図 B区遺構実測図4



1層：暗褐色粘質土
2層：暗褐色粘質土



1層：暗褐色粘質土
1'層：暗褐色粘質土
2層：褐色粘質土



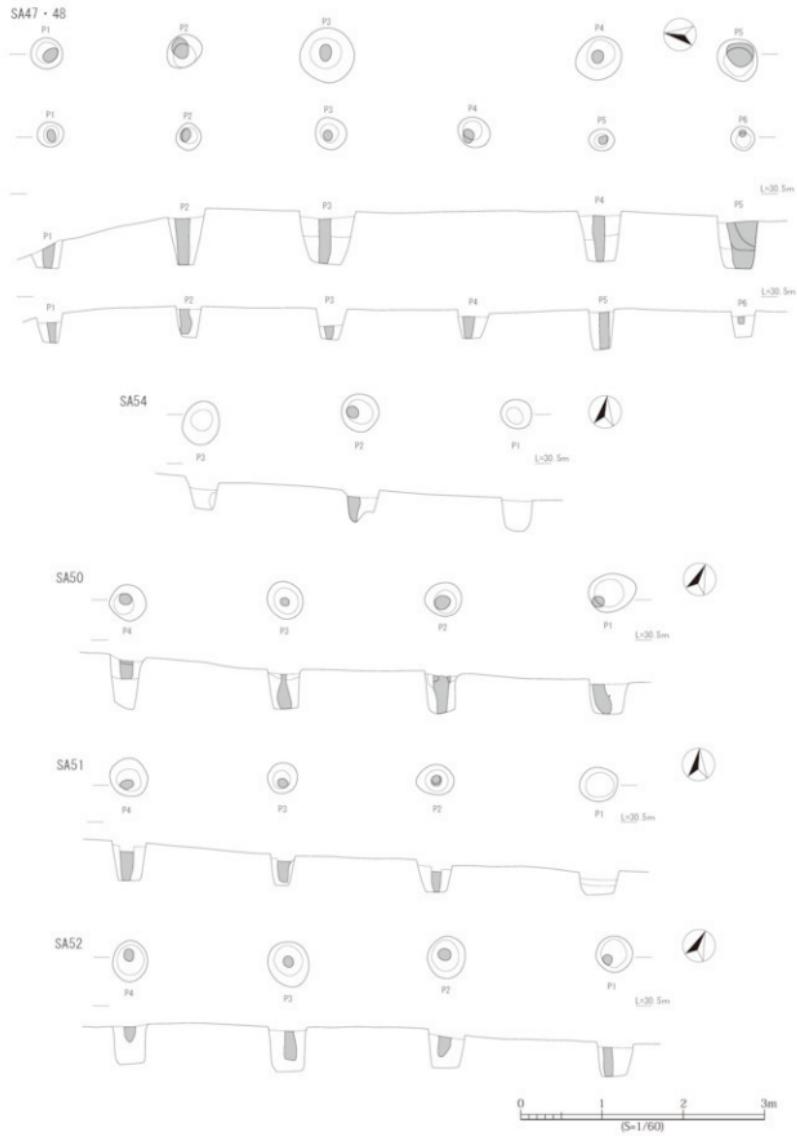
0 1m
(S=1/40)

第13図 B区遺構実測図5



0 1m
(S=1/40)

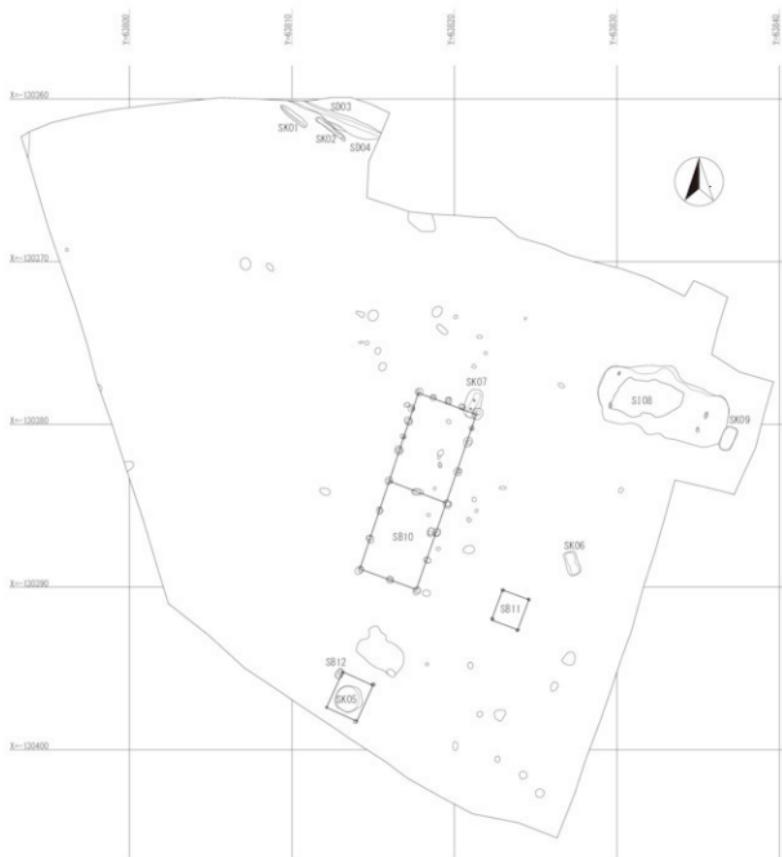
第14図 B区遺構実測図6



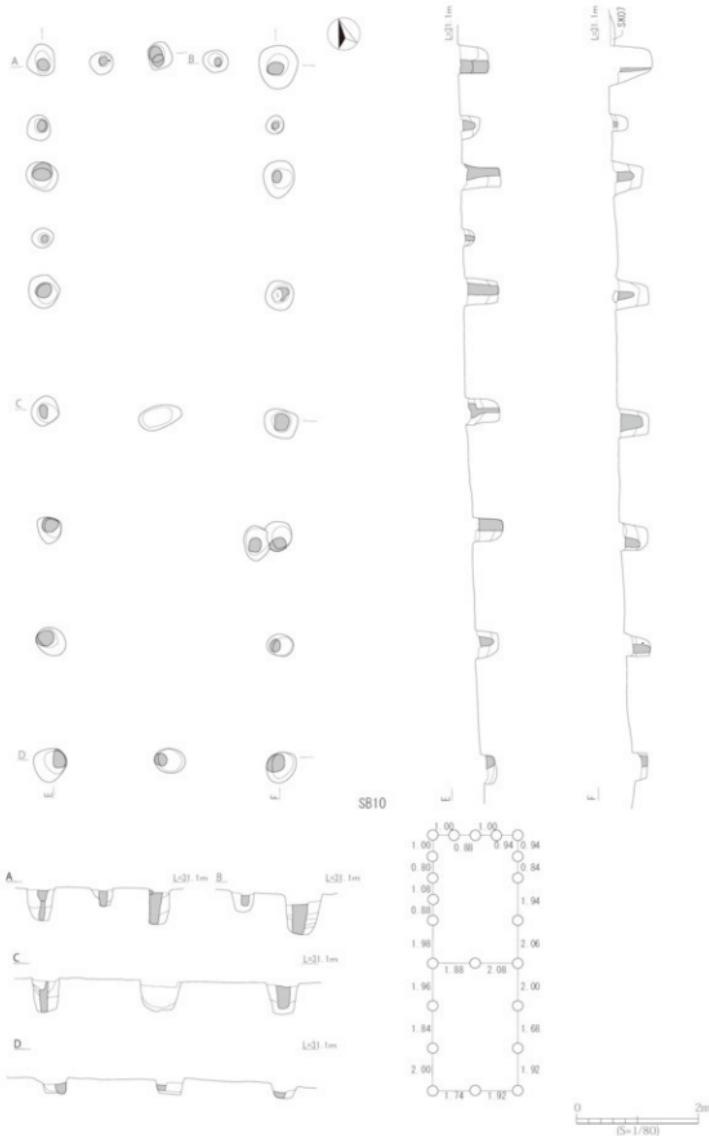
第15図 B区遺構実測図7



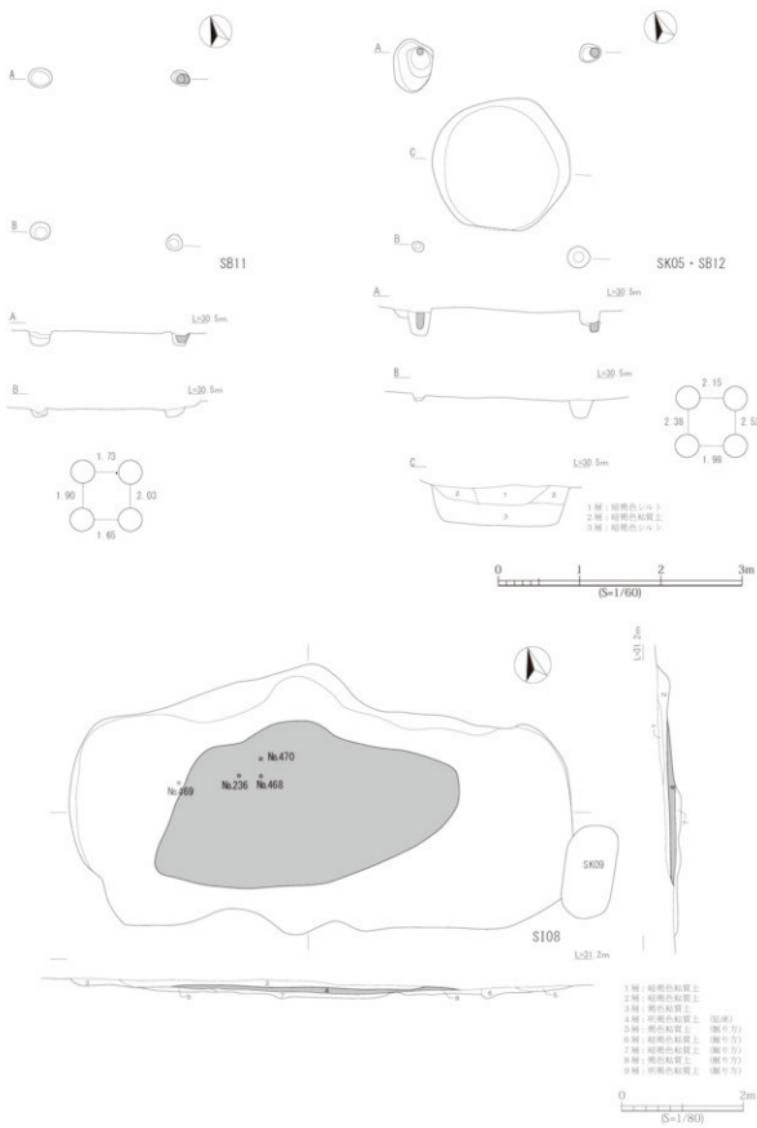
第16図 B区遺構実測図8



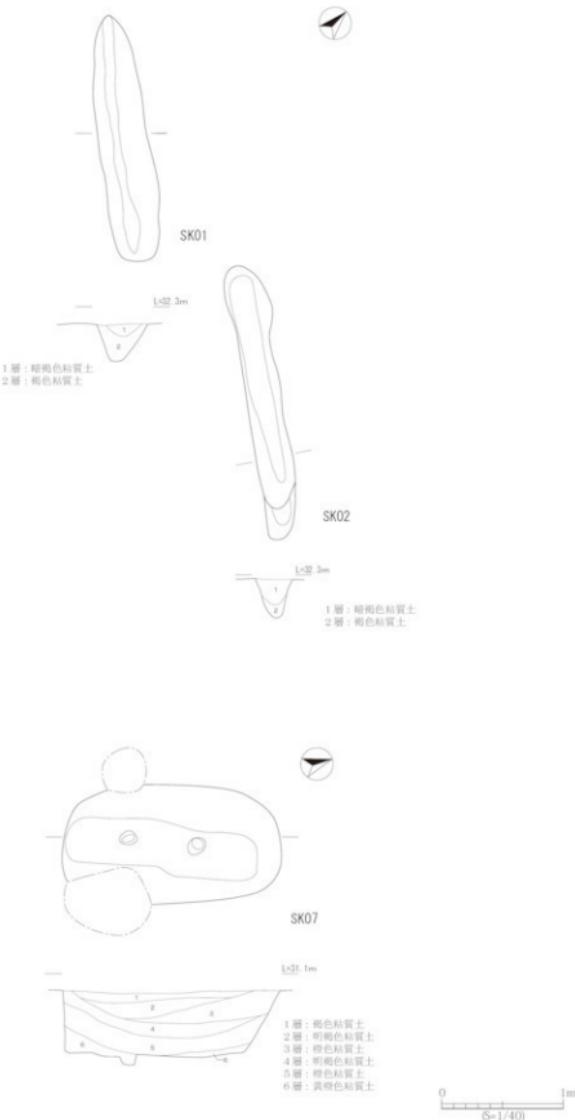
第17図 □区詳細造構配置図(1/300)



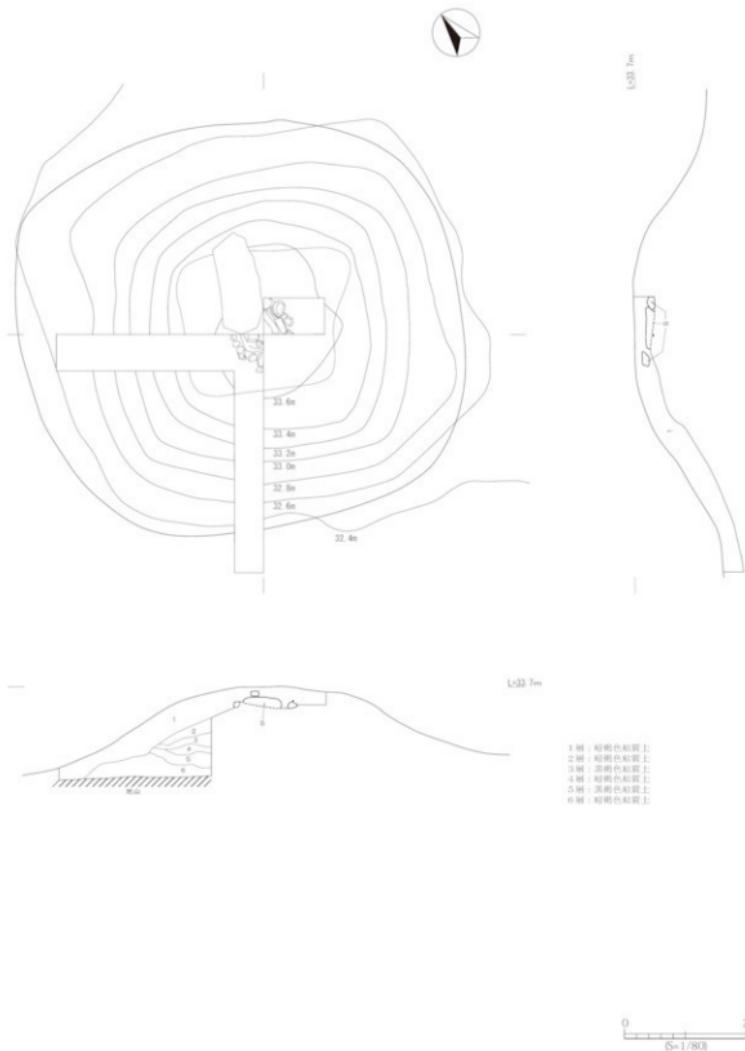
第18図 D区遺構実測図1



第19図 D区遺構実測図2



第20図 D区遺構実測図3



第21図 経塚実測図

第1表 遺構観察表

遺構名	地・区	特・代	種・型	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	形・状	遺・物	備・考
SK49	B区	古代?	規六建物跡					陶文1点	1.296×1.1mの方形か?
SK50	B区	古文?	規六建物跡?					円形?	ピットの配列から、規4m程度の盤穴か?
SK51	B区	古文?	施柱建物跡					有	1×1間
SK53	B区	不明	施柱建物跡						1×1間
SK54	B区	古文?	貯藏穴	1.4	1.2	0.3	円形	有	
SK56	B区	古文?	土坑	0.8	0.6	0.3	円形		
SK57	B区	古文?	土坑	1.3	0.7	0.2	長方形		
SK58	B区	近世?	土坑	1.5	0.9	0.4	長方形	陶罐2点	
SK59	B区	近世?	土坑	1.1	0.9	0.4	長方形	陶罐2点	
SK61	B区	古文?	土坑	1.3	1.2	0.1	圓内	陶罐石	
SK22	B区	古文?	貯藏穴	0.9	0.2	0.2	圓内		
SK23	B区	近世?	土坑	1.1	0.8	0.3	長方形	瓦(瓦片)	
SK24	B区	古文?	土坑	0.9	0.6	0.2	圓内	有	
SK25	B区	不明	土坑	1.3	0.7	0.2	長方形		
SK26	B区	古文?	土坑	—	0.8	0.5	—	有	柱穴?
SK27	B区	古文?	貯藏穴	1.7	1.4	1.2	圓内	有	
SK28	B区	古文?	土坑	0.9	0.9	0.3	長方形		
SK29	B区	古文?	土坑	1.4	1.2	0.1	不整円形	有	
SK30	B区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	円形		
SK31	B区	古文?	貯藏穴	1.4	1.3	0.7	円形	陶文少量	
SK32	B区	古文?	土坑	1.5	0.9	0.2	圓内		
SK33	B区	古文?	貯藏穴	2.0	1.3	0.4	圓内	有	
SK34	B区	古文?	貯藏穴	1.2	0.9	0.6	不整円形	有	
SK35	B区	古文?	土坑	1.2	1.2	0.2	圓内	陶文少量	
SK36	B区	不明	土坑	2.2	1.7	0.2	梯形		
SK37	B区	古文?	貯藏穴	1.7	1.5	0.4	不整円形	有	
SK38	B区	古文?	貯藏穴	1.2	0.8	0.5	梯形(上腰)	有	
SK39	B区	古文?	貯藏穴	1.6	1.4	0.8	圓内	有	
SK43	B区	不明	施柱建物跡						有 1×1間
SK45	B区	古文?	土坑	1.3	1.3	0.4	円形	陶文1点	
SK46	B区	不明	土坑	1.2	0.7	0.2	圓内		
SK49	B区	古文?	貯藏穴	1.7	1.5	0.4	圓内	有	
SK56	B区	古文?	落し穴	1.6	0.9	0.9	圓内		
SK59	B区	古文?	土坑	1.3	0.9	0.2	圓内	陶文1点	
SK62	B区	古文?	貯藏穴	1.4	1.3	1.2	圓内	有	底面は2.0×1.7m
SK63	B区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	圓内		
SK64	B区	不明	土坑	0.9	0.8	0.1	圓内		
SK65	B区	古文?	貯藏穴	0.9	0.9	0.4	円形	有	
SK67	B区	不明	土坑	1.2	1.1	0.1	圓内		
SK68	B区	古文?	土坑	0.8	0.8	0.2	円形	有	
SK69	B区	古文?	土坑	1.0	0.7	0.1	圓内	有	
SK70	B区	不明	土坑	0.8	0.8	0.2	圓内		
SK71	B区	不明	土坑	1.0	0.7	0.2	圓内		
SK72	B区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	円形		
SK73	B区	古文?	土坑	0.8	0.7	0.1	圓内	有	
SK74	B区	古文?	土坑	0.7	0.6	0.4	圓内	有	
SK75	B区	古文?	土坑	0.9	0.9	0.2	梯形	有	
SK26	B区	古文?	貯藏穴	1.2	1.0	0.3	圓内	有	
SK77	B区	古文?	土坑	1.0	0.9	0.2	圓内		
SK78	B区	古文?	土坑	1.1	1.0	0.2	圓内		
SK79	B区	古文?	土坑	1.5	1.0	0.1	圓内	有	
SK80	B区	古文?	土坑	1.6	(1.37)	0.1	長方形	有	
SK80	B区	近世?	井戸?	1.9	1.9	0.8	円形	有	詰め井戸か?
SK15	B区	近世?	匂	10.4	1.0	0.1			
SK83	B区	不明	匂	8.6	0.6	0.1		十握は匂入?	
SK47	B区	近世?	縄列					有	南北8.6m
SK48	B区	近世?	縄列					陶文	南北8.6m
SK50	B区	近世?	縄列					南北6.9m	
SK51	B区	近世?	縄列					陶文	東西6.8m
SK52	B区	近世?	縄列					陶文	東西6.0m
SK54	B区	近世?	縄列					陶文	東西8.9m
SK53	B区	古文?	剖古層	(19.0)	(17.0)	(1.9)			古代の土器有
SK32	B区	古文?	陶瓦?	1.2	1.0	0.1	圓内形	有	
SK55	B区	古文?	陶文状遺構	2.7	1.9	0.3	圓方形容	有	上層に集石あり。早期
SK63	B区	古文?	土坂?	1.0	1.0	0.1	圓内		
SK84	B区	古文?	土坂?	0.9	0.8	0.1	圓内	有	
SK86	B区	古文?	湖段土器	0.4	0.3	0.3	圓内	十握1点	
SK91	D区	古文?	土ピット?	2.0	0.3	0.2	長方形		
SK92	D区	古文?	土ピット?	2.5	0.3	0.2	長方形		
SK93	D区	古文?	匂	(5.0)	1.0	0.2		陶文1点	
SK95	D区	古文?	井戸?	1.7	1.6	0.5	圓内		詰め井戸か?
SK97	D区	古文?	落し穴	1.8	1.0	0.5	圓孔長方形容		深さ0.1mのピット2個あり
SK98	D区	近世?	匂	8.2	4.4	0.3	長方形		
SK10	D区	近世?	施柱建物跡						2×6間
SK11	D区	近世?	施柱建物跡						1×1間
SK12	D区	近世?	施柱建物跡						1×1間 SK5と伴うものか?
總深	B区	近世?		7.3	6.3		長方形	古跡	高さ1.45m

2. 遺物

(1) 繩文土器（1～233、写真図版12～21）

櫛館跡から出土した縄文土器（約151kg）のうち、233点を図化し報告する。出土した縄文土器の大多数はSX13包含層からの出土である。本報告では、土器の特徴を基に11分類し、遺構とSX13包含層に分け、それらの特徴について述べる。なお、個別土器の特徴については第2表を併せて参照してもらいたい。

- 1類 土器の器面両面に地文を持つ一群
- 2類 土器胎土に纖維を含む土器の一群
- 3類 隆帯による区画と、区画する隆帯に沿う刺突を有する一群
- 4類 隆帯による区画や文様を意匠する一群
- 5類 隆帯と沈線、または沈線で区画や文様を意匠する一群
- 6類 平行する数条の沈線で文様を意匠する一群
- 7類 幅の狭い沈線で縦または横に区画し、沈線間に磨消縄文・充填文を施す一群
- 8類 幅広の無文帯と胴部に地文を持つ一群
- 9類 平行する数条の沈線とそれを区画する沈線を持つ一群
- 10類 胴部に刺突文を多用する一群
- 11類 地文のみの一群

遺構・遺構保存地区（1～24、写真図版12・13）

遺構より出土した縄文土器のうち、24点を図化し報告する。遺構から出土した土器はこのほかにもある（約28kg）が、小破片あるいは摩耗が著しいため、図化し報告することが困難であった。

1～6はSX55小竪穴・集石出土の土器である。1は胴部破片で、器面の表裏とともに地文を施す。2～6は土器胎土に纖維を含む土器である。口縁部に刻みを持つ。2は補修孔と考えられる穿孔がある。

7～9はSK14土坑出土の土器である。7は幅の狭い沈線で区画し、磨消縄文を施す。8は頸部に無文帯を持つ。9は粗製土器の底部で、木葉痕や網代の圧痕は確認できない。

10はSK24土坑出土の土器である。地文端部に縄を押圧する。

11・12はSK37土坑出土の土器である。地文と沈線文を施す。

13～16はSK38土坑出土の土器である。13・14は沈線文を施す。15は磨消縄文である。16は地文のみである。

17～19はSK69土坑出土の土器である。17は沈線を施す。18・19は羽状縄文である。

20・21はSK78土坑出土の土器である。平行する数条の沈線文とそれを区画する沈線文を施す。遺構から出土した9類の土器はSK78土坑からのもののみである。

23はSX66土坑から出土した土器である。網目状の撚糸文が施される。埋設土器と考えられる。

24は遺構保存地区で出土した土器である。沈線による区画や文様が描かれる。口縁部と胴部に接点はないが、土器の特徴が共通するため、同一個体と考える。

SX13 包含層上層（25～128、写真図版 14～17）

上層から出土した土器（約 69 kg）のうち、104 点を図化し報告する。出土した土器の量は上層が最も多いため、ほとんどの土器が破片資料であり、器形を復元できたものは少ない。

25～28 は土器の器面両面に地文を持つ土器（1 類）である。口縁部には、刻みを持つもの（25～27）がある。また、25 に穿孔があり、補修孔とみられる。

29～34 は土器胎土に纖維を含む土器（2 類）である。口縁部には刻みを持つもの（29・30）がある。また、口縁部直下や頸部近くに縄の押圧を持つもの（29・31）もみられる。

35・36 は隆帯による区画と、区画する隆帯に沿う刺突を有する土器（3 類）である。刺突は隆帯の上面から刺突される。3 類の土器は上層で確認されたもののみである。

37～45 は隆帯による区画や文様を意匠する土器（4 類）である。4 類に分類した土器には区画する隆帯に 2 個 1 対の刻みを施すもの（39・40）や、隆帯へ連続する刺突を施すもの（37・44）が特徴的にみられる。また、隆帯の結節点に円形の刺突を施すもの（37・39・40）もある。隆帯には、隆帯に沿う沈線を持つもの（37・38・41）もみられる。器形を復元できたものは少ないが、胴部中程に最大径を持ち、屈曲し口縁部に向かい外反するもの（44）と口縁直下の隆帯部分に最大径があるもの（45）がある。

46・47 は沈線で区画や模様を意匠する土器（5 類）である。

48～80 は平行する数条の沈線で文様を意匠する土器（6 類）である。沈線文様は口縁部や胴部上半に半円（49・50・52・53・63）や円（56～58）、渦巻模様（51・80）などを描くものが多くみられる。また胴部には半円や円、渦巻模様を起点に縦位方向の平行する数条の沈線を描くものが多くある。口縁部は平口縁と緩やかな波状口縁の両者がみられるほか、48 のような 4 単位の突起を持つものもある。

81～87 は沈線で縞または横に区画し、沈線間に磨消縄文を施す土器（7 類）である。沈線による区画は直線的なもの（81～84・87）のほか、楕円による区画（85・86）もみられる。区画沈線の転換点と転換点の間に刺突がなされるもの（81・82・84・87）がある。7 類には深鉢や鉢のほかに蓋や壺がみられる。

88～99 は幅広の無文帯と胴部に地文を持つ土器（8 類）である。8 類の土器は口縁部下に無文帯を持ち、縞文や撚糸文などの地文を持つほか、無文帯や口縁部直下に縄の押圧や沈線による区画がなされるもの（88・89・91・94）がみられる。92 は地文部分がないが、無文部分の下に地文部があることを想定し、8 類として分類した。

100 は平行する数条の沈線とそれを区画する沈線を持つ土器（9 類）である。

101 は胴部に刺突を多用する土器（10 類）である。破片資料であり、全体を把握することができないが、円形の刺突を胴部全面に施すものとみられる。

102～118 は地文のみの土器（11 類）である。多くは単節または無節の縒文による施文であるが、絡条体（116）や合撚の縒（104）など多様な原体が使用されている。また、地文を施した土器の器面に別の縒の圧痕を施すもの（102）もみられる。11 類には深鉢や鉢のほかに、橋状の把手を持つ蓋（117・118）がある。

119～128 は上記分類に含まれない土器である。119 は地紋のみの小形壺である。また、頸部は

磨きにより調整される。120・121はミニチュア土器である。120は底部に木葉痕を残す。122は小形の深鉢である。地文と沈線を施す。123～128は深鉢の底部である。123・126・127は木葉痕、124・125・128は網代圧痕を残す。

SX13 包含層中層（129～212、写真図版 18～21）

SX13 包含層中層から出土した土器（約 51 kg）のうち、84 点を図化し報告する。SX13 包含層中層から出土した土器は上層出土土器に比べやや出土量が少ないが、接合により器形や文様を確認できる個体はより多い。

129は土器の器面両面に地文を持つ土器（1類）である。口縁部に刻みを持つ。中層出土土器で1類に分類できた土器は、この1点のみであった。

130～140は土器の胎土に纖維を含む土器（2類）である。単節縄文の地文を主体とするほか、縄の押圧（132）や羽状縄文（136～138）もみられる。

141～151は隆帯による区画や文様を意匠する土器（4類）である。3類に分類した土器には特徴的な隆帯に伴う2個1対の刻み（144～146）や隆帯に沿う沈線（141～143・149・150）のほか、橋状の把手（141）や鈎状の突起を持つもの（143・144）がある。

152～158は隆帯や沈線、または沈線で区画や文様を意匠する土器（5類）である。153や154は隆帯と沈線で区画を施す。また、152は沈線による区画とともに、屈曲する部分に隆帯を貼付け2個1対の刻みを施す。155～158は沈線による区画をするほか、155のように鈎状の突起を持つものもある。

159～170は平行する数条の沈線で文様を意匠する土器（6類）である。文様は口縁部直下や胴部上半に半円（159～161）や渦巻模様（162・165・166）を施すほか、胴部には縱位方向の沈線文を施す。

171～178は幅の狭い沈線で縦または横に区画し、沈線間に磨消縄文・充填文を施す土器（7類）である。174のように沈線間にある区画線転換点に刺突を施すものがある。口縁部は波状口縁が多くみられ（171～175・177）、器形は胴部上半から頸部に向けすぼまり、頸部から口縁部に向かい外反するもの（172・177）がみられる。胴部沈線文より下は地紋のみ（177・178）である。

179～184は幅広の無文帶と胴部に地文を持つ土器（8類）である。地文には縄文や撚糸文がみられる。また、地文と無文帶の境界や口縁部直下に縄の押圧をするもの（180～182）がみられる。口縁部は平口縁と波状口縁の両者がある。

185～203は地文のみを持つ土器（11類）である。地文の主体は単節縄文であるが、そのほかに撚糸文などがみられる。器形は全体が分かるものは少ないが、底部から口縁部に向かい緩やかに立ち上がり、口縁部直下でやや内反する。

204～212は上記分類以外の土器である。204は壺の頸部とみられる破片資料で、内面に2条の沈線文を持つ。205はミニチュア土器である。文様はみられない。206～212は深鉢の底部である。206～208は木葉痕、209～211は網代圧痕を残す。212は不明瞭であるが、何らかの圧痕を撫でて、調整する。

SX13 包含層下層（213～233、写真図版 21）

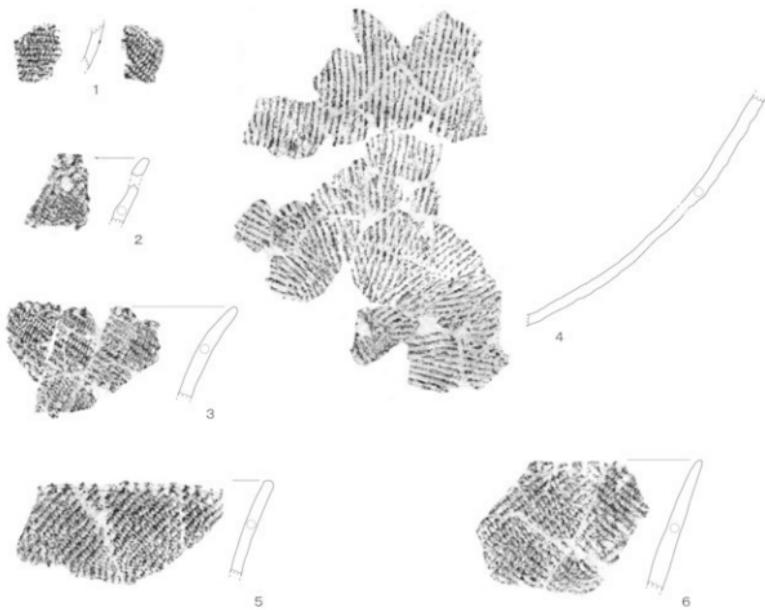
213～223は胎土に纖維を含む土器（2類）である。文様は縄文のほか、羽状縄文（217・220・221）がある。また縄の押圧を施すもの（216）がみられる。口縁部には刻みを施すもの（213）がある。

224～226は、隆帯で区画や文様を意匠する土器（4類）である。224・225は口縁部または口縁近くの破片資料で、地文と横位の隆帯を施す。226は胴部～底部にかけての破片で、地文は見られず、縦位方向の隆帯による区画をする。

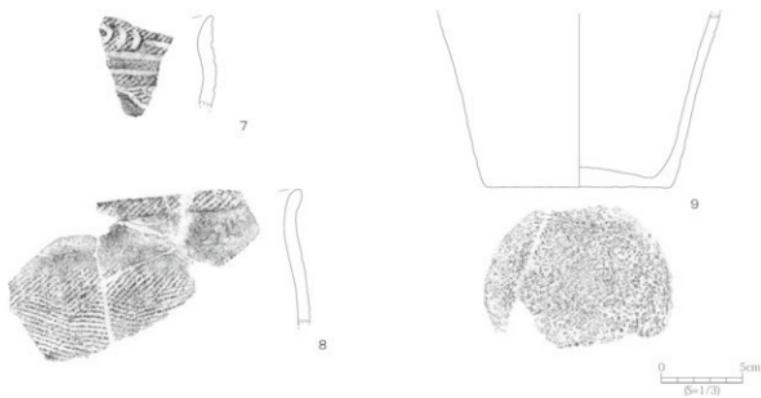
227～230は地文のみの土器（11類）である。単節や無節の縄がみられる。

231～233は上記分類以外の土器である。231は口縁部破片で、口縁直下に刺突上の刻みを持つ。また、沈線による鋸歯状の文様が描かれる。232・233は底部破片である。232は網代圧痕を残す。233は木葉痕を残す。

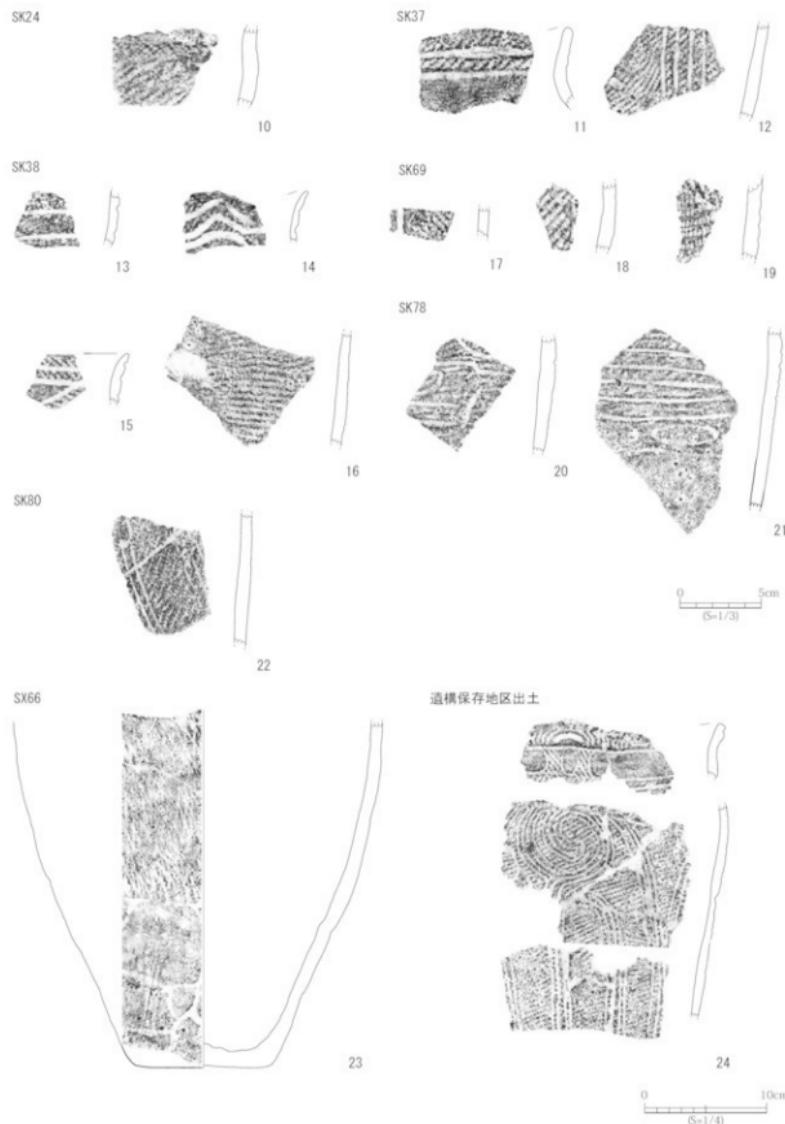
SX55



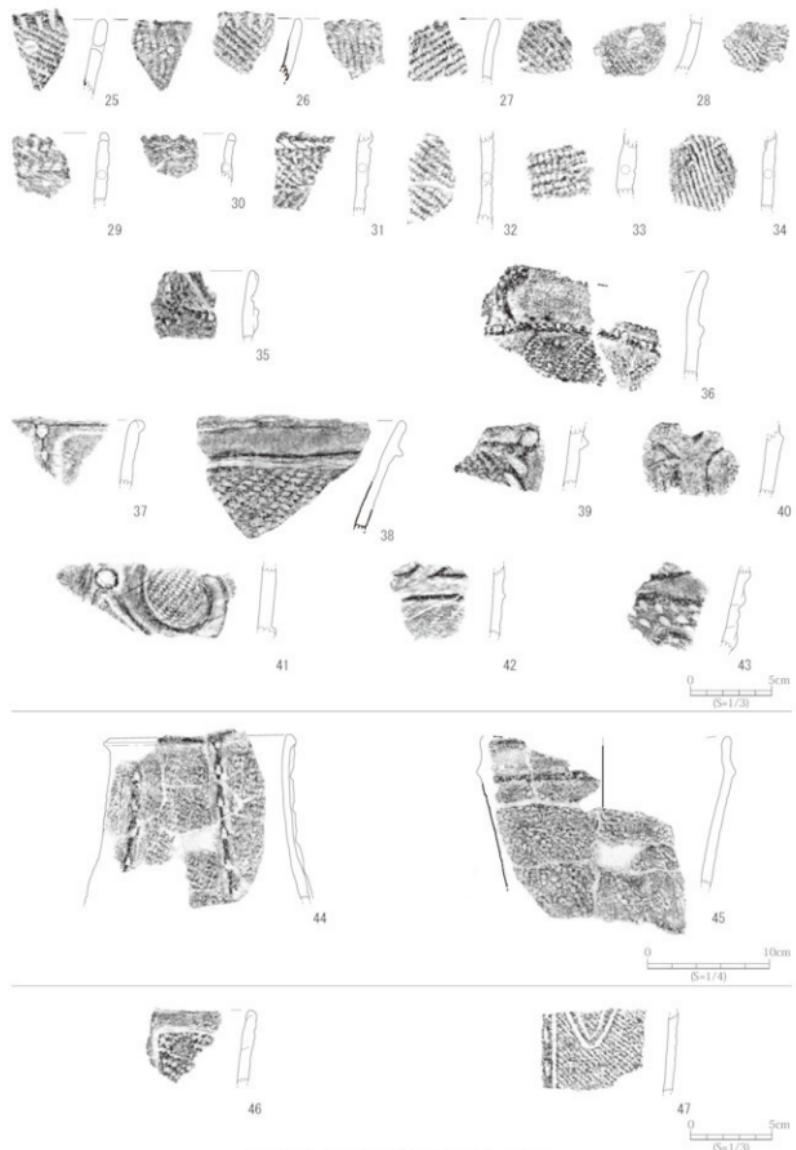
SK14



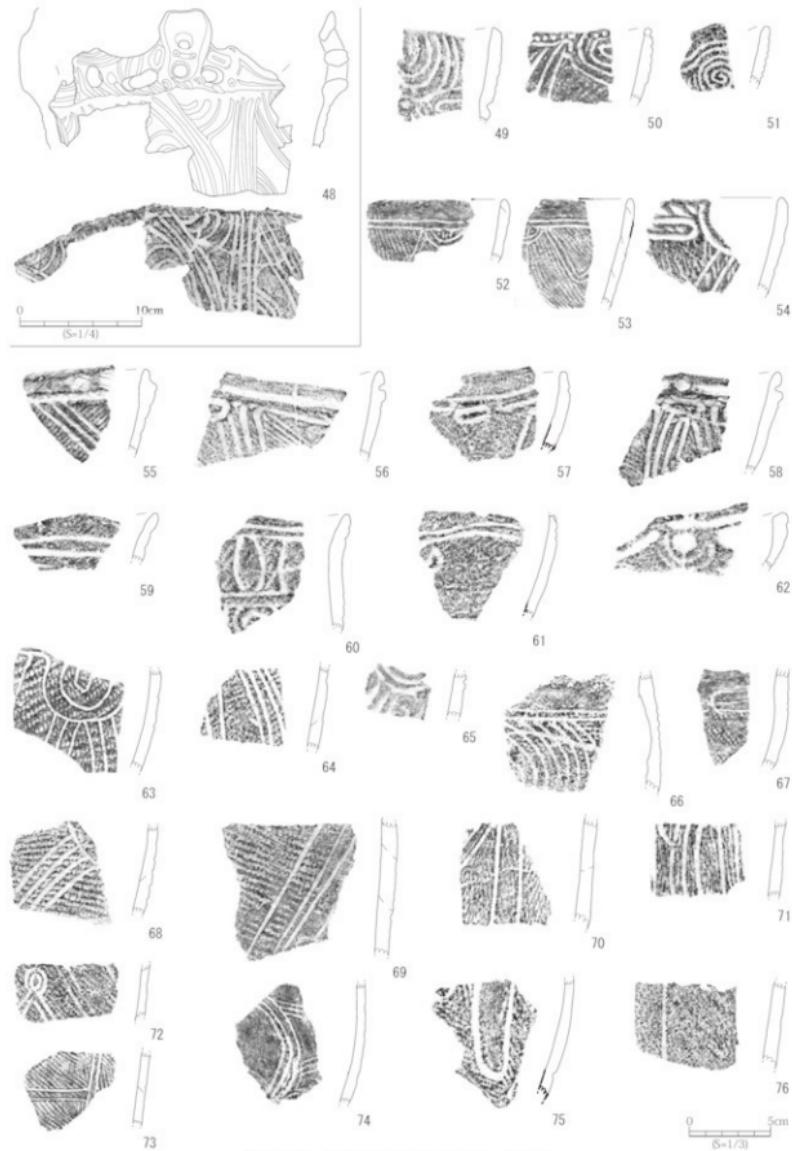
第22図 遺構出土土器 1



第23図 遺構出土土器2・遺構保存地出土土器



第24図 SX13包含層上層出土土器1



第25図 SX13 包含層上層出土土器 2



77



78



79



80



81



82



83



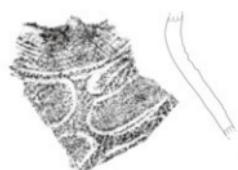
84



85



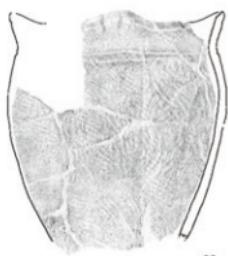
86



87

0
5cm
(S=1/3)

第26図 SX13包含層上層出土土器3



88



89

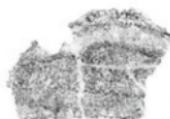
0
10cm
(S=1/4)



90



91



92



93



94



95



96



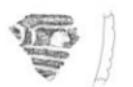
97



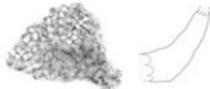
98



99



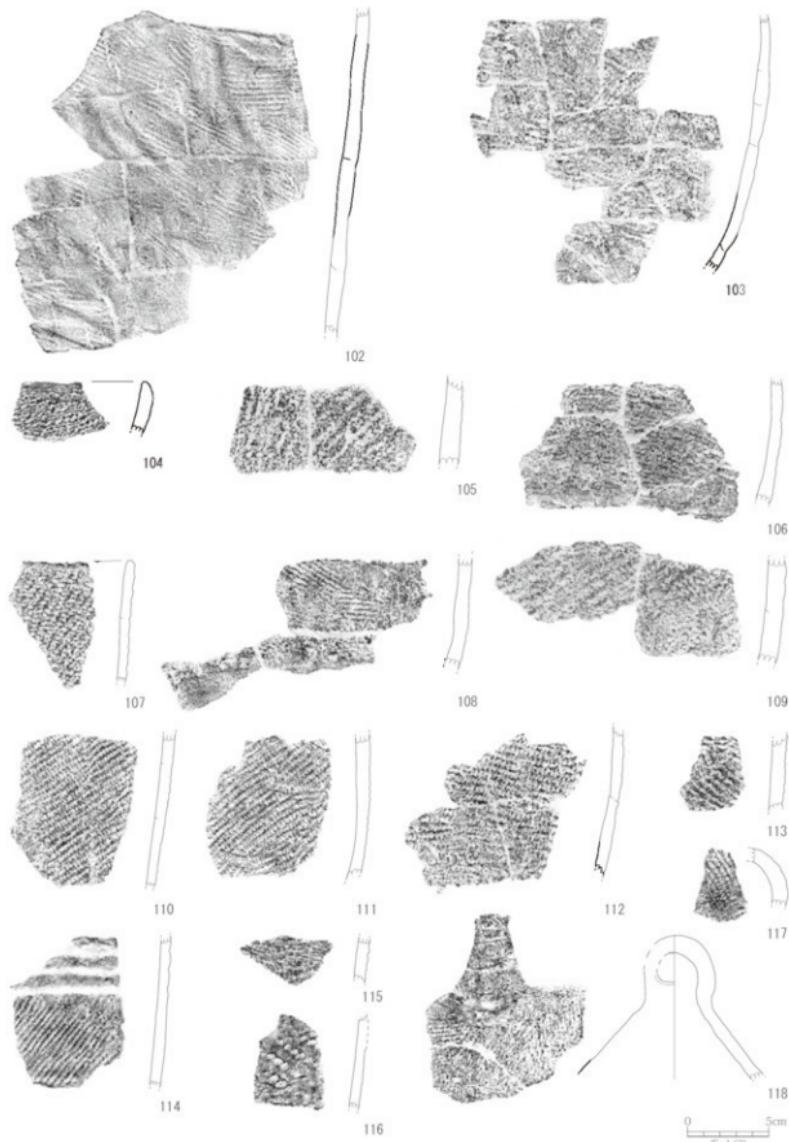
100



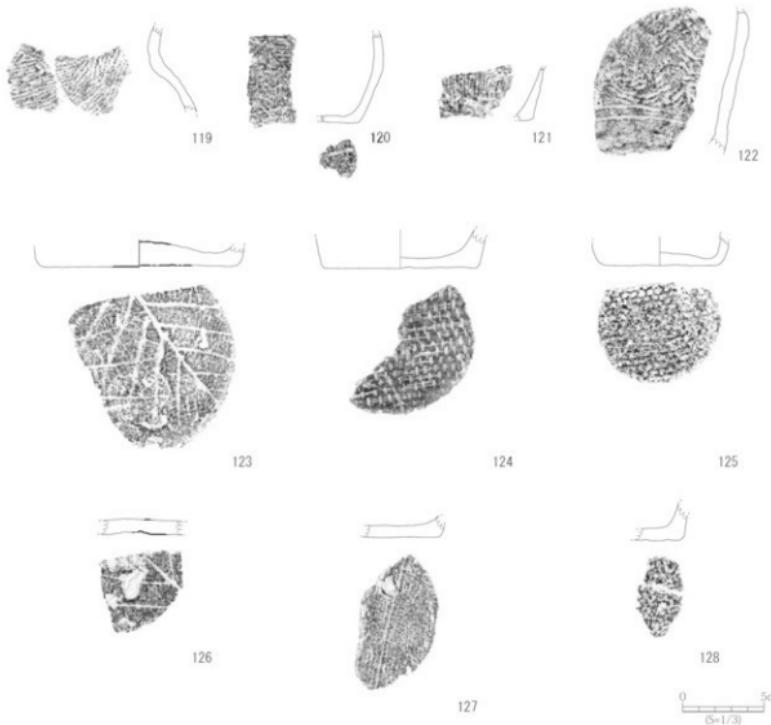
101

0
5cm
(S=1/3)

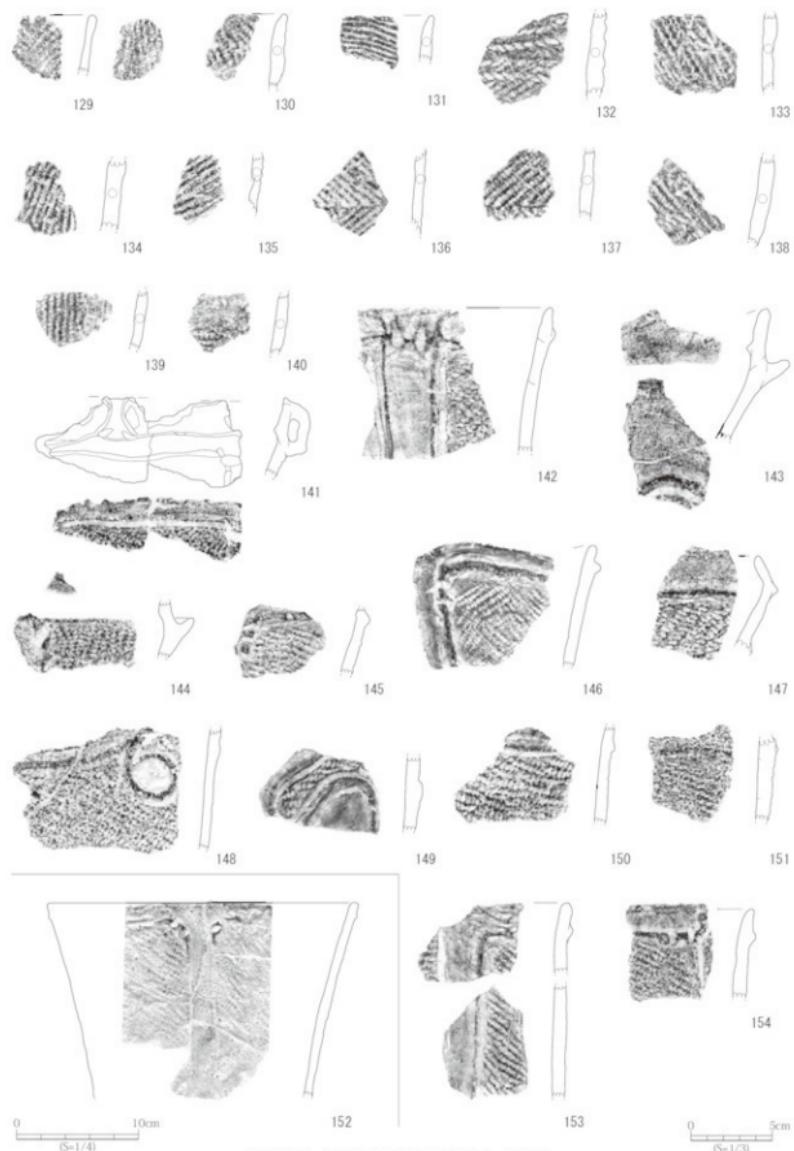
第27図 SX13包含層上層出土土器4



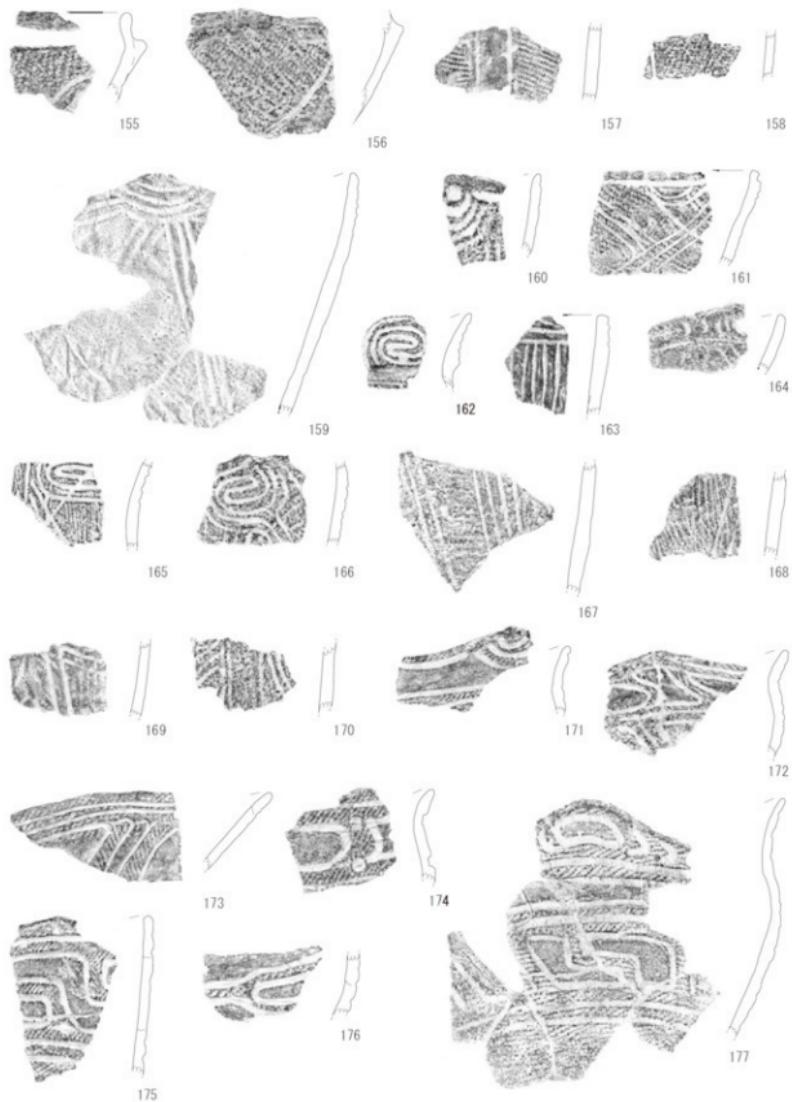
第28図 SX13 包含層上層出土土器5



第29図 SX13包含層上層出土土器6

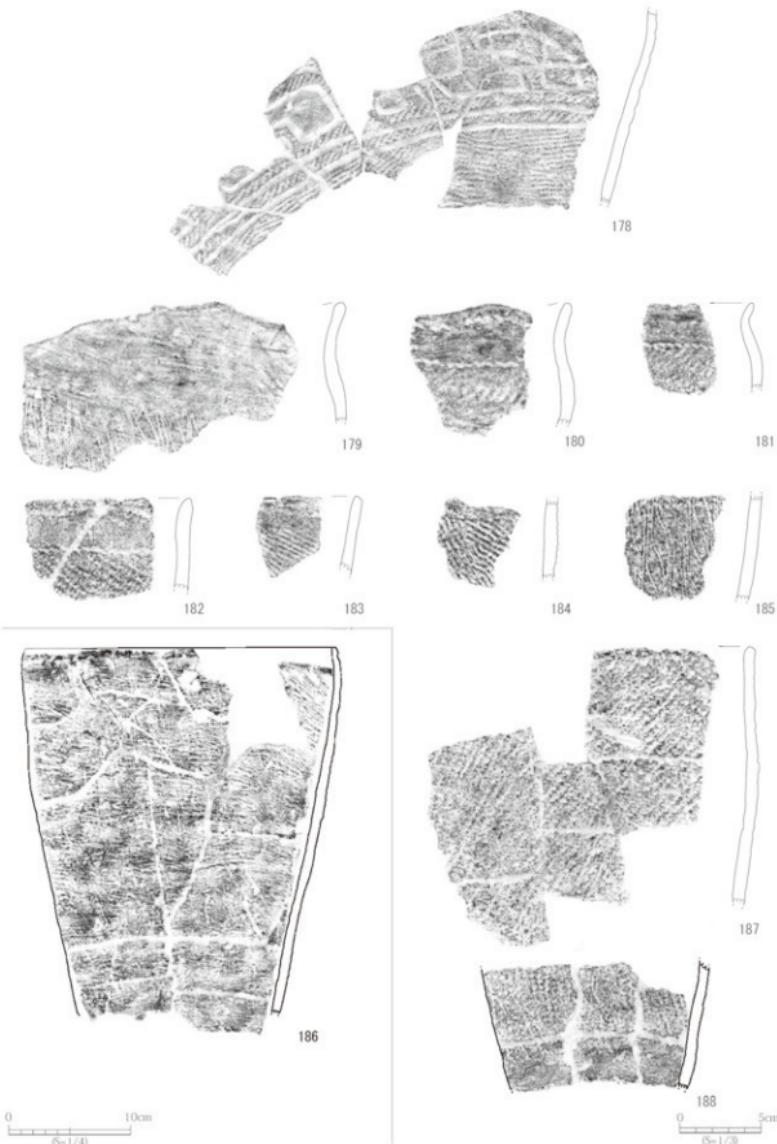


第30図 SX13 包含層中層出土土器 1

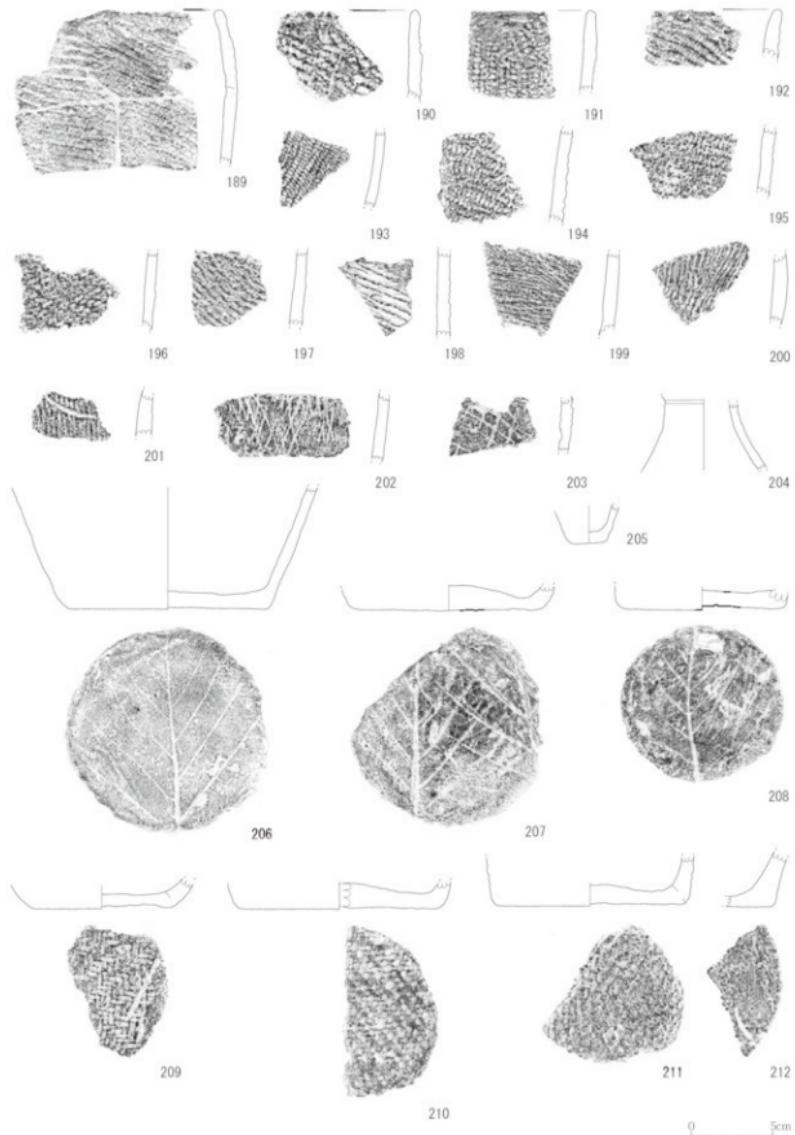


第31図 SX13包含層中層出土土器2

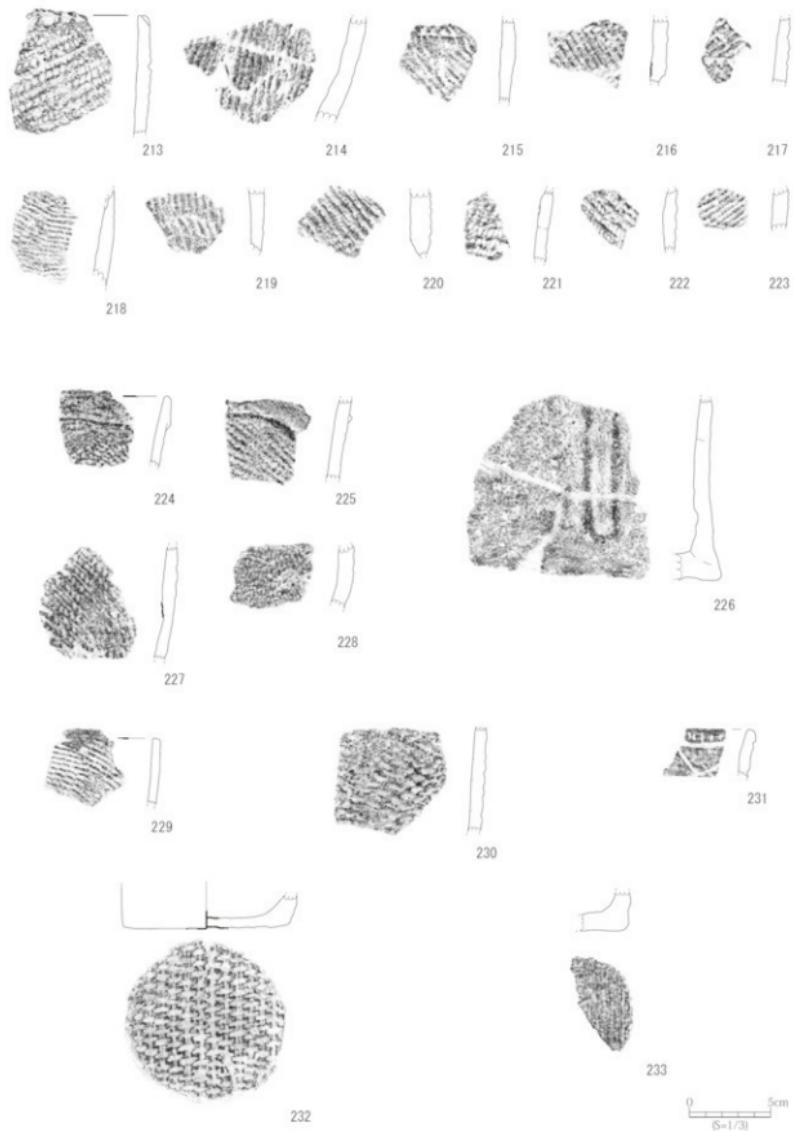
0 5cm
(S=1/3)



第32図 SX13 包含層中層出土土器3



第33図 SX13包含層中層出土土器4



第34図 SX13包含層下層出土土器

第2表 土器観察表

No.	地 区	分 類	器 形	時 期	出 小 分 周	特 徴	施 司
1	第22区	1	深鉢	中期末	S355	圓文(表:IR,裏:IR)	
2	第22区	2	深鉢	中期末	S355	白線彫刻文、圓文(IR), 滑面土器	
3	第22区	2	深鉢	中期末	S355	白線彫刻文、羽状圓文(IR), 滑面土器	
4	第22区	2	深鉢	中期末	S355	圓文(IR), 滑面土器	
5	第22区	2	深鉢	中期末	S355	白線彫刻文、羽状圓文(IR), 滑面土器	N6.1と同一小字
6	第22区	2	深鉢	中期末	S355	白線彫刻文、羽状圓文(IR), 滑面土器	
7	第22区	7	深鉢	前期前半	SK14	圓文(IR), 沈綻	
8	第22区	8	深鉢	前期前半	SK14	圓文(IR), 回転圓文(IR)	
9	第22区	—	深鉢	前期前半	SK14	圓文(IR), 沈綻	
10	第22区	8	深鉢	前期前半	SK24	圓の押印(表), 圓文(IR)	
11	第23区	6	深鉢	前期前半	S337	圓文(表?)→沈綻	
12	第23区	6	深鉢	前期前半	S337	圓文(表?)→沈綻	
13	第23区	7	深鉢	前期前半	S338	沈綻文	
14	第23区	7	深鉢	前期前半	S338	圓文→沈綻文	
15	第23区	7	深鉢	前期前半	S338	圓文(表?)→沈綻文	
16	第23区	11	深鉢	前期前半	S338	圓文(IR?)	
17	第23区	5	深鉢	前期前半	S369	圓文(IR), 沈綻	
18	第23区	11	深鉢	中期末?	S369	羽状圓文?	
19	第23区	11	深鉢	中期末?	S369	羽状圓文(IR)	
20	第23区	9	深鉢	前期前半	S378	圓文?沈綻文	
21	第23区	9	深鉢	前期前半	S378	沈綻文	
22	第23区	6	深鉢	前期前半	S389	圓文(表?)→沈綻文	
23	第23区	11	深鉢	前期前半	S396	滑面文(IR)	堆積土器
24	第23区	6	深鉢	前期前半	現存地	圓文(IR)→沈綻文	
25	第24区	1	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表:IR,裏:IR), 白線彫刻文, 葉文	
26	第24区	1	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表:IR), 葉文?, 白線彫刻文	
27	第24区	1	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表:IR), 葉文?, 白線彫刻文	
28	第24区	1	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表:IR), 葉文?	
29	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表:IR), 白線彫刻文, 滑面土器	
30	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	白線彫刻文, 滑面土器	
31	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	羽状圓文(表), 白線彫刻文, 滑面土器	
32	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表), 2個1対孔→2個1対孔, 滑面土器	
33	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表), 2個1対孔→2個1対孔, 滑面土器	
34	第24区	2	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表), 滑面土器	
35	第24区	3	深鉢	前期前半	SX13上層	羽状圓文, 滑面に凹った病痕	
36	第24区	3	深鉢	前期前半	SX13上層	圓文(表)→1対孔隆起→隣器に沿う病痕	
37	第24区	4	深鉢	前期前半	SX13上層	圓文(表), 隣器に沿う病痕, 病突	
38	第24区	4	深鉢	前期前半	SX13上層	圓文(表), 隣器に沿う病痕	
39	第24区	4	深鉢	前期前半	SX13上層	圓文(表), 隣器に沿う病痕	
40	第24区	4	深鉢	中期末	SX13上層	圓文(表)→1対孔隆起→2個1対孔, ベタシ貼付文	
41	第24区	4	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→1対孔隆起→2個1対孔, 沈綻	
42	第24区	4	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→1対孔隆起→沈綻, ポタン化粧村文	
43	第24区	4	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→1対孔隆起, 利突	
44	第24区	4	深鉢	中期前半	SX13上層	1対孔隆起, 利突に沿う病痕→圓文(IR), 利突	
45	第24区	4	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表), 1対孔隆起	
46	第24区	5	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻	
47	第24区	5	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→1対孔隆起, 沈綻文, 利突	
48	第25区	5	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文, 利突	
49	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	利突, 1対孔隆起, 利突, 利突, 滑面文→沈綻文	
50	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文, 利突	
51	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文, 利突	
52	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
53	第25区	6	鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR), 沈綻文	
54	第25区	6	鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文	
55	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文?→沈綻文, 利突	
56	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文→利突	
57	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
58	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文, 利突	
59	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文	
60	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
61	第25区	6	鉢?	中期前半	SX13上層	圓文?→沈綻文	
62	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文, 利突	
63	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文	
64	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文?→沈綻文	
65	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
66	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
67	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文→ナゲ	
68	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文	
69	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文→ナゲ	
70	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文→ナゲ	
71	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	滑面文?→沈綻文	
72	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文?→沈綻文	
73	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(表)→沈綻文	
74	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	沈綻文	
75	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文, ナゲ	
76	第25区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文?→沈綻文	
77	第26区	6	深鉢	中期前半	SX13上層	圓文(IR)→沈綻文	

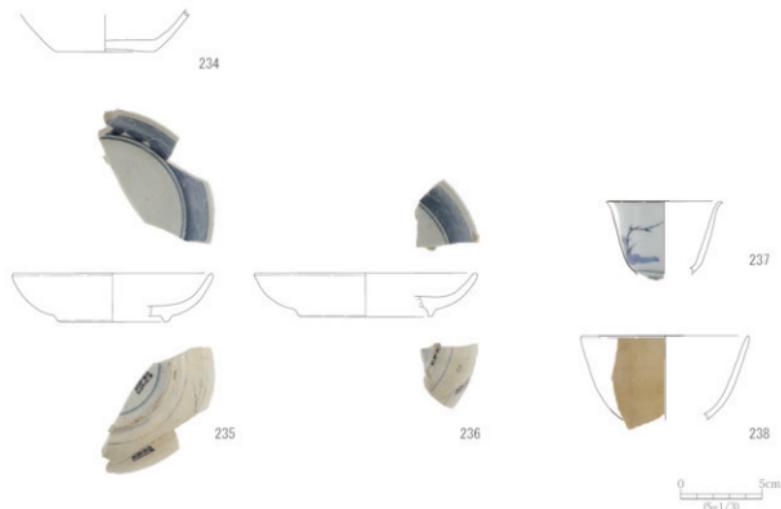
No.	地図	分類	2D 種	時期	出土位置	特徴	参考
78	第26回	6	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？、平行沈縫文	
79	第26回	6	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？、平行沈縫文	
80	第26回	6	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？(II)、沈縫文	
81	第26回	7	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 一度縫文、網目	
82	第26回	7	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 一度縫文→網目	
83	第26回	7	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？→一次縫文	
84	第26回	7	2次鉢？	後期前半	SX13 上層	画文？→一次縫文、網目	
85	第26回	7	2次鉢	後期前半	SX13 上層	沈縫文	
86	第26回	7	鉢	後期前半	SX13 上層	画文、沈縫文	
87	第26回	7	鉢	後期前半	SX13 上層	画文、沈縫文	
88	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)、沈縫文	
89	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)、画の押住 (II)	
90	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
91	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
92	第27回	8?	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？	
93	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 画の押住 (II)	
94	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 画の押住 (II)	
95	第27回	8	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) (削開跡)	
96	第27回	8	鉢	後期前半	SX13 上層	画文？→ナード	
97	第27回	8	鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
98	第27回	8	鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
99	第27回	8	鉢	後期前半	SX13 上層	ナード→別底縫文 (II) 頭部打光矢欠き？	
100	第27回	9	2次鉢	後期前半	SX13 上層	沈縫文	
101	第27回	10	2次鉢	後期前半	SX13 上層	網目	
102	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 画の押住 (II) 結跡	
103	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？	
104	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
105	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
106	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
107	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
108	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
109	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
110	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
111	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
112	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
113	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
114	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) → 逆縫	
115	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
116	第28回	11	2次鉢	後期前半	SX13 上層	網条目？	
117	第28回	11	鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II)	
118	第28回	11	鉢	後期前半	SX13 上層	画文？	
119	第29回	12	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文 (II) 网目	
120	第29回	12	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文？木葉模	
121	第29回	—	くニチユア	後期前半	SX13 上層	沈縫文	
122	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	画文模、平行沈縫	
123	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	木葉模 (複数枚)	小型土器
124	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	網代子模	
125	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	網代子模	
126	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	木葉模	
127	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	木葉模	
128	第29回	—	2次鉢	後期前半	SX13 上層	網代子模？	
129	第30回	1	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (I) : (II), 黃 : (II)	
130	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 沈縫子部	
131	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 沈縫子部	
132	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画の押住 (II), 画文 (II), 沈縫子部	
133	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 画文 (II), 沈縫子部	
134	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
135	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
136	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
137	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
138	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
139	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
140	第30回	2	2次鉢	中期末	SX13 中層	画文 (II), 網代子模	
141	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋、陰帶に合う沈縫、2個1対の割込み、網目	
142	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋、陰帶に合う沈縫、2個1対の割込み、網目	
143	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II) → 陰筋と並ぶ (II) (II), 内面縫合	
144	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II) → 陰筋と並ぶ (II) (II), 2個1対の割込み	
145	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II) (II), 2個1対の割込み	
146	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II) (II), 2個1対の割込み	
147	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	陰筋と並ぶ (II) (II)	
148	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II)	
149	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	陰筋と並ぶ (II) (II), 陰筋と並ぶ (II)	
150	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), (II), 陰筋と並ぶ	
151	第30回	4	2次鉢	後期前半	SX13 中層	陰筋と並ぶ (II) (II)	
152	第30回	5	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II) (II)	
153	第30回	5	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II) (II)	
154	第30回	5	2次鉢	後期前半	SX13 中層	画文 (II), 陰筋と並ぶ (II) (II)	
155	第31回	5	2次鉢	後期前半	SX13 中層	II 線と並ぶ (II) (II) → 画文 (II), 陰筋と並ぶ	

No.	地図	分類	20種	時期	出土位置	特徴	参考
156	第31図	5	鉢	後期前葉	SSX13中層	圓文(1R)、堅付縦帶文、沈綱文	
157	第31図	5	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文・ナデ	
158	第31図	5	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)、沈綱文	
159	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文?、沈綱文	
160	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	沈綱文、丸乳	
161	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・平打沈綱文、部纏文をナデ消す	
162	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文、倒立文	
163	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文?・一次綱・ナデ	
164	第31図	6	鉢?	後期前半	SSX13中層	沈綱文	
165	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文?、沈綱文	
166	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・沈綱文	
167	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文?・沈綱文	
168	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文?・一次綱文	
169	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・沈綱文	
170	第31図	6	深鉢	後期前半	SSX13中層	沈綱文	
171	第31図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文?、沈綱文	
172	第31図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	沈綱文	
173	第31図	7	深鉢?	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文・ナデ	
174	第31図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文・倒立	
175	第31図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文	
176	第31図	7	深鉢?	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・沈綱文・ナデ	
177	第31図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・沈綱文	
178	第32図	7	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)・一次綱文	
179	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	
180	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓力印(1R)、圓文(1R)	
181	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓力印(1R)、圓文(1R)	
182	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓の力印(1R)、圓文(1R)	
183	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
184	第32図	8	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
185	第32図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	
186	第32図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	
187	第32図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
188	第32図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
189	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
190	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
191	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
192	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
193	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
194	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	No.143と同・カラ
195	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
196	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
197	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
198	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	圓文(1R)	
199	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R) ?	
200	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	
201	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文?、沈綱文	
202	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	
203	第33図	11	深鉢	後期前半	SSX13中層	倒立文(1R)	No.292と同・カラ
204	第33図	-	鉢?	後期前半	SSX13中層	沈綱文、ナデ、内面に2条沈綱	
205	第33図	-	「ニチュ」	後期前半	SSX13中層	木葉根	
206	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	木葉根	
207	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	木葉根(複数)	
208	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	木葉根、伊代糸柱有り	
209	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	網代糸柱	
210	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	網代糸柱	
211	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	木葉根、網代糸柱	
212	第33図	-	深鉢	後期前半	SSX13中層	底端ノザ開口5?	
213	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	白線刷込み、圓文(1R)、纏足土器	
214	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
215	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文?、纏足土器	
216	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、圓力印(1R)、纏足土器	
217	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
218	第34図	3	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
219	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
220	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	羽伏綱文?、纏足土器	
221	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	羽伏綱文(1R)、纏足土器	
222	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
223	第34図	2	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)、纏足土器	
224	第34図	4	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)・堅付縦無	
225	第34図	4	深鉢	中期末	SSX13上層	圓文(1R)・堅付縦無	
226	第34図	4	深鉢	中期前半	SSX13上層	堅付縦無	
227	第34図	11	深鉢	中期前半	SSX13上層	圓文(1R)	
228	第34図	11	深鉢	中期前半	SSX13上層	圓文(1R) ?	
229	第34図	11	深鉢	中期前半	SSX13上層	圓文(1R)	
230	第34図	11	深鉢	中期前半	SSX13上層	圓文(1R)	
231	第34図	-	深鉢	中期前半	SSX13上層	沈綱文、財み	
232	第34図	-	深鉢	中期前半	SSX13上層	網代糸柱	
233	第34図	-	深鉢	中期前半	SSX13上層	木葉根?	

(2) 土師器 (234、写真図版 21)・陶磁器 (235～238)

土師器は、SX13 の上層から実測可能な坏が 1 点出土し、これ以外にも坏片がわずかに出土している。摩耗が頗著のため、明確な時期は不明だが、平安時代の所産であろう。SI40 との関連性が考えられる。

陶磁器は D 区を中心に出土したが、遺構としては SI08 のみである。235 と 236 は同じ文様であることから同一個体の可能性が高いが、個々に実測すると法量や色調がやや異なる。出土した陶磁器は肥前系が主体であるが、東北産の銅緑釉瓶と思われる破片も出土している。



第 35 図 土師器・磁器

第 3 表 土師器観察表

No.	地 国	出土地点	器種	底径 (cm)	特 徴				備 考			
					口径	深さ	高台径		内面特徴	製作地	製作年代	備 考
234	第 21 国	SX13 上層	坏	6.0	全体的に摩耗のため、調整は不明瞭。ロクロ青等で、底部外面下端と底部はヘラケズリか?				外面部仕上げか? 底部に乾燥時?の V 字状の圧痕有			

第 4 表 陶磁器観察表

No.	地 国	出土地点	器種	材質	法量 (cm)			成 形	繪 村	繪 葵	外 面 特 徴	内 面 特 徴	製 作 地	製 作 年 代	備 考
					口径	深さ	高台								
235	第 35 国	S108 1・2 層	磁器	陶器	(12.2)	3.0	(6.8)	輪 植、所 り高台	染付	透明釉	外側面に折れ松葉 文	内面外側には、墨 書き抜法による蔓 花文	肥前	18 世紀前半	
236	第 35 国	S108 1・2 層	磁器	陶器	(13.8)	2.7	(8.3)	輪 植、所 り高台	染付	透明釉	外側面に折れ松葉 文	内面外側には、墨 書き抜法による蔓 花文	肥前	18 世紀前半	
237	第 35 国	S108 1 層	小坏	磁器	(7.2)	(4.5)	—	輪 植、所 り高台	染付	透明釉	竹文または草木文	—	肥前	17 世紀末～ 18 世紀初?	
238	第 35 国	S108 1 层	磁	陶器	(10.4)	(5.2)	—	輪 植、所 り高台	灰釉	—	—	—	肥前	同器手前 記	

(3) 土製品 (239～272、写真図版 22)

1) 土製円板 (239～271、写真図版 22)

今回、土製円板は 140 点が出土し、33 点を図化した。摩耗が顕著なもの、また打ち欠き（敲打・剥離）だけのもので、摩耗により判断が難しいものは抽出していないことから、全体ではもう少し数は増えるものと思われる。

丹野雅人の分類（2008『縄文土器』）を参照に、平面形態で扇型が顕著に見られたため、H とし加えて分類を行い、第 5 表に提示している。

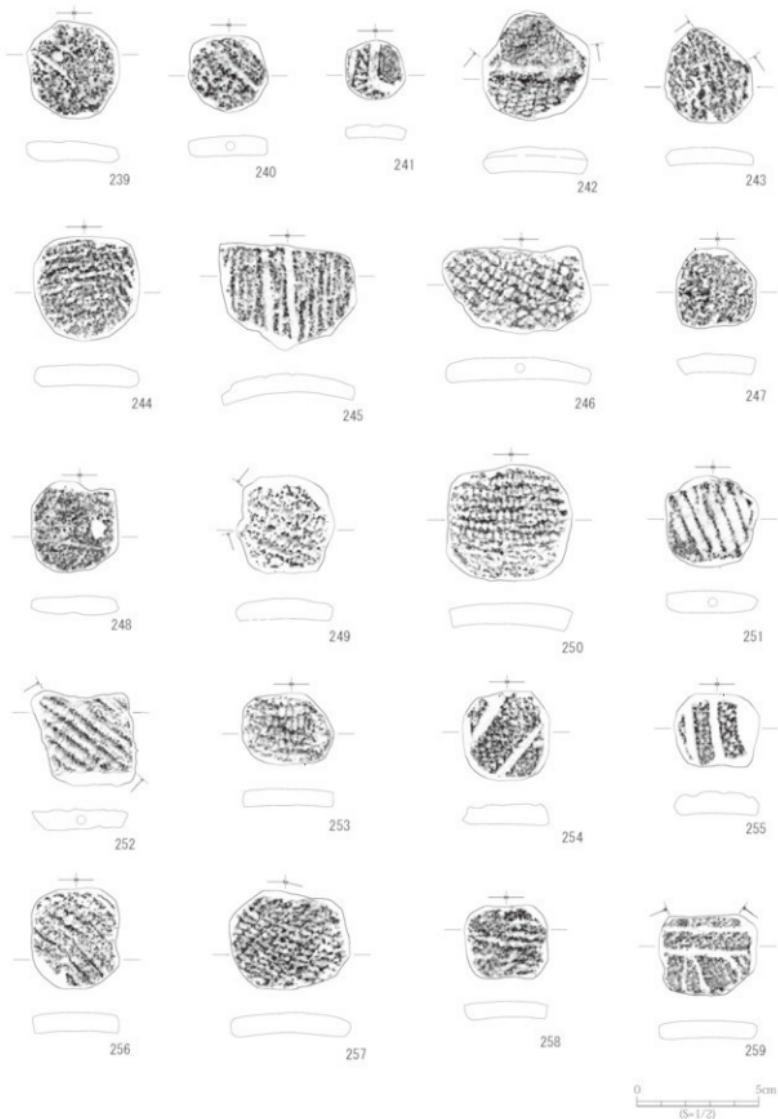
- ・平面形態 A 円形 B 楕円形 C 木葉形 D 半円・半楕円形 E 正方形 F 長方形 G 多角形 H 扇型 (1/4 円) I 不定形・不明
- ・研磨状態 1 敲打・剥離のみ 2 部分研磨 3 全面研磨（分割単位・稜残存）4 全面研磨
- ・研磨度（側縁部）I 若干 剥離痕残存 II 表面平滑（稜残存）III 表面平滑
- ・遺存度 A 完形 B 残存 1/2 以上 C 残存 1/2 以下
- ・部位 口縁部 胸部 底部

以下、気がついたことを箇条書きに記しておく。

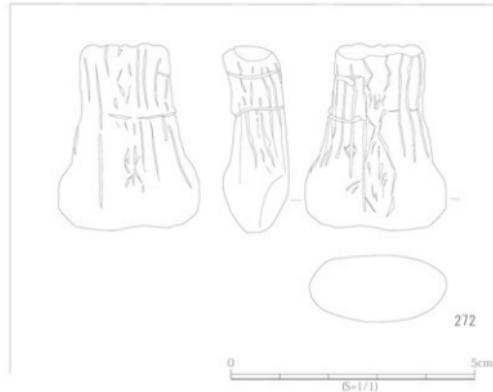
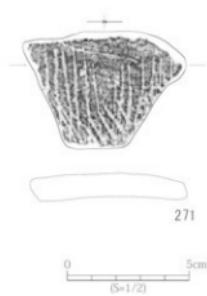
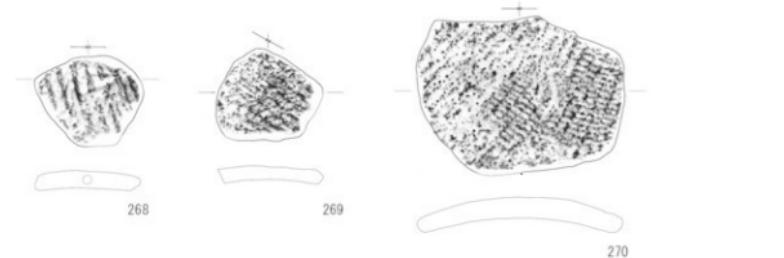
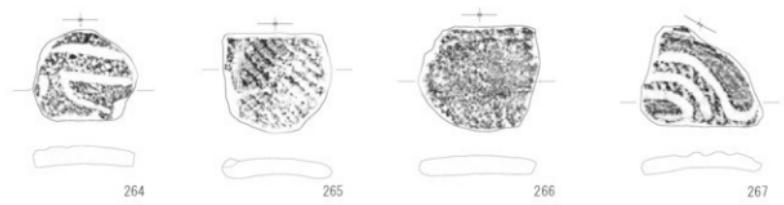
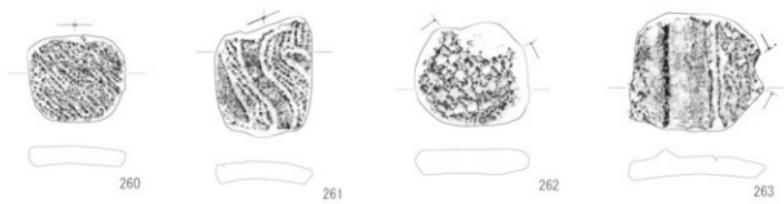
- ・平面形態は、D 類が多く、H 類・F 類と続く。このことから、円形が重視されているのではなく、本遺跡では一辺が直線的であることが、主流となっている。その一方で、半円形や扇形のように、弧を描いた辺もあることから、研磨が制作の結果なのか、使用の結果であるのか、検討を要する。
- ・側辺の研磨は、稜が無くなるほど研磨しているものは少ない。
- ・幅 3 cm～6 cm のものが大半を占め、最小は 2.4 cm、最大が 8.5 cm である。重量は 5～20 g が主体を占め、最小は 3.9 g、最大が 60 g である。
- ・出土地点は、大半が SX13 で、胸部が主体である。
- ・時期はすべて縄文時代で、織維土器（縄文時代早期末）が 7 点ある。他は明確な時期を示し難いが、本遺跡の遺物の多くが出土した SX13 で縄文時代後期が大半を占めることから、その時期の所産であろう。
- ・縄文時代早期の 7 点と他のもので分類差が顕著ではないことから、平面形態等の差異は時代差とは言い難い。

2) 土偶 (272、写真図版 22)

今回、土偶は 1 点が出土し、図化し報告する。土偶は上半を欠損するもので、顔の有無や腕の表現等は不明であるが、下半に足などの表現がないことから四肢等の表現が希薄なものと考える。文様は細い工具により押し引きで正面と背面中央に 2 条の鋸歯状の文様を描き、側面には継ぎまたは横位方向に沈線文を描く。また、鋸歯状の文様の間に同様の工具による押し引きで、刺突を充填している。



第36図 土製円板1



第37図 土製円板2・土偶

No.	標記	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	部位	手形 形態	研磨 状態	残存度	時期	備考
SX13 上巻			3.2	2.6	0.6	6.0	側面	B	2	I	A	調文
SX13 中巻			6.5	4.3	1.0	28.4	側面	D	3	B	A	調文
SX13			4.7	3.3	0.8	14.7	側面	D	(C)	(B)	B	調文
SX13 中巻			5.0	4.0	0.9	17.5	側面	D	(D)	(B)	B	調文
SX13			4.3	2.9	0.6	10.5	側面	D	(D)	B	B	調文
SX13 中巻			5.0	3.6	0.6	12.2	側面	D	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.1	2.5	0.6	7.0	側面	D	3	B	A	調文
SX13			6.2	5.9	0.6	13.5	側面	D	3	(B)	A	調文
SX13 中巻			5.2	3.4	0.9	15.2	側面	D	2	I	A	調文
SX13			4.1	(2.2)	0.8	7.9	側面	D	(D)	B	B	調文
SX13 上巻			(4.7)	2.9	0.7	11.5	側面	D	(D)	(B)	B	調文
SX13 中巻			3.0	2.6	0.6	5.2	側面	D	4	B	A	調文
SX13 中巻			(3.7)	(2.3)	0.7	9.4	側面	D	(D)	(B)	B	調文 (B)
SX13 上巻			4.2	2.5	0.8	9.5	側面	D	3	B	A	調文
SX13 上巻			3.6	2.6	0.8	7.5	側面	D	3	B	A	調文
SX13 上巻			3.6	2.5	0.5	4.4	側面	D	(D)	(B)	B	調文
SX13 上巻			4.7	4.1	1.0	20.9	側面	D	3	B	A	珠帶
SX13 中巻			4.5	2.2	0.7	10.9	側面	D	3	B	A	調文
SX13 中巻			(3.3)	2.3	0.9	11.8	側面	(D)	(D)	(B)	B	調文
SX13 中巻			(4.9)	(3.0)	0.8	13.6	側面	(D)	(D)	(B)	B	調文 (1r) ?
SX13 上巻			3.1	2.3	0.8	6.7	側面	(D)	(D)	(B)	B	調文
SX13 上巻			(3.6)	(2.0)	0.6	7.3	側面	(D)	(D)	(B)	B	調文 (B)
SX13 中巻			4.9	3.6	0.6	18.1	側面	E	2	I	A	調文
SX13 中巻			3.2	2.2	0.7	9.6	側面	E	3	I	A	調文
SX13 上巻			3.2	3.2	1.2	15.3	側面	E	3	I	A	調文
SX13 中巻			4.6	(3.7)	0.9	13.5	側面	(E-F)	(A)	(B)	B	調文
SX13 中巻			4.3	3.9	0.6	15.2	側面	F	4	B	A	調文
SX13			4.1	3.7	0.9	16.8	側面	F	3	I	A	調文
SX13			3.0	2.6	0.8	7.3	側面	F	4	B	A	調文
SX13 上巻			3.8	2.1	0.8	8.7	側面	F	2	I	A	調文
SX13 中巻			4.6	3.6	0.8	15.0	側面	F	3	B	A	調文
SX13 中巻			3.7	3.4	1.0	16.3	側面	F	3	B	A	調文 (B)
SX13 中巻			5.1	2.9	0.8	15.2	側面	F	2	B	A	調文
SX13 中巻			3.2	2.7	1.1	10.8	側面	F	3	B	A	調文
SX13			4.2	4.0	0.8	15.9	側面	G	3	I	A	調文
SX13 上巻			4.5	4.5	0.6	16.4	側面	G	2	I	A	調文
SX13 中巻			3.2	3.2	0.7	7.3	側面	G	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.1	3.8	0.9	16.7	側面	G	3	B	A	調文
SX13 上巻			3.9	2.8	1.0	15.3	側面	G	3	I	A	調文
SX13 中巻			3.7	3.1	0.8	9.6	側面	G	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.6	2.2	0.8	11.1	側面	G	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.4	3.1	0.6	7.6	側面	G	(D)	(B)	B	調文
SX13 中巻			4.4	3.7	0.9	16.4	側面	H	3	I	A	調文
SX13 上巻			6.6	5.2	1.0	40.9	側面	H	3	I	A	調文
SX13			4.2	2.6	0.7	12.1	（？）	H	2	I	A	調文
SX13 上巻			4.7	4.0	0.7	18.7	側面	H	(D)	(I)	B	調文 (1r)
SX13 中巻			4.0	3.1	0.8	13.2	側面	H	2	I	A	調文
SX13 中巻			5.6	4.0	0.8	13.9	側面	H	4	B	A	調文
SX13 中巻			3.2	2.5	0.7	11.8	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.9	3.7	0.7	10.8	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.9	4.0	0.8	15.9	側面	H	3	I	A	調文
SX13 上巻			4.5	4.5	0.6	16.4	側面	H	2	I	A	調文
SX13 中巻			3.2	3.2	0.7	7.3	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.1	3.8	0.9	16.7	側面	H	3	B	A	調文
SX13 上巻			3.9	2.8	1.0	15.3	側面	H	3	I	A	調文
SX13 中巻			3.7	3.1	0.8	9.6	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.6	2.2	0.8	11.1	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.4	3.1	0.6	7.6	側面	H	(D)	(B)	B	調文
SX13 中巻			4.4	3.7	0.9	16.4	側面	H	3	I	A	調文
SX13 中巻			4.9	4.0	0.8	15.9	側面	H	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.9	4.1	0.7	16.8	側面	H	(D)	(B)	B	調文
SX13 上巻			4.6	(2.3)	1.3	20.1	側面	I	2	I	A	調文
SX13 上巻			(4.5)	2.3	0.6	9.5	側面	I	(D)	(B)	B	調文
SX13 中巻			3.9	2.9	0.7	11.7	側面	I	3	B	A	調文
SX13 中巻			4.6	3.5	0.7	14.1	側面	I	3	B	A	調文
SX13 中巻			5.6	5.7	0.9	35.6	側面	I	3	B	A	調文

土偶一覧表

No.	標記	出土地点	法量				備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
272 集落Ⅱ	SX13	(3.8)	2.9	1.8	1.8	14.9	土手灰、鋸い工具による押し引きで発掘

(4) 石器 (273 ~ 361、写真図版 23 ~ 27)

石器は石鏃、石錐、石匙、石箆、楔形石器、抉り入り石器、不定形石器、石製円板、打製石斧、磨製石斧、礫器（磨石、敲石、凹石、砥石、石皿）、石製品（石棒、石刀、棒状石製品、コの字状石製品、撥形石製品）など 199 点が出土し、このうち 89 点を図示した。また、このほかに剥片、磨石の可能性のある円盤、軽石も出土している。石器の多くは SX13 包含層からの出土である。以下では、第 6 表で示した各器種および分類について示した後、各器種の特徴について述べる。SX13 包含層出土石器について、記載が煩雑になることを避けるため層別別の報告はせず、器種別での報告とする。個別遺物の出土層位等については第 6 表を参照してもらいたい。

石鏃

尖頭部の作出があり、全体として薄手で、後述する尖頭器よりも小形のもの。基部の形態により、以下に分類した。また、このほかに製作過程と考えられるものを未製品とした。

- a 基部に抉りを入れ、逆刺を作出したもの（凹基式）
- b 基部が直線的に調整したもの（平基式）
- c 基部が突出したもの（凸基式）

尖頭器

尖頭部の作出があり、石鏃より大形のもの。本遺跡で出土した石鏃の大部分が長さ 3.5 cm 未満であることから、これよりも大形のものを便宜上、尖頭器として分類した。

石錐

尖頭部の作出があり、尖頭部が厚手で、ドリルとしての機能を想定できるもの。錐部に対しつまみ部の作出の有無により以下に分類した。

- a つまみ部が作出されていないもの
- b つまみ部の作出が明瞭なもの

石匙

剥片に剥離を施すことによって、つまみ部を作出するもの。つまみ部に対する刃部形態により以下に分類した。

- a つまみ部に対し刃部が縦に長いもの（縦型）
- b つまみ部に対し刃部が横に長いもの（横型）

石箆

剥片に加工を加え、剥片の長軸に直行する刃部を作出するもの。

楔形石器

向かい合う一対の辺または二対の辺に階段状の剥離面が観察されるもの。または、欠損があるが、それが想定できるもの。

抉り入り石器

剥片の一辺に抉りを入れ、刃部を作出したもの。

不定形石器

上記の分類に当てはまらない打製石器。素材剥片に対する加工により以下に分類する。

- a 素材剥片の片面に加工を施すもの
- b 素材剥片の両面に加工を施すもの
- c 素材剥片にスポット的に剥離を施すもの
- d 碓面を残す大形剥片または円礫に剥離を施し、刃部を作出するもの

石製円板

扁平な礫を打ち欠きまたは敲打や研磨により、平面形を円形または多角形に仕上げたもの。

打製石斧

端部に刃部を作出するもの。分類は石鎧と共に通する部分があるが、全体として粗雑な剥離により成形するもの。

磨製石斧

端部に刃部を作出し、全面を研磨や敲打により成形するもの。

穂器

磨石 矶の片面または両面に磨面を有するもの。平面形で以下に分類する

- a 研磨が著しく、他の面との間に稜を持つもの
- b 平面長楕円で、一面または複数面に磨面を有するもの
- c 球状の礫で磨面を有するもの
- d 平面不定形で磨面を有するもの

敲石 敲打痕を有するもの

凹石 敲打による凹みのあるもの。敲石に対し大形で、手に持つて使用することが想定しにくいもの

砥石 溝状の磨面を有するもの

石皿 平面またはやや回んだ、広い磨面を有するもの。磨石に対し大形で、手に持つて使用することが想定しにくいもの

石製品

石棒・石刀

敲打や研磨により棒状に成形したもの。断面円形のものを石棒、刃部を作出したものを石刀とする

棒状石製品

剥離や敲打、研磨により断面方形の棒状の石器に成形したもの

コの字形石製品

敲打や研磨により、平面コの字形に成形したもの

撥形石製品

敲打や研磨により、平面撥形に成形したもの

その他

上記分類のいずれにも該当しないもの

1) 遺構出土石器

石鎌 (273 ~ 277、写真図版 23)

遺構から石鎌が 7 点出土し、このうち 5 点を図示した。273・274 は凹基式の石鎌で、275 は凸基式の石鎌である。276・277 は石鎌の未製品とみられる。石材は珪質凝灰岩とメノウが利用されている。273・275 は SI08 壓穴建物跡、274・277 は SB41 挖建柱建物跡、276 は SK38 土坑（貯蔵穴）より出土した。

石錐 (278・279、写真図版 23)

遺構から石錐が 2 点出土し、図示した。278 はつまみ部と錐部の作り分けがない頁岩製の石錐で、錐部先端が欠損している。SI08 壓穴建物跡出土である。279 は P661 小穴出土の石錐で、黒曜石製の尖頭器を転用したものと考えられる。

石匙 (280、写真図版 23)

遺構からは石匙 1 点が出土し、図示した。280 は SK20 土坑から出土した縦型の石匙で、上半が欠損している。左側辺に両面から調整を施して刃部を作る。石材は珪質凝灰岩である。SK20 は近世の土坑であり、縄文時代の遺物が覆土に混入したものとみられる。

石箆 (281、写真図版 23)

遺構からは石箆 1 点が出土し、図示した。281 は SK74 土坑（貯蔵穴）から出土した凝灰質砂岩製の石箆である。腹面側に全方向から剥離を施し調整する一方で、背面側には大きく礫面を残す。

楔形石器 (282・283、写真図版 23)

遺構からは楔形石器 3 点が出土し、このうち 2 点を図示した。282 は SK62 土坑から出土した珪質凝灰岩製の楔形石器である。上下に微細な剥離面を持つほか、左右にも微細な剥離面を有し、二対の刃で利用されたものと考えられる。283 は珪質凝灰岩製の楔形石器で、一部残存する。

不定形石器 (284、写真図版 23)

遺構からは二次加工のある剥片が 1 点出土し、図示した。284 は SK34 土坑（貯蔵穴）から出土した珪質凝灰岩製の不定形石器である。背面と腹面の一部に連続的またはスポット的に微細な剥離を施す。

打製石斧 (285・286、写真図版 23)

遺構からは打製石斧が 2 点出土し、図示した。285 は SX55 小竪穴・集石土坑から出土したシルト岩製の石斧である。腹面側に大きく礫面を残す特徴は、包含層出土の打製石斧と共通する。286 は経塚の墳丘から出土した砂岩製の打製石斧である。石質のためか、磨滅が強くみられる。刃部と基部を中心に素材である礫の縁辺に剥離を施し、成形・調整されている。経塚からの出土ではあるが、時期は経塚とは異なり、縄文時代の遺物であろう。

磨石 (287 ~ 289、写真図版 23)

磨石は遺構から 3 点出土し、図示した。287 は P693 小穴から出土した球形の磨石で、全面を研磨する。石材は凝灰質砂岩である。288 は P708 小穴から出土した磨石で平面形が長楕円を呈する。磨石として両面を利用している。石材は泥岩である。289 は SK65 土坑出土の磨石で平面形が円形である。288 と同様に両面を磨石として利用している。石材は凝灰質砂岩である。

石棒（290、写真図版 23）

石棒は遺構から 1 点出土している。P823 小穴出土の凝灰質砂岩製の石棒で、小穴の時期は不明であるが縄文時代のものと考える。

石製円板（291・292、写真図版 23）

石製円板は遺構から 4 点が出土し、このうち 2 点を図示した。291 は P720 小穴から出土した珪質砂岩製の石製円板である。全体的に風化が進み、調整は不明瞭である。292 は P818 小穴から出土した凝灰岩製の石製円板である。縁辺に剥離や研磨を施し、円形に仕上げている。

2) SX13 包含層出土石器

石鎌（293～306、写真図版 24）

石鎌は 17 点が出土し、このうち 14 点を図示した。形態は回基式、平基式、凸基式がみられる。回基式には抉りを深く入れるもの（293～298）と抉りが浅く、緩やかな弧を描くもの（299・300）がある。また石鎌の身幅が狭いもの（297・298）がある。294・299 には接着用と考えられる黒色の付着物（アスファルトか？）がみられる。凸基式には幅広のもの（303・304）と幅の狭いもの（305）の両者がみられる。石鎌の石材は珪質凝灰岩を主体に、メノウや黒曜石である。

尖頭器（307、写真図版 24）

尖頭器は 2 点が出土し、このうち 1 点を図示した。珪質凝灰岩製の尖頭器で、素材剥片の両面に剥離を施し、縁辺を調整する。

石錐（308～310、写真図版 24）

石錐は 5 点が出土し、このうち 3 点を図示した。石錐にはつまみ部分と錐部の作出が不明瞭なものとつまみ部と錐部の作り分けが明瞭なものがある。つまみ部分の作出が不明瞭なものには、厚手のもの（308）と薄手のもの（309）がみられる。

石箆（311・312、写真図版 24）

石箆は 2 点が出土し、図示した。311 はやや小形の石箆である。剥片の両面に剥離を施し成形する。312 は縦長剥片を素材とした石箆である。剥片の背面縁辺と腹面左側辺に微細な剥離を施し成形する。石材は泥岩、珪質凝灰岩である。

石匙（313～315、写真図版 24）

石匙は 3 点が出土し、図示した。石匙には縦型と横型の石匙がみられる。縦型の石匙は素材となる剥片の両面に剥離を施し成形する。横型の石匙（315）は、つまみ部分の作出がやや不明瞭であり、縦型に比べ背面には大きな剥離面を残す特徴がみられる。石材は珪質凝灰岩である。

楔形石器（316～319、写真図版 24・25）

楔形石器は 12 点が出土し、このうち 4 点を図化した。楔形石器には、刃部が一対のもの（316・317・319）と二対のもの（318）がみられる。石材は、黒曜石などである。

抉り入り石器（320、写真図版 25）

抉り入り石器は 1 点出土した。礫面を残す比較的薄手の剥片の縁辺を利用した抉り入り石器である。石材は、珪質凝灰岩である。

不定形石器（321～330、写真図版 25・26）

不定形石器は 22 点が出土し、このうち 12 点を図示した。321～323 は素材剥片の一辺または複数の辺に片側から加工を加え、刃部を作出した不定形石器である。324・326 は素材剥片にスポット的に剥離を施した不定形石器である。325・327・328 は剥片の両面に剥離を施した不定形石器である。329・330 は礫面を残すような大型の剥片または円礫の縁辺に粗雑な剥離を加え、刃部を作る不定形石器である。礫面を大きく残す点で打製石斧と共通する特徴を持つ。不定形石器には、珪質凝灰岩を主体に泥岩などがみられる。

石製円板（331～335、写真図版 26）

石製円板は 7 点が出土し、このうち 5 点を図化した。石製円板は扁平な素材を用い、縁辺を打ち欠き、研磨により成形するもの（331・334）と、打ち欠きを主体とし成形するもの（332・333・335）の両者がみられる。石製円板には凝灰質砂岩が主体的である。

打製石斧（336～342、写真図版 26）

打製石斧には円礫を素材に用い、その片面に加工を加えることで打製石斧とするもの（336～341）と、素材の全面に加工を加え、打製石斧にするもの（342）がある。本遺跡で主体となるのは、素材の礫面を大きく残すものである。礫面には敲打痕を持つものがみられ、敲石や磨石が打製石斧に転用される場合があったと考えられる。出土した打製石斧の石材は凝灰質砂岩や安山岩、シルト岩、玄武岩など多様である。

磨製石斧（343～345、写真図版 26）

磨製石斧は 5 点が出土し、このうち 3 点を図化し報告する。磨製石斧は素材に剥離と研磨により成形されており、基部が尖らないもの（344）と尖るもの（345）がある。両者には使用に伴うためか、刃部につぶれやステップ状の剥離が顕著にみられる。分類上、磨製石斧に含めたが、ほかの磨製石斧と規格が大きく異なるもの（343）がある。全面を研磨により成形し、中央に縦方向の溝を持つ。刃部に微細な剥離面を有するが機能は不明である。出土した磨製石斧の石材は泥岩や緑色岩、溶結凝灰岩である。

礫器

①磨石・敲石（346～348、写真図版 27）

磨石・敲石は明確なもので 14 点が出土し、このうち 3 点を図化し報告する。ただし、本遺跡からはこのほかに大量（総量約 117.4 kg）の扁平な円礫が確認されており、磨石や敲石としての痕跡が不明確なものを含め、さらに多くの礫が利器として利用すること目的に、遺跡に持ち込まれたものと推定される。磨石には 348 のように明確な棱が立つほど磨面を利用したものがみられるほか、346 のように磨石としてだけではなく敲石としても利用されるなど、複数の機能を有していたものが多く存在すると考えられる。石材は凝灰質砂岩が主体である。

②凹石（349～352、写真図版 27）

凹石は 7 点が出土し、このうち 4 点を図化し報告する。凹石は磨石や敲石に比べ、平面形がやや不定形なものが多い一方で、台石としての利用がされた為か、扁平な石が多く利用されている。また、磨石や敲石と同様に、凹石としてだけではなく、351 のように砥石としても利用されるなど、複数の機能を有したものもあったとみられる。凹石の石材は、凝灰質または花崗岩質の砂岩や玄武岩な

どである。

③石皿（353、写真図版27）

石皿は5点が出土し、このうち1点を図化した。石皿は完形での出土がなく、すべて破片資料であるが、装飾等は確認できなかった。石皿の石材は砂岩である。

④砥石（354、写真図版27）

砥石は2点が出土し、このうち1点を図化し報告する。砥石は筋状の砥面を持ち、一部欠損しているが、多方向から利用されている。砥石の石材は凝灰岩である。

石製品

①石棒・石刀（356・358、写真図版27）

石棒・石刀は4点が出土し、このうち2点を図化し報告する。いずれも欠損しており、全形や装飾等の有無は不明である。石棒・石刀の石材はホルンフェルスや泥岩である。

②コの字形石製品（355、写真図版27）

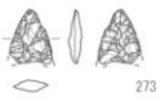
コの字形石製品は2点が出土し、このうち1点を報告する。本遺跡において大小2点が出土し、その機能・用途は不明であり、今後の検討を要する。コの字形石製品の石材は凝灰質砂岩である。

③撥形石製品（357、写真図版27）

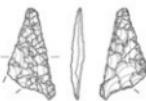
撥形石製品は1点出土し、報告する。石器の表裏および側面を敲打や研磨により成形している。類例や機能・用途はコの字形石製品同様、検討を要する。撥形石製品の石材は凝灰質砂岩である。

④棒状石製品（359～361、写真図版27）

棒状石製品は6点が出土し、このうち3点を報告する。いずれも柱状に割れた素材に対し、剥離や研磨を加えることで断面方形になるよう成形されている。石棒・石刀類と共に通するものか不明であり、コの字形石製品や撥形石製品同様、検討を要する。棒状石製品の石材は泥岩を主体とする。



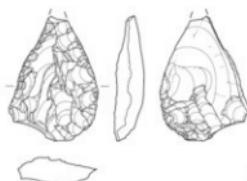
273



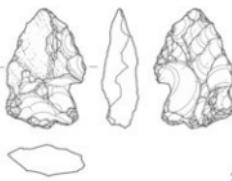
274



275



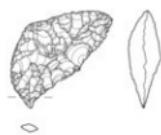
276



277



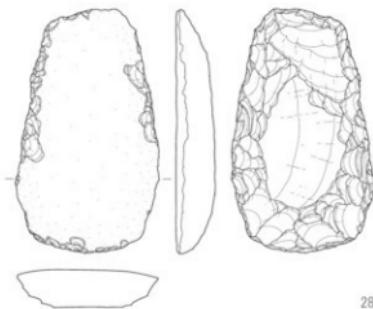
278



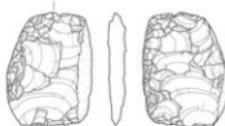
279



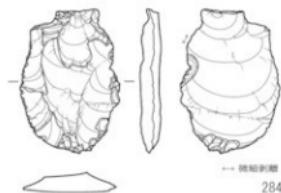
280



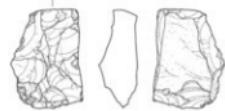
281



282



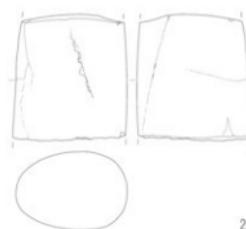
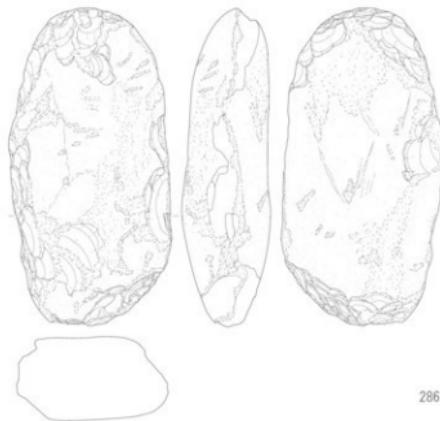
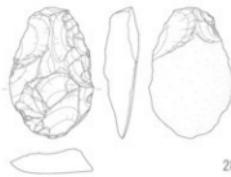
284



283

0 4 cm
(S= 4/5)

第38図 遺構出土石器 1

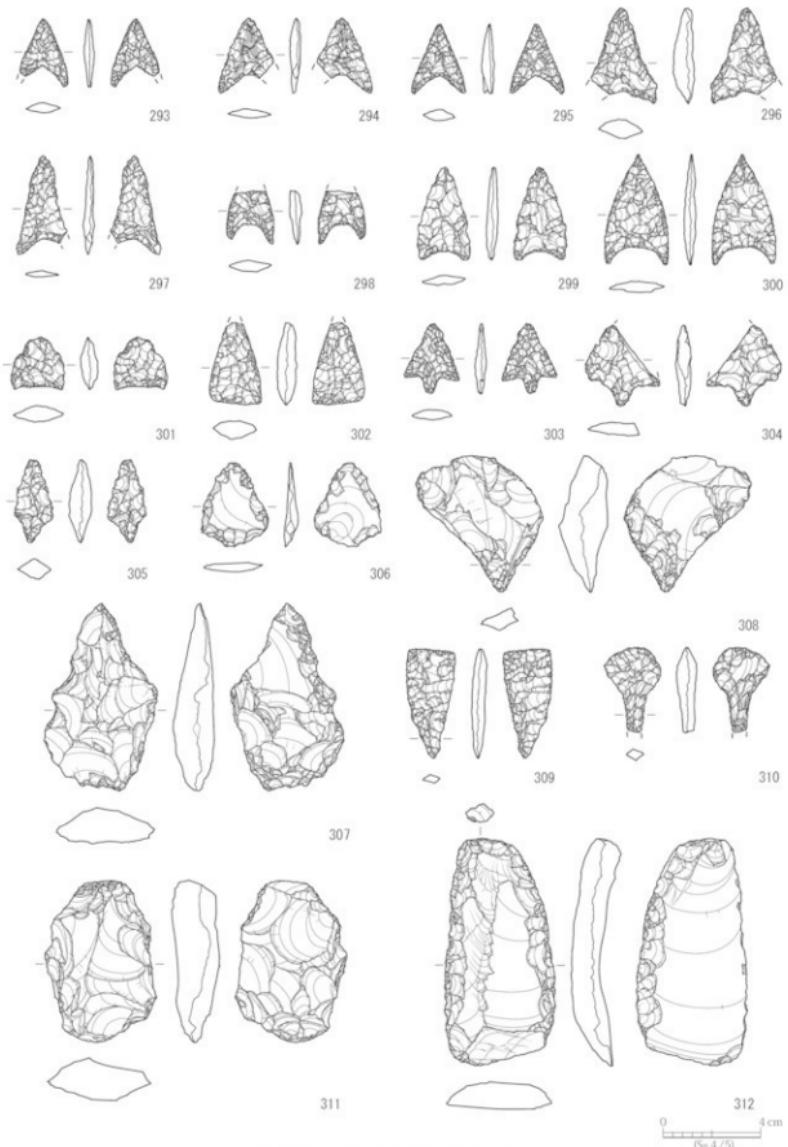


289

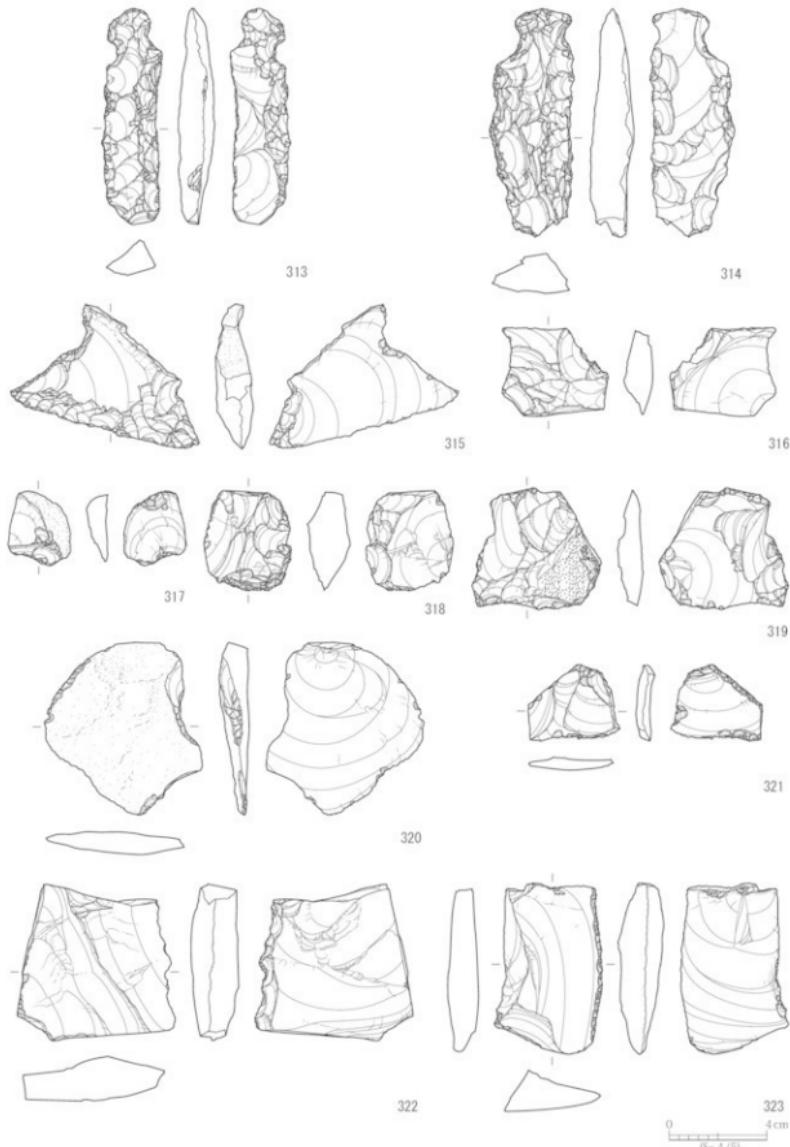


第39図 遺構出土石器 2

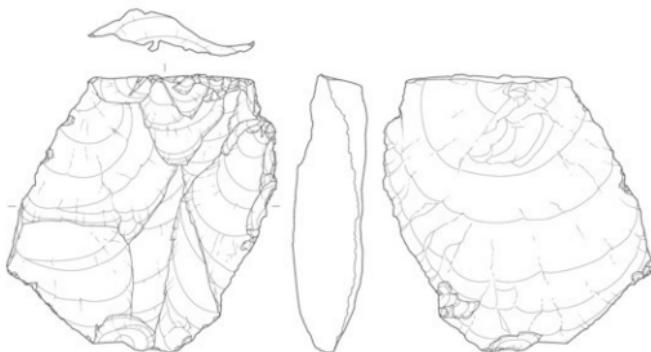




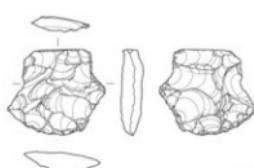
第 40 図 SX13 包含層出土石器 1



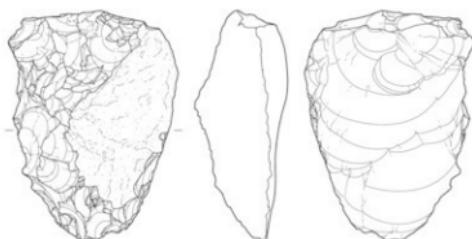
第41図 SX13 包含層出土石器 2



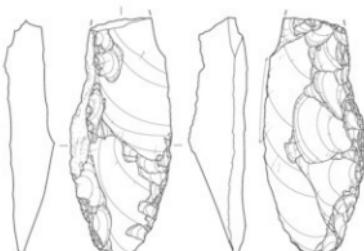
324



325

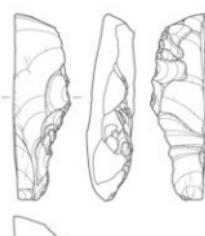


326



→ 離相剥離

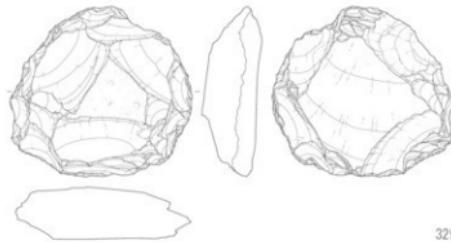
327



328

0 4 cm
(5=4/5)

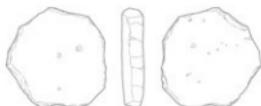
第42図 SX13包含層出土石器3



329



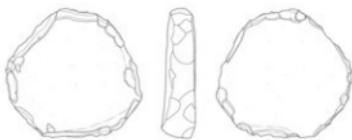
330



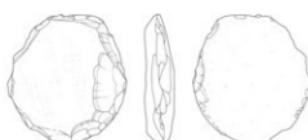
331



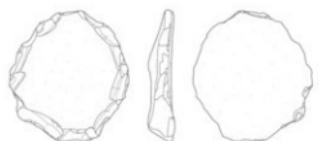
334



332



335



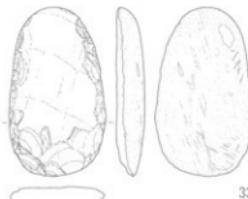
333



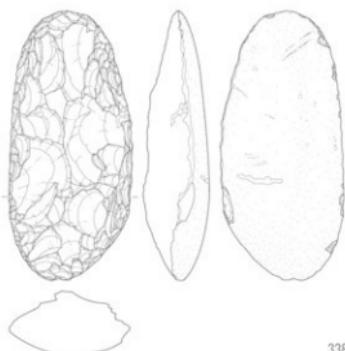
第 43 図 SX13 包含層出土石器 4



336



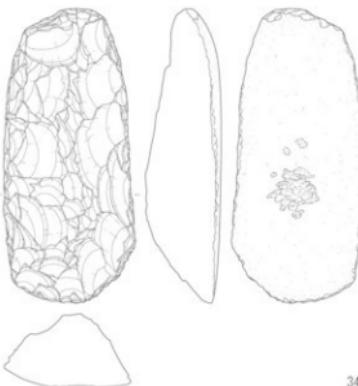
337



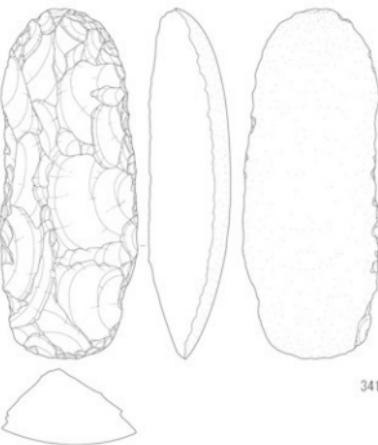
338



339



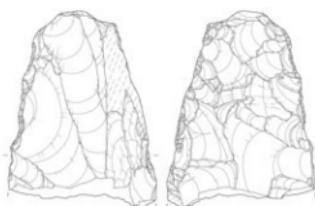
340



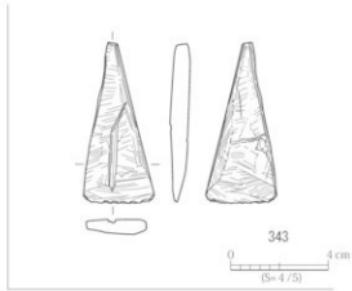
341

 0 5cm
(S=1/2)

第44図 SX13包含層出土石器 5

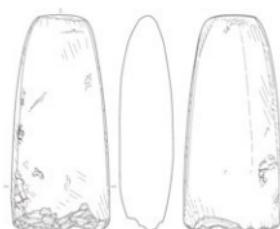


342

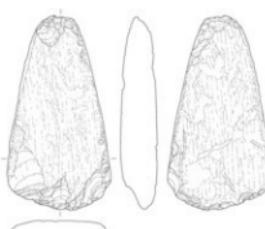


343

0 4 cm
(S=4/5)



344



345

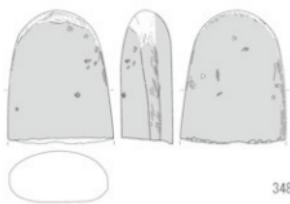
0 5 cm
(S=1/2)



346



347



348

0 5 cm
(S=1/3)

第45図 SX13包含層出土石器 6



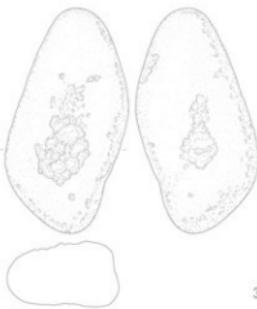
349



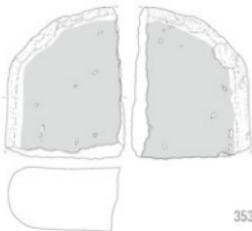
350



351

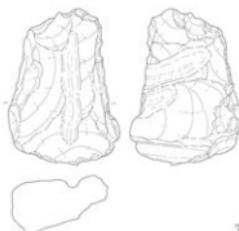


352

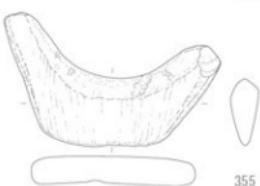


353

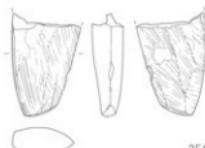
0
(S=1/3)



354



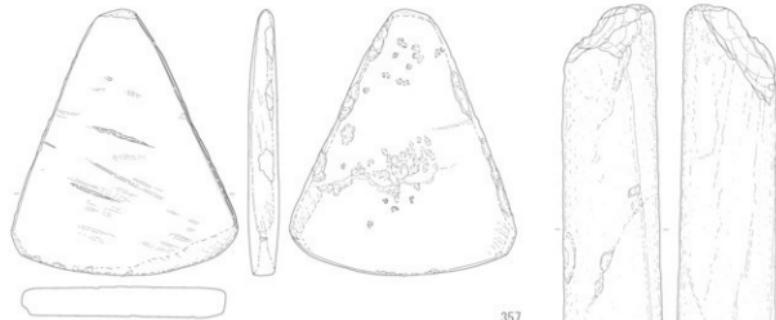
355



356

0
(S=1/2) 5 cm

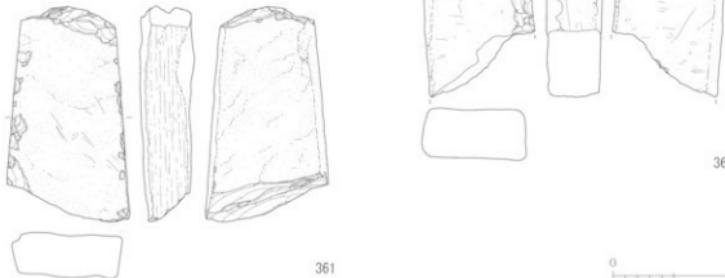
第46図 SX13包含層出土石器7



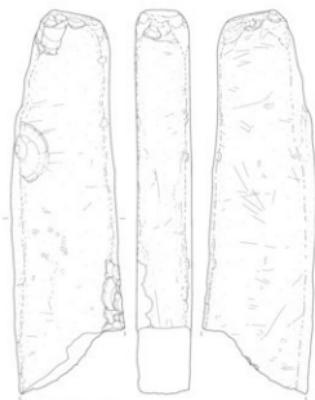
357



358



359



360



361



第47図 SX13包含層出土石器 8

第6表 石器一覧表

No.	種 国	器 種	類型	出土地点	石 材	遺存度	法 量				備 考
							高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
273	新 30 国	石器	a	S108 (高知)	ソノワ	剥離欠	(14.0)	(11.1)	3.4	10.4	
274	新 38 国	石器	a	SX01-PM	日賀朝灰岩	剥離欠	(23.5)	(12.2)	3.5	10.6	
275	新 38 国	石器	c	S108 (高知)	日賀朝灰岩	剥離欠	19.4	(12.9)	6.1	(1.6)	
276	新 38 国	石器	c	SX08	日賀朝灰岩	—	(21.1)	23.1	7.7	(4.7)	未製品
277	新 38 国	石器	e	SX01-P11	ソノワ	—	30.9	20.6	9.5	4.7	未製品
278	新 38 国	石器	e	S108 (高知)	日賀朝灰岩	剥離欠	21.6	9.8	4.5	10.87	
279	新 38 国	石器	e	P061	黑曜石	—	(24.9)	26.3	8.3	(3.2)	未確認転用
280	新 38 国	石器	e	SX28	日賀朝灰岩	つまみ彫欠	59.6	23.9	7.4	17.6	
281	新 38 国	石器	e	SX74	日賀朝灰岩	剥離欠	62.6	37.2	10.4	31.2	
282	新 39 国	複形石器	d	SX65	日賀朝灰岩	日付彫	29.5	22.9	5.6	4.6	
283	新 38 国	複形石器	d	SX39	日賀朝灰岩	—	25.6	(18.6)	9.8	(4.7)	
284	新 38 国	打削石器	b	SX34	日賀朝灰岩	—	29.5	28.5	4.4	2.5	
285	新 39 国	打削石器	d	SX55	シルト岩	剥離欠	34.0	34.7	14.6	25.3	
286	新 39 国	打削石器	d	SX39	砂岩	剥離欠	130.5	67.5	37.0	465.0	
287	新 39 国	磨石	e	P060	日賀朝砂岩	剥離欠	65.6	62.3	61.9	369.0	
288	新 39 国	磨石	b	P708	泥岩	剥離欠	98.8	76.2	41.6	490.0	
289	新 39 国	磨石	b	SX65	日賀朝砂岩	剥離欠	83.8	81.8	49.1	490.0	
290	新 39 国	石棒	e	P025	日賀朝砂岩	剥離欠	(52.1)	47.3	32.8	(14.3)	
291	新 39 国	石削刀板	e	P728	日賀朝砂岩	剥離欠	47.2	46.4	8.9	24.3	
292	新 39 国	石削刀板	e	P018	日賀朝砂岩	剥離欠	88.3	49.1	11.7	44.7	
293	新 39 国	石棒	e	SX15	日賀朝灰岩	左側欠	17.4	12.4	3.9	69.4	
294	新 40 国	石棒	e	SX13	日賀朝灰岩	右側欠	19.2	14.3	3.0	69.5	アズファルト付着?
295	新 40 国	石棒	a	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	71.8	(13.9)	3.4	0.5	
296	新 40 国	石棒	a	SX12 中盤	ソノワ	剥離欠	(24.2)	(17.2)	5.9	(1.5)	
297	新 40 国	石棒	a	SX12	ソノワ	石棒欠	(25.2)	(13.1)	2.8	0.55	
298	新 40 国	石棒	a	SX12 上盤	日賀朝灰岩	上半欠	(13.8)	12.2	3.4	0.43	
299	新 40 国	石棒	a	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	23.8	13.6	3.2	0.8	アズファルト付着?
300	新 40 国	石棒	a	通研保存地	日賀朝灰岩	剥離欠	28.3	16.3	3.3	1.1	
301	新 40 国	石棒	b	SX12	剥離石	剥離欠	13.5	13.8	4.7	0.7	未製品?
302	新 40 国	石棒	b	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	(21.2)	13.4	5.1	(1.4)	
303	新 40 国	石棒	e	SX12	日賀朝灰岩	剥離欠	18.0	14.1	3.0	0.4	
304	新 40 国	石棒	e	SX12 上盤	日賀朝灰岩	右1/2欠	(29.5)	19.1	4.2	(1.0)	
305	新 40 国	石棒	e	SX13	日賀朝灰岩	剥離欠	21.5	16.1	6.0	0.9	
306	新 40 国	石棒	e	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	21.8	17.4	3.6	0.9	未製品?
307	新 40 国	尖頭器	e	SX12 中盤	日賀朝灰岩	—	48.1	29.1	10.8	10.9	未製品?
308	新 40 国	石棒	a	SX12 中盤	日賀朝灰岩	—	34.9	32.8	12.6	8.9	
309	新 40 国	石棒	a	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	28.1	12.6	4.2	1.3	石継転用?
310	新 40 国	石棒	b	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	(21.9)	14.6	5.5	(1.2)	
311	新 40 国	石棒	e	SX12 上盤	剥離	剥離欠	41.5	28.4	12.2	13.7	
312	新 40 国	石棒	e	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	58.2	28.8	12.8	16.7	
313	新 41 国	複形石器	a	SX13 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	(55.5)	15.5	9.5	(7.6)	
314	新 41 国	石棒	e	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	(58.7)	21.9	11.3	(13.1)	
315	新 41 国	石棒	b	SX12	剥離	剥離欠	36.9	46.9	10.1	9.8	
316	新 41 国	複形石器	e	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	22.6	27.2	9.9	4.7	
317	新 41 国	複形石器	e	SX12 上盤	砂岩	剥離欠	19.2	(16.1)	6.7	1.7	
318	新 41 国	複形石器	e	SX12 上盤	—	剥離欠	23.9	22.5	10.5	6.3	
319	新 41 国	複形石器	e	SX12 上盤	—	剥離欠	31.4	33.3	9.8	8.5	
320	新 41 国	抉り入り石器	e	SX12 上盤	日賀朝灰岩	—	44.2	46.5	8.5	10.4	
321	新 41 国	石削石器	b	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	19.6	(23.6)	5.0	(1.8)	
322	新 41 国	不定形石器	e	SX12 下盤	日賀朝灰岩	剥離欠	(40.2)	40.6	12.3	(20.3)	
323	新 41 国	不定形石器	e	SX12	日賀朝灰岩	剥離欠	(43.9)	27.7	11.8	12.5	
324	新 42 国	不定形石器	e	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	71.3	68.3	19.2	80.9	
325	新 42 国	不定形石器	b	SX12 中盤	日賀朝灰岩	—	22.1	25.2	5.9	3.1	
326	新 42 国	不定形石器	e	SX12 上盤	日賀朝灰岩	剥離欠	59.1	43.7	24.0	54.8	
327	新 42 国	不定形石器	b	SX12 中盤	日賀朝灰岩	剥離欠	961.6	26.5	15.3	(19.9)	
328	新 42 国	不定形石器	b	SX12 上盤	剥離	剥離欠	37.9	(14.8)	12.7	(116.9)	
329	新 43 国	不定形石器	d	SX12 中盤	カルンフェルス	—	69.7	75.1	24.9	139.6	
330	新 43 国	不定形石器	d	SX12	細火質砂岩	—	115.5	103.4	47.3	670.0	
331	新 43 国	石削石板	e	SX12 中盤	細火質砂岩	剥離欠	40.4	40.3	8.1	21.1	
332	新 43 国	石削石板	e	SX12 上盤	細火質砂岩	剥離欠	53.3	54.5	12.7	65.0	
333	新 43 国	石削石板	e	SX12 中盤	細火質砂岩	剥離欠	52.9	48.4	10.9	31.4	
334	新 43 国	石削石板	e	SX12 上盤	細火質砂岩	剥離欠	50.9	49.3	15.7	58.4	
335	新 43 国	石削石板	e	SX12 下盤	細火質砂岩	剥離欠	53.5	47.6	10.5	35.3	
336	新 44 国	打削石器	e	SX12 中盤	細火質砂岩	剥離欠	65.0	53.8	10.8	28.1	
337	新 44 国	打削石器	e	SX12 中盤	シート岩	剥離欠	69.5	49.2	12.0	44.5	
338	新 44 国	打削石器	e	SX12 中盤	青武岩	剥離欠	116.7	99.8	27.5	198.2	
339	新 44 国	上槽	e	SX12 上盤	砂岩	剥離欠	116.1	58.6	29.3	251.3	
340	新 44 国	打削石器	e	SX12 上盤	砂岩	剥離欠	120.8	64.5	31.2	315.0	打石転用
341	新 44 国	打削石器	e	SX12 上盤	砂岩	剥離欠	143.6	57.6	34.6	231.1	
342	新 45 国	打削石器	e	SX12 上盤	剥離	剥離欠	109.9	60.9	38.6	167.0	
343	新 45 国	磨石	e	SX12 上盤	剥離	剥離欠	41.4	18.2	5.4	3.4	
344	新 45 国	磨石	e	SX12 中盤	綠色岩	剥離欠	89.1	40.5	22.9	152.3	

No.	種	國	器種	類型	出土地点	石 材	遺存度	法量			
								長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)
345	第45回	磨製石斧	-	SX13 上縁	磨製石斧	ほぼ完	29.9	42.9	15.0	81.7	
346	第45回	磨石	-	SK37	磨製砂質	完	97.6	89.6	71.3	675.0	
347	第45回	磨石	b	SX13 中縁	磨製砂質	完	117.1	106.5	69.2	1180.0	
348	第45回	磨石	a	SX13 上縁	砂質	崩壊	98.5	65.1	32.4	(282.9)	
349	第46回	圓石	-	SX13 中縁	磨製砂質	完	140.6	101.4	66.6	1330.0	磨石一回有
350	第46回	圓石	-	SX13 上縁	磨製砂質	一部欠	(125.6)	106.5	25.6	(385.0)	
351	第46回	圓石	-	SX13 上縁	灰岩	完	105.4	84.2	44.1	358.8	
352	第46回	圓石	-	SX13 上縁	磨製砂質?	完	139.2	76.4	42.3	545.8	
353	第46回	石椎	-	SX13 中縁	砂質	1/4 残	(98.8)	(73.9)	41.6	(430.0)	
354	第46回	鐵石	-	SX13 上縁	磨製砂質	完	64.2	46.1	20.1	19.4	
355	第46回	ゴの子形石製品	-	SX13	磨製砂質	ほぼ完	55.1	89.1	15.3	56.9	
356	第46回	石刀	-	SX13	灰岩	崩壊	(42.0)	28.6	13.1	(14.0)	
357	第47回	禮型石製品	-	SX13 上縁	磨製砂質	完	109.4	93.1	12.9	129.2	
358	第47回	石椎	-	B区裏土	ホルンフェルス	崩壊?	(169.0)	42.1	35.1	(416.0)	
359	第47回	棒状石製品	-	SX13 中縁	砂質	崩壊?	(158.1)	34.8	23.3	(209.7)	
360	第47回	棒狀石製品	-	SX13 上縁	砂質	崩壊?	(137.0)	47.2	22.8	(305.0)	
361	第47回	棒狀石製品	-	SX13 中縁	砂質	崩壊?	68.4	50.8	22.6	(158.9)	
石椎	-	SX13 上縁	磨製砂質	完	12.4	14.1	2.2	2.2	0.2		
石椎	-	石椎	左脚欠	-	66.6	(13.5)	4.9	0.9	0.9	未製品?	
石椎	a?	SX13 上縁	磨製砂質	完	20.5	16.9	3.8	0.7			
石椎	b	SX24 付近	磨製砂質	脚部欠	(20.6)	(17.0)	7.0	(2.0)	未製品?		
石椎	b	SX13 中縁	磨製砂質	完	28.1	18.3	6.5	2.8	未製品?		
石椎	b	B区裏土	磨製砂質	完	27.1	17.4	5.6	2.3	未製品?		
石椎	b?	SX15	磨製砂質	完	22.0	13.5	3.2	0.9			
石椎	c	SX13 上縁	磨製砂質	1/2 欠	18.5	(12.9)	3.0	(0.7)	未製品?		
石椎	d	SX09 付近	磨製砂質	完	16.7	12.9	3.7	0.5			
石椎	e	SX13	磨製砂質	先失端欠	(17.2)	(11.1)	2.4	(0.4)			
石椎	f	B区表層	磨製砂質	失端欠	(17.0)	(13.0)	4.3	(1.0)			
石椎	g	B区表層	メノウ	-	26.9	(16.6)	6.5	(2.7)	未製品?		
石椎	h	B区	無機物	崩壊?	(13.5)	(10.1)	4.8	0.5	未製品?		
石椎	i	B区	無機物	崩壊?	22.7	(13.9)	5.4	(1.0)	未製品?		
玉細器	珠19付近	白質砂質	ほぼ完	-	34.6	(26.3)	7.2	(7.1)			
玉細器	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	41.1	(24.7)	7.4	(6.6)			
石椎	a	B区	磨製砂質	漏失?	29.6	(21.0)	8.1	4.7			
圓形石器	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(28.0)	(16.0)	10.1	(11.2)			
圓形石器	-	B区上縁	磨製砂質	漏失?	27.4	28.5	10.8	8.6			
圓形石器	-	表表	磨製砂質	漏失?	29.8	(35.0)	14.1	(17.7)			
圓形石器	-	一	磨製砂質?	漏失?	(26.0)	(25.1)	5.2	4.0			
圓形石器	-	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	(23.0)	(20.0)	13.0	6.8			
圓形石器	-	SX13 上縁	メノウ	漏失?	25.0	(14.4)	6.7	2.6			
圓形石器	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	25.6	(21.4)	10.8	(6.1)			
圓形石器	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	29.3	(22.0)	10.1	6.6			
圓形石器	-	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	29.6	(31.2)	13.3	(18.0)			
圓形石器	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(19.0)	(12.7)	7.5	(2.1)			
圓形石器	-	B区カラクタ	メノウ	漏失?	26.1	(20.0)	11.6	6.8			
圓形石器	-	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	(23.4)	(21.8)	11.4	6.4			
圓形石器	-	SK21	砂質?	漏失?	18.3	(23.1)	4.9	(2.4)			
不定形石器	a	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(23.0)	(37.4)	12.2	9.9			
不定形石器	a	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	31.0	46.9	12.1	11.9			
不定形石器	a	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	30.6	(25.3)	2.5	(1.3)			
不定形石器	a	SX13	磨製砂質	漏失?	20.4	(15.2)	5.3	(1.7)			
不定形石器	a?	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	36.0	29.2	9.2	7.2			
不定形石器	a?	SX13	磨製砂質	漏失?	28.6	(18.0)	3.8	(0.7)			
不定形石器	b	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	24.4	(22.1)	6.1	3.1			
不定形石器	b	B区裏土	磨製砂質	漏失?	41.0	32.6	11.8	10.4			
不定形石器	b	B区上縁	磨製砂質	漏失?	29.5	28.1	6.6	6.3			
不定形石器	b	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(25.2)	(29.0)	9.4	(8.8)			
不定形石器	b?	-	磨製砂質	漏失?	16.0	(15.2)	2.0	(0.7)			
不定形石器	b?	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(42.0)	31.0	11.7	(14.2)			
石削り板	-	SK27	磨製砂質	1/2 残	29.8	(33.6)	7.5	(18.3)			
石削り板	-	SX13 上縁	磨製砂質	1/2 残	30.6	(38.1)	6.9	(12.4)			
石削り板	-	SK26	磨製砂質	1/2 残	30.6	(37.0)	7.4	(12.2)			
石削り板	-	SK15	磨製砂質	1/2 残	42.5	(41.0)	5.2	(9.9)			
刮削	-	B区表層	磨製砂質	漏失?	(38.6)	(24.1)	7.9	(3.1)			
刮削	-	B区裏土	磨製砂質	漏失?	(41.0)	(36.0)	10.1	(12.0)			
刮削	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	36.1	(21.0)	6.8	(5.8)			
刮削	-	SX13 上縁	磨製砂質	漏失?	(22.4)	(23.6)	7.0	(4.1)			
刮削	-	SX13 上縁	メノウ	漏失?	41.7	(24.0)	11.1	(7.7)			
刮削	-	SX13 中縁	磨製砂質	-	47.0	40.0	11.8	19.4			
刮削	-	SX13 中縁	磨製砂質	漏失?	22.2	(22.6)	9.1	(3.0)			
刮削	-	SK21 付近	無機物	-	29.1	24.5	10.0	3.8			
刮削	-	B区裏土	磨製砂質	-	(29.0)	(36.4)	8.0	(8.0)			
刮削	-	B区イカク	磨製砂質	-	39.9	(45.4)	8.0	(13.3)	學識有り		

No.	種 因	器 種	類型	出土地点	石 材	遺存度	法 量				備 考
							底 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
	鉢	-	SX13 中層	細質陶灰質	澆欠	53.0	(43.6)	4.7	(8.0)		
	鉢	-	SX13 上層	細灰質砂質	日付充	55.5	41.9	12.8	27.6		
	鉢	-	SX09	細灰質砂質	日付充	50.0	91.3	18.4	57.0		
	鉢	-	B IX 鉢土	粗質陶灰質	日付充	19.5	21.1	6.7	2.3		
	鉢	-	SX13 下層	粗質陶灰質	澆欠	29.2	(20.5)	6.3	(4.6)		
	鉢	-	SX13 上層	粗質陶灰質	澆残	26.4	(28.3)	9.9	(10.8)		
	鉢	-	C 区表土	細質陶灰質	一	25.7	39.9	11.2	16.1		
	鉢	-	SX13 上層	灰質	日付充	89.5	64.9	12.5	116.9		
	鉢	-	SX13	細板岩	完	94.1	43.2	19.4	53.7		
打削石斧	SX13 上層	細灰質砂質	完	81.0	48.2	20.3	391.0				
打削石斧	SX13 上層	細灰質砂質	完	58.8	31.7	14.3	29.1				
打削石斧	SX13 上層	細灰質砂質	完	73.8	46.2	18.9	80.7				
打削石斧	-	SX13 下層	細灰質砂質	完	52.8	41.4	8.4	25.0	磨石軸用?		
打削石斧	-	SX13 上層	細板岩	澆残	(44.2)	58.7	17.4	(62.1)			
打削石斧	-	B IX 表土	細質陶灰質	完	92.2	45.6	14.7	71.2			
打削石斧	-	SX13	細灰質砂質	澆残	(91.1)	93.3	32.7	(378.0)			
磨盤石斧	-	SX13 上層	灰岩	万歎欠	98.9	27.4	21.4	(102.7)			
磨盤石斧	-	SX13 上層	灰岩	万歎欠	97.0	42.7	19.8	(115.8)			
磨石	a C 区表土	砂岩	一	143.8	115.1	63.5	1388.0				
磨石	b SX13 表土	砂岩	澆欠	(193.4)	67.9	43.5	(480.0)	石製品小字			
磨石	b SX13 上層	細灰質砂質	澆欠	(76.5)	84.1	66.5	(660.0)				
磨石	b SX13	細灰質砂質	日付充	21.1	83.3	32.9	820.0				
磨石	b SX13	細灰質砂質	完	104.4	109.2	74.8	1250.0				
磨石	b SX13	細灰質砂質	完	97.1	82.2	63.1	720.0				
磨石	b SX13 中層	石英斑岩	1/2	(90.5)	88.5	67.8	(600.0)				
磨石	b SX13	細灰質砂質	完	109.9	91.3	54.0	825.0				
磨石	b SX13	細灰質砂質	完	77.1	63.4	28.7	233.1				
磨石	b SX13	ホルンフェルス	澆残	(77.4)	51.8	31.7	(207.1)				
磨石	d SX13 上層	細灰質砂質	完	83.5	71.9	44.3	430.0				
磨石	d SX13 上層	細灰質砂質	完	68.2	96.3	51.6	279.5				
磨石	d SX13	細灰質砂質	1/2 残?	(600.0)	99.3	93.0	5200.0				
研石	d SX12 上層	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	17.4	
研石	d SX12 中層	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	25.6	
研石	c C IX	細灰質砂質	—	(128.9)	(78.7)	42.6	(420.0)				
研石	SX13	細灰質砂質	—	96.2	70.1	39.3	(216.9)				
研石	- SX13 上層	泥岩	澆残	(102.1)	39.9	23.8	(159.2)				
研石	- SX13 中層	砂岩	—	(124.9)	67.2	35.7	(346.0)				
石鑿	- SX13 上層	細灰質砂質	澆残	(373.0)	(1066.0)	146.5	906.0				
石鑿	- SX13	細灰質砂質	澆残	(1030.0)	(228.0)	66.4	21.0	(850.0)			
石鑿	- SX13	細灰質砂質	澆残	(1000.0)	(1048.0)	50.8	1386.0				
石鑿	- SX13	細灰質砂質	澆残	(98.7)	(1546.0)	620.0	1105.0				
礪石	SX13 上層	細板岩	澆残	(42.4)	(42.0)	96.3	(111.8)	古代?			
石核?	- SX02	粗質陶灰質	—	—	—	—	—	—	—	46.6	
自然鍬	- SX12 上層	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	5.1	
自然鍬	- SX13 カクラン	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	10.2	
自然鍬	- SX13 中層	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	12.3	
自然鍬	- 植	鵝卵石	—	—	—	—	—	—	—	46.6	
石棒	- SX13	細板岩	澆残	(112.9)	32.3	26.2	(143.0)				
棒状石製品	- SX13 上層	泥岩	澆残	(66.6)	34.8	17.2	(28.8)				
棒状石製品	- SX05 上層	細板岩	澆残	(220.1)	4.5	22.7	(310.0)				
棒状石製品	- SX13 中層	ホルンフェルス	澆残	(50.5)	31.9	7.6	(21.6)				
棒状石製品	- SX13	細板岩	澆残	(97.4)	40.1	19.2	(85.8)				
コロナ形石製品	SX13	細灰質砂質	日付充	93.6	190.0	36.8	280.0				

(5) 古銭・金属製品 (362 ~ 482、写真図版 28・29)

今回出土した古銭は、123 点である。このうち 1 点は、B 区の SA54 の柵列内のピットから出土したもので、それ以外の 122 点は経塚からの出土である。

内訳は、渡来銭の元豊通寶（宋銭、篆書体、始鑄 1078 年）1 点、永楽通寶（明銭、真書体、始鑄 1408 年）1 点、古寛永通寶 96 点、新寛永通寶（文銭）23 点、寛永通寶（新古の判読不明）2 点であり、元禄 10(1697) 年に铸造が始まると無背の新寛永通寶はまったく出土していない。

古寛永と文銭を（点数の多寡を考慮せず）比較すると、外径、内径、縁厚、重量の平均値は、心持ち文銭の方が大きな値を示した。

古寛永は铸造地が多く、仙台で铸造されたものは一般的に仙台銭と呼ばれている。今回、字体などにより一部分類ができる余地があったが、敢えて行っていない。

金属製品は、大半が SI08 から出土している。468 ~ 470 は銅製品で、468 は煙管の雁首で、火皿と脂返しとの接合部に補強帯を持ち、肩付きであることから、小泉編年の II 段階（17 世紀後半頃）と言える。この他、SB10 付近からもう 1 点出土しているが、バラバラに割れているため、図化はできなかった。火皿と脂返しとの接合部に補強帯を持ち、脂返しは 1 本作りで肩が付かないタイプで、小泉編年の III 段階（18 世紀前半頃）に相当するものである。469・470 は製品の破片であるが、不明である。469 はもしかしたら刀子状の柄の可能性がある。

鉄製の釘は、13 点が出土し 12 点を図化した。大半が小形の釘で、SI08 の建物に使用されたものと考えているが、481・482 は掘り方から出土している。

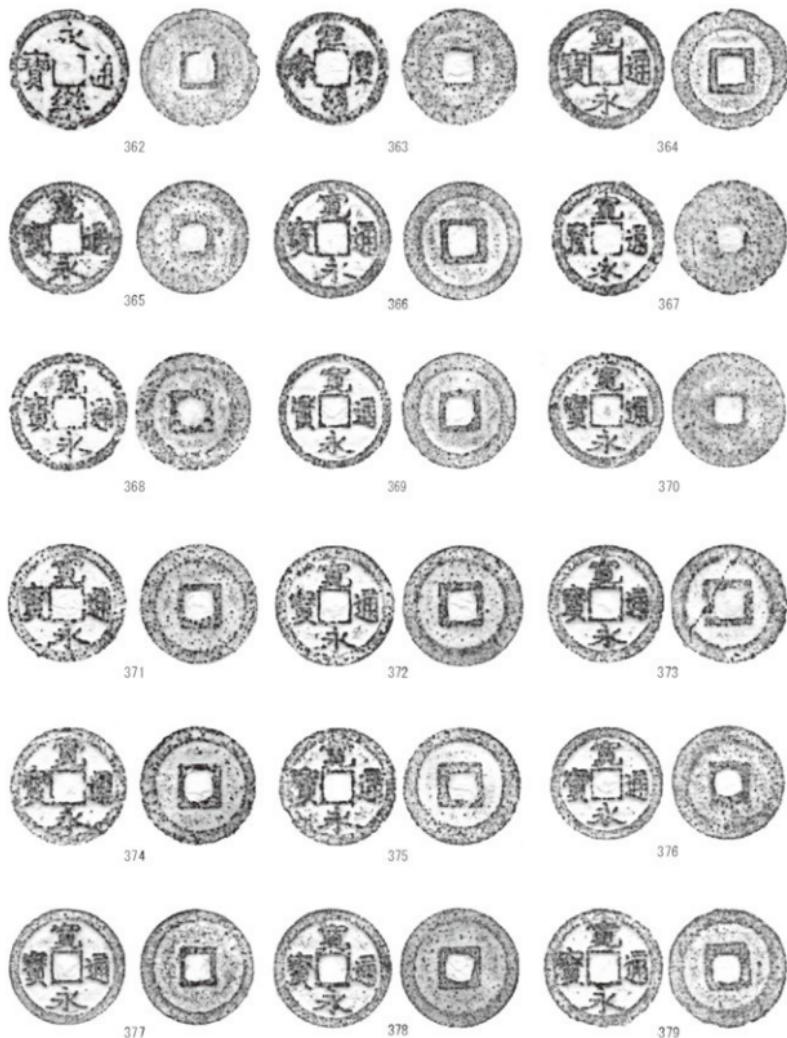
第 8 表 金属製品一覧表

No.	材質	種類	出土遺構	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
468	青銅	煙管雁首	SI08 摂り方	(2.0)	(2.2)	—	(4.1)	肩部径 0.9cm
469	青銅	柄？	SI08 摂り方	(5.5)	(1.7)	(0.1)	(4.1)	孔 0.15cm
470	青銅	金具	SI08 上層	(2.0)	(0.9)	(0.3)	(1.0)	釘 0.3cm
471	鉄	釘	SI08 上層	(3.9)	0.5	0.4	(1.9)	
472	鉄	釘	SI08 上層	4.2	0.9	0.6	1.7	
473	鉄	釘	SI08 上層	(4.3)	1.4	0.8	(5.3)	
474	鉄	釘	SI08 上層	(5.4)	0.5	0.5	(4.6)	
475	鉄	釘	SI08 上層	(3.7)	0.7	0.7	(2.3)	
476	鉄	釘	SI08 上層	(1.8)	0.5	0.5	(2.4)	
477	鉄	釘	SI08 上層	(2.7)	0.6	0.5	(1.1)	
478	鉄	釘	SI08 上層	(1.9)	0.7	0.5	(0.6)	
479	鉄	釘	SI08 上層	(2.6)	0.9	0.7	(2.2)	
480	鉄	釘	SI08 上層	(3.3)	0.7	0.6	(3.3)	
481	鉄	釘	SI08 摂り方	(3.8)	0.5	0.6	(2.3)	
482	鉄	釘	SI08 摂り方	(3.0)	1.0	0.6	(1.6)	

第 7 表 古銭計測値比較

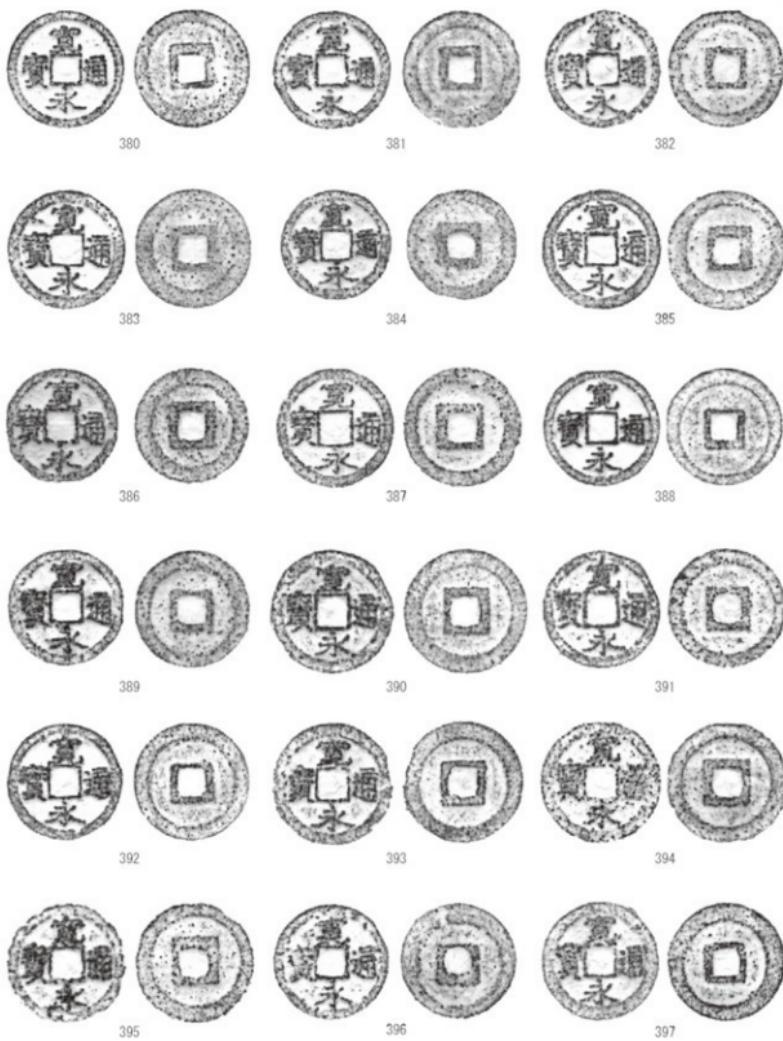
	古寛永	文銭
外縁外径平均値 (cm)	2.46	2.54
外縁内径平均値 (cm)	1.97	2.03
内郭外径平均値 (cm)	0.70	0.71
内郭内径平均値 (cm)	0.56	0.58
縁厚平均値 (cm)	0.12	0.13
重量平均 (g)	3.02	3.10
縁幅比平均	0.12	0.13
孔径比平均	0.29	0.29

（破片は平均値に含まれない）

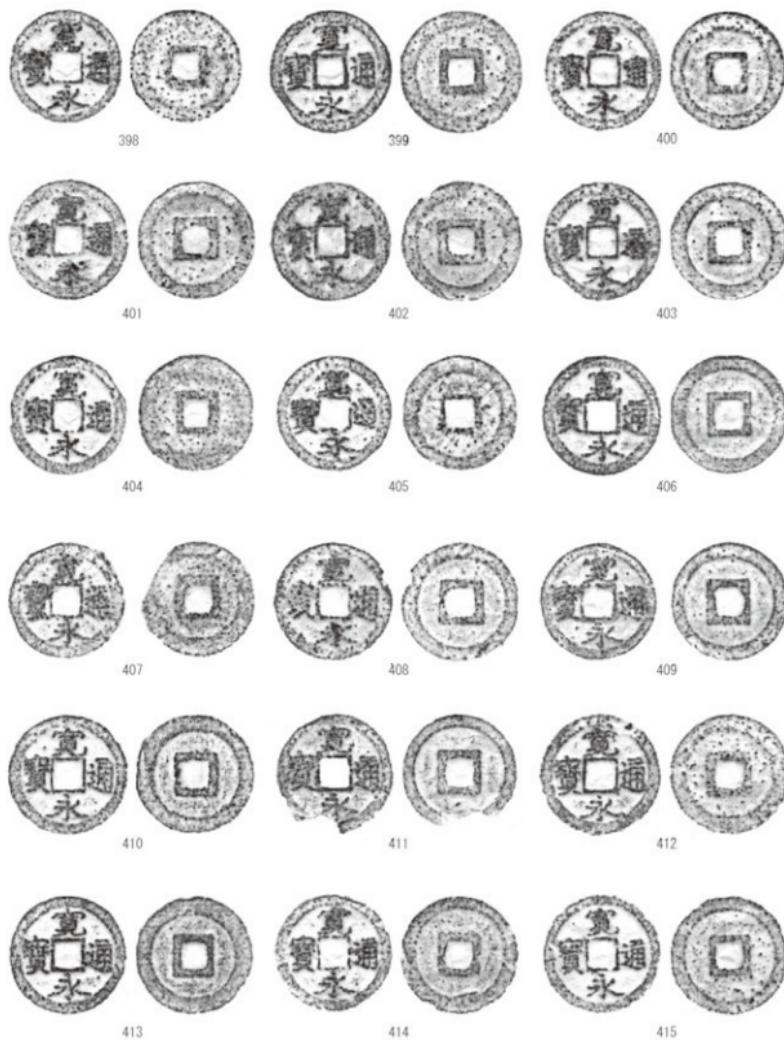


0 5cm
(5=1/1)

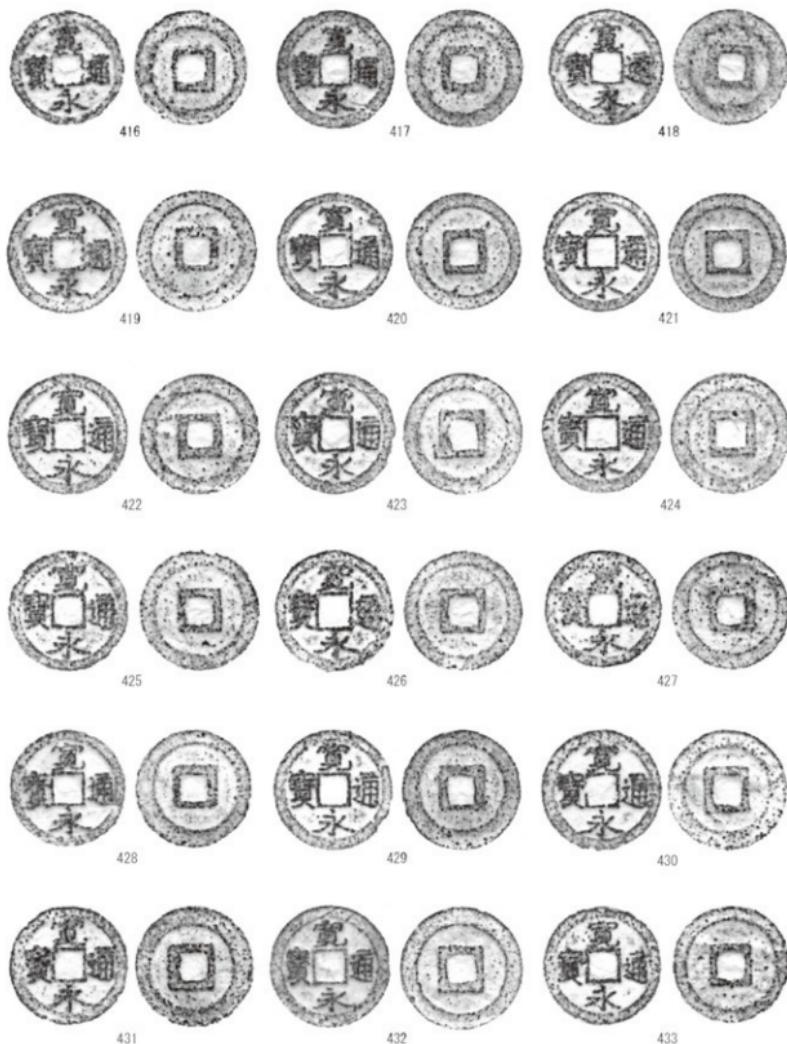
第48図 古銭1



第49図 古銭2



第50図 古銭3



第51図 古銭4



434

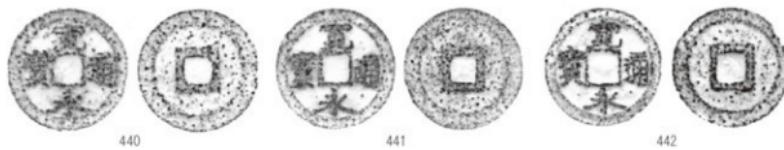
435

436

437

438

439



440

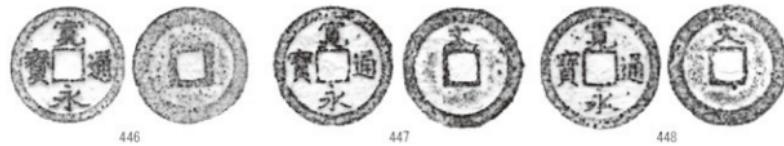
441

442

443

444

445



446

447

448

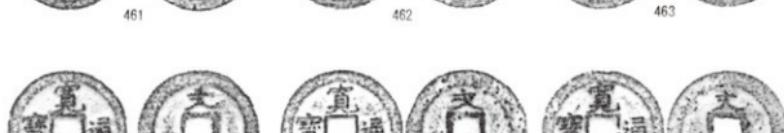
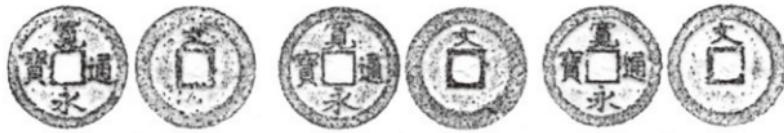
449

450

451



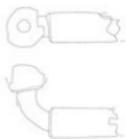
第 52 図 古銭 5



5cm

(S=1/1)

第 53 図 古銭 6



468



469



470



471



472



473



474



475



476



477



478



479



480



481



482

0 5cm
(S=2/3)

第 54 図 金属製品

第9表 古錢一覽表

No.	出土地点	種別	外緣外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	鍍 厚 (cm)	重 量 (g)
362	SA54 P1	永泰通寶	2.51	2.11	0.65	0.54	0.12	2.5
363	経塚	元豐通寶	2.42	1.94	0.78	0.62	0.16	2.8
364	経塚	古寛永	2.50	1.98	0.69	0.56	0.12	3.0
365	経塚	古寛永	2.37	1.96	0.74	0.56	0.12	3.3
366	経塚	古寛永	2.48	2.00	0.76	0.60	0.11	2.5
367	経塚	古寛永	2.38	1.88	0.66	0.52	0.11	2.1
368	経塚	古寛永	2.48	2.02	0.68	0.55	0.13	2.7
369	経塚	古寛永	2.40	2.00	0.68	0.55	0.12	3.0
370	経塚	古寛永	2.40	1.89	0.67	0.57	0.10	2.1
371	経塚	古寛永	2.49	2.00	0.75	0.59	0.14	3.8
372	経塚	古寛永	2.51	1.98	0.68	0.59	0.13	3.5
373	経塚	古寛永	2.48	1.90	0.73	0.58	0.13	3.3
374	経塚	古寛永	2.47	1.99	0.76	0.58	0.14	3.0
375	経塚	古寛永	2.46	1.96	0.71	0.53	0.14	3.8
376	経塚	古寛永	2.37	1.91	0.65	0.55	0.11	2.7
377	経塚	古寛永	2.42	1.94	0.65	0.54	0.13	3.3
378	経塚	古寛永	2.48	1.99	0.71	0.55	0.13	3.6
379	経塚	古寛永	2.50	1.93	0.71	0.57	0.14	3.7
380	経塚	古寛永	2.43	2.00	0.65	0.54	0.11	2.0
381	経塚	古寛永	2.44	1.98	0.66	0.53	0.13	3.3
382	経塚	古寛永	2.42	2.01	0.68	0.58	0.12	2.2
383	経塚	古寛永	2.46	1.94	0.71	0.61	0.11	3.4
384	経塚	古寛永	2.29	1.84	0.68	0.55	0.11	2.4
385	経塚	古寛永	2.49	1.97	0.71	0.56	0.14	3.6
386	経塚	古寛永	2.40	1.97	0.73	0.54	0.13	2.9
387	経塚	古寛永	2.48	1.98	0.76	0.60	0.11	2.0
388	経塚	古寛永	2.45	2.00	0.65	0.54	0.12	2.7
389	経塚	古寛永	2.44	1.97	0.69	0.57	0.12	3.2
390	経塚	古寛永	2.58	2.00	0.72	0.60	0.12	2.9
391	経塚	古寛永	2.47	1.99	0.76	0.58	0.14	2.8
392	経塚	古寛永	2.42	1.97	0.69	0.58	0.13	4.3
393	経塚	古寛永	2.52	2.00	0.71	0.59	0.10	(2.0)
394	経塚	古寛永	2.53	2.01	0.73	0.60	0.12	2.8
395	経塚	古寛永	2.50	1.97	0.79	0.58	0.11	2.9
396	経塚	古寛永	2.40	1.97	0.69	0.54	0.11	3.0
397	経塚	古寛永	2.46	1.90	0.70	0.53	0.11	2.8
398	経塚	古寛永	2.35	1.93	0.70	0.58	0.08	(2.1)
399	経塚	古寛永	2.53	2.00	0.70	0.55	0.12	(2.5)
400	経塚	古寛永	2.46	2.01	0.69	0.55	0.13	2.6
401	経塚	古寛永	2.47	1.92	0.71	0.55	0.10	3.0
402	経塚	古寛永	2.51	2.01	0.71	0.56	0.14	3.1
403	経塚	古寛永	2.46	1.94	0.69	0.56	0.12	(3.3)
404	経塚	古寛永	2.45	1.94	0.69	0.55	0.11	(2.7)
405	経塚	古寛永	2.40	1.90	0.68	0.57	0.12	2.4
406	経塚	古寛永	2.48	1.98	0.72	0.60	0.10	2.4
407	経塚	古寛永	2.39	1.84	0.71	0.57	0.10	(2.6)
408	経塚	古寛永	2.45	2.01	0.71	0.59	0.12	(3.2)
409	経塚	古寛永	2.44	1.99	0.74	0.58	0.12	3.8
410	経塚	古寛永	2.50	1.98	0.70	0.57	0.13	2.8
411	経塚	古寛永	2.42	1.98	0.75	0.61	0.12	(3.1)
412	経塚	古寛永	2.50	1.96	0.73	0.58	0.11	3.0
413	経塚	古寛永	2.45	1.95	0.72	0.53	0.12	2.4
414	経塚	古寛永	2.43	1.96	0.67	0.55	0.11	2.9
415	経塚	古寛永	2.45	2.00	0.68	0.55	0.13	3.1
416	経塚	古寛永	2.40	1.90	0.67	0.53	0.14	3.4
417	経塚	古寛永	2.46	1.95	0.70	0.54	0.11	3.1
418	経塚	古寛永	2.40	1.92	0.68	0.57	0.11	3.0
419	経塚	古寛永	2.50	1.99	0.72	0.54	0.11	(3.2)
420	経塚	古寛永	2.42	2.00	0.71	0.56	0.12	2.7
421	経塚	古寛永	2.49	2.04	0.73	0.58	0.12	2.9
422	経塚	古寛永	2.51	2.01	0.73	0.53	0.12	3.8

No.	出土地点	種別	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	縁厚 (cm)	重量 (g)
423	経塚	古窓水	2.52	2.02	0.71	0.59	0.12	3.8
424	経塚	古窓水	2.51	1.98	0.76	0.61	0.13	3.4
425	経塚	古窓水	2.52	2.02	0.70	0.54	0.12	2.8
426	経塚	古窓水	2.50	1.97	0.78	0.62	0.14	3.3
427	経塚	古窓水	2.47	1.96	0.72	0.59	0.14	4.7
428	経塚	古窓水	2.45	1.96	0.70	0.54	0.12	2.8
429	経塚	古窓水	2.48	2.01	0.70	0.56	0.13	3.4
430	経塚	古窓水	2.52	1.96	0.71	0.60	0.14	3.8
431	経塚	古窓水	2.50	2.00	0.70	0.55	0.13	3.2
432	経塚	古窓水	2.54	1.99	0.71	0.61	0.14	4.2
433	経塚	古窓水	2.46	1.97	0.72	0.56	0.13	2.8
434	経塚	古窓水	2.43	2.00	0.70	0.50	0.12	3.1
435	経塚	古窓水	2.40	1.93	0.75	0.61	0.10	2.1
436	経塚	古窓水	2.47	2.04	0.67	0.59	0.11	2.4
437	経塚	古窓水	2.42	1.96	0.70	0.55	0.10	2.1
438	経塚	古窓水	2.43	2.00	0.66	0.55	0.13	4.0
439	経塚	古窓水	2.48	1.98	0.67	0.55	0.11	2.5
440	経塚	古窓水	2.54	1.98	0.70	0.55	0.13	3.9
441	経塚	古窓水	2.51	2.00	0.67	0.52	0.10	3.1
442	経塚	古窓水	2.47	1.98	0.76	0.62	0.12	2.5
443	経塚	古窓水	2.44	1.99	0.67	0.55	0.12	3.1
444	経塚	古窓水	2.43	1.92	0.66	0.55	0.13	3.8
445	経塚	古窓水	2.46	1.89	0.65	0.57	0.12	2.7
446	経塚	古窓水	2.43	1.97	0.65	0.57	0.11	(2.7)
	経塚	古窓水	2.56	2.02	0.74	0.60	0.11	(2.2)
	経塚	古窓水	2.33	1.89	0.66	0.57	0.10	1.6
	経塚	古窓水	2.37	1.83	0.69	0.52	0.12	(2.4)
	経塚	古窓水	2.43	2.00	0.68	0.54	0.10	(1.5)
	経塚	古窓水	2.42	1.95	0.67	0.54	0.10	(1.6)
	経塚	古窓水	2.47	1.94	0.69	0.54	0.13	3.8
	経塚	古窓水	2.46	2.03	0.70	0.56	0.12	(2.9)
	経塚	古窓水	2.48	2.00	0.70	0.54	0.12	(1.8)
	経塚	古窓水	(2.52)	1.97	0.70	0.58	0.12	(1.5)
	経塚	古窓水	2.50	1.95	0.70	0.54	0.13	(3.1)
	経塚	古窓水	2.45	2.00	0.68	0.53	0.12	2.7
	経塚	古窓水	2.40	1.90	0.67	0.57	0.11	(1.1)
	経塚	古窓水	2.53	2.00	0.75	0.57	0.10	1.8
447	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.01	0.69	0.58	0.16	3.3
448	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.08	0.72	0.59	0.13	2.5
449	経塚	新窓水(文銭)	2.53	2.04	0.74	0.57	0.14	3.2
450	経塚	新窓水(文銭)	2.56	2.04	0.72	0.60	0.12	2.9
451	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.05	0.73	0.62	0.12	3.0
452	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.05	0.71	0.60	0.12	3.1
453	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.02	0.71	0.57	0.12	2.5
454	経塚	新窓水(文銭)	2.53	2.01	0.70	0.58	0.12	3.0
455	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.02	0.71	0.57	0.13	3.2
456	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.01	0.69	0.57	0.13	3.3
457	経塚	新窓水(文銭)	2.53	1.98	0.71	0.58	0.12	2.9
458	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.01	0.70	0.60	0.13	2.4
459	経塚	新窓水(文銭)	2.56	2.03	0.73	0.60	0.13	2.8
460	経塚	新窓水(文銭)	2.52	1.98	0.70	0.56	0.13	4.1
461	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.04	0.72	0.56	0.14	4.3
462	経塚	新窓水(文銭)	2.53	1.99	0.71	0.56	0.11	2.7
463	経塚	新窓水(文銭)	2.53	1.98	0.71	0.58	0.13	3.3
464	経塚	新窓水(文銭)	2.53	2.04	0.72	0.58	0.14	3.8
465	経塚	新窓水(文銭)	2.54	2.03	0.70	0.59	0.13	4.0
466	経塚	新窓水(文銭)	2.57	2.04	0.70	0.58	0.13	3.6
467	経塚	新窓水(文銭)	2.53	2.03	0.71	0.58	0.13	3.3
	経塚	新窓水(文銭)	2.55	2.01	0.69	0.57	0.14	2.2
	経塚	新窓水(文銭)	2.56	2.14	0.73	0.58	0.11	2.0
	経塚	窓水通寶(不明)	-	-	0.70	0.52	0.11	(1.6)
	経塚	窓水通寶(不明)	2.34	1.79	0.71	0.52	0.12	3.2

第IV章　まとめ

1. 繩文土器と石器

以下では、本遺跡から出土した縄文時代の遺物で特徴的な遺物やその傾向について述べ、調査館跡の縄文時代についてまとめる。

(1) 土器

1) 層位別の土器出土傾向

本遺跡で出土した土器はSX13包含層を中心に総量約151kgで、そのうち233点を図化し報告した。出土した土器の中には、磨滅が著しく報告に堪えないものも少くないが、報告した土器で遺構とSX13包含層から出土した土器の傾向を概ね示したと考える。

SX13包含層から出土した土器を層位別に第10表にまとめた。表より、下層では早期末の土器群と考えられる2類土器が出土土器の主体である。中層・上層ともに後期前半の土器型式である門前式に併行する土器群や南境式併行の土器群が主体であるが、その比率をみると中層では門前式併行の土器の割合が大きく、上層は南境式併行の割合が大きくなる。このことから、SX13包含層では下層から上層に向かって、より新しい土器群の割合が高くなることが確認できた。ただし、下層において4類土器が出土し、中層・上層においても1・2類土器が出土していることから、純然たる層ではないことは注意が必要である。

第10表　層位別土器分類表

早層		中層		門前式併行		南境式		千葉式		後期前半		南境式		門前式併行		
1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	
4(3.8%)	6(5.8%)	21(1.9%)	9(8.7%)	30(2.9%)	32(30.8%)	7(6.7%)	12(11.5%)	10(1.0%)	11(1.0%)	11(1.0%)	17(16.2%)	10(9.6%)	104			
11(1.2%)	11(11.1%)	0	11(11.1%)	70(8.2%)	12(14.2%)	8(9.5%)	6(7.2%)	0	0	0	19(22.6%)	9(10.7%)	84			
0	11(52.4%)	0	3(14.3%)	0	0	0	0	0	0	0	0	4(19.0%)	3(14.3%)	21		
早層		中層		層位		南境式		南境式		南境式		南境式		南境式		
1層	2層	1層	2層	併行	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層	1層	2層
9.6%	1.9%	11.6%	49.0%	1.0%												
14.3%	0%	21.4%	31.0%	0%												
52.4%	0%	13.4%	0%	0%												

2) 土器の文様と底部圧痕

遺跡から出土した土器の中で、いくつかの特徴的な文様がみられた。以下では、各分類のうち特徴的な土器文様と、底部に残る圧痕について、その特徴を述べる。

1類土器で特徴的なものは、第24図25～27にみられるように、口縁部や口縁部に近い胴部の表裏に地文を施すものである。地文にはLR、RLともにみられ、表裏ともに同様の原体を用いる。口縁部には外面側から刻みを施す。2類土器は胎土に纖維を含む土器で、第24図29・30、第30図130・132・136～138、第34図213～217などで特徴的にみられる。これらの土器は胎土に纖維を含むほか、LRがやや優勢の地文や羽状縄文、縄の押圧などもみられる。これら1・2類でみられる特徴から、これらの土器群は早期末に位置づけられる土器と考える。

3類土器は、区画する隆帯と隆帯に沿う刺突を有する特徴を持つ土器で、遺跡からの出土は極端に少なく、第24図35・36に示したのみである。刺突は土器に対し上方向から施文される。この特徴から、本報告ではこれらの土器を中期末～後期初頭（大木10式末併行か？）に位置づけられる土器とした。

4類土器で特徴的なものは、第24図44・39～41、第30図145・146などである。これらの土器は縦位方向の隆帯に刺突を施す鎖状隆帯や2個1対の刻み、ボタン状貼付文など門前式の土器文様の特徴を持つものがみられる。第5類土器の特徴を示すものは、第30図152～154などである。これらの土器は4類土器に見られる隆帯による区画が沈線による区画に変化しているものの、2個1対の刻みを施すため、一部貼付隆帯を残し施文するものである。門前式の中で区画や施文が隆帯から沈線による施文に変化することが指摘されており（稻村2008）、隆帯による区画や文様から沈線による区画・文様を施文する土器への過渡的な特徴を示すものとしてとらえた。これら4・5類土器は門前式の範疇に当たるものであろう。

6類土器の特徴を示すものは、第23図24、第25図48～51、58、63などである。これらの土器は数条の沈線により、口縁部近くや胴部に渦巻文様や半円を描くほか、渦巻文様や半円などを起点に縦位方向へ数条の沈線文を描く。これらの土器は南境式土器の範疇に当たるものとして、門前式併行の土器群に後続する土器群としてとらえている。

7類土器は、第31図171～177などにみられる比較的幅の狭い数条の沈線と磨消繩文により特徴付けられる土器群である。また、文様区画の結節点に刺突を持つものもみられる。これらの特徴から、7類土器として分類した土器群は十腰内1式土器と考えられる。

最後に10類土器である。本調査では第27図101に示した1点のみの出土である。この土器は胴部全面に刺突を有する特徴を持ち、三十稲場式土器の特徴と共に通するものと考える。これまでに三十稲場式土器は北東北～東海・近畿までその影響が及んでおり、三十稲場類型の主要素を概ね兼ね備え同様式と認められるものと特徴的な刺突施文のみが共通し、三十稲場式の影響下に製作されたものの両者があることが指摘されている（石坂2008）。本遺跡で出土した土器は底部付近の破片資料であり、前述の指摘にあるどちらかを明言することはできないが、岩手県陸前高田市堂の前貝塚で三十稲場式土器の影響下で製作されたとみられる例がある（陸前高田市1999）ことから、第27図101も同様に三十稲場式土器の影響下で製作された例であると考える。

底部圧痕について、木葉痕（平行葉脈圧痕を含む）と網代圧痕の両者を確認することができた。層位別に見ると、上層（総数219点）で木葉痕73例、網代圧痕10例、中層（総数207点）で木葉痕37例、網代圧痕11例であり、ともに木葉痕を残すものが優勢である。また出土例から、上層は中層に比べ、木葉痕を残すものが多くなる傾向が確認できた。なお、木葉痕と網代圧痕の両者を残す例（第33図211）も少數であるがみられた。

（2）石器

1) 石器石材とその組成

本遺跡では珪質凝灰岩をはじめ、多くの石材が確認されたが、器種別に素材となる石材に傾向がみられる。その傾向を第11表にまとめた。表から、上段に示した石鏃や石錐など打製石器の素材には珪質凝灰岩を主体にメノウや黒曜石が大半を占め、その他の石材は少數である。これに対し、打製石斧等の大形打製石器や磨石等の礫器、石製品は、珪質凝灰岩やメノウ、黒曜石などの石材はほぼみられず、砂岩や泥岩を主体し、やや幅広い石材がみられる結果となった。

これまでに気仙沼市で調査された田柄貝塚（繩文時代中期～晩期）の発掘調査報告書において、肉眼観察と偏光顕微鏡観察による石器石材の分類結果と器種の関係について、剥片石器は珪質頁岩や珪化矽灰岩、黒色頁岩が主体に利用され、玉髓や黒曜石、碧玉が併せて利用されているのに対し、

石斧や磨石、凹石、石棒には堆積岩類や火成岩類など多様な石材が用途に合わせ利用されるとの指摘がされている（蟹沢 1986）。今回の調査結果は前述の指摘と対応する傾向が得られたといえる。

第11表 石器石材組成表

打製石器

	石器・尖頭器	石器	石器	楔形石器	不定形石器	計
珪質灰岩	25(3.5%)	5(83.3%)	4(100%)	11(55.0%)	19(79.1%)	64(72.8%)
メノウ	6(17.7%)	0	0	2(10.0%)	0	8(9.1%)
黒曜石	3(8.8%)	1(16.7%)	0	1(5.0%)	0	5(5.7%)
砂岩	0	0	0	0	1(4.2%)	1(1.1%)
泥岩	0	0	0	0	2(8.3%)	2(2.3%)
シルト岩	0	0	0	0	0	0
凝灰岩	0	0	0	1(5.0%)	0	1(1.1%)
ガラシフルス	0	0	0	0	1(4.2%)	1(1.1%)
玄武岩	0	0	0	0	0	0
安山岩	0	0	0	0	0	0
緑色岩	0	0	0	0	0	0
粘板岩	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	5(25.0%)	1(4.2%)	6(6.8%)
計	34(100.0%)	6(100.0%)	4(100.0%)	20(100.0%)	24(100.0%)	88(100.0%)

大形打製石器・鍛器・石製品

	打製石斧	石器	磨製石斧	磨石	鐵石	凹石	石器	石器	石器	石製円板	石製品 (38+45点)	計
珪質灰岩	0	1(33.3%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1.2%)
メノウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒曜石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
砂岩	7(43.6%)	1(33.3%)	0	15(83.3%)	1(100.0%)	6(75.0%)	0	0	10(90.9%)	3(25.0%)	43(53.7%)	
泥岩	1(6.2%)	1(33.3%)	1(25.0%)	1(5.6%)	0	1(12.5%)	5(100.0%)	0	0	5(41.7%)	15(18.7%)	
シルト岩	2(12.6%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2(2.3%)
凝灰岩	4(25.2%)	0	1(25.0%)	0	0	0	0	1(50.0%)	1(9.1%)	0	0	7(8.7%)
ガラシフルス	0	0	0	1(5.6%)	0	0	0	0	0	0	1(8.2%)	2(2.3%)
玄武岩	1(6.2%)	0	0	0	0	1(12.5%)	0	0	0	0	0	2(2.3%)
安山岩	1(6.2%)	0	1(25.0%)	0	0	0	0	0	0	0	0	2(2.3%)
緑色岩	0	0	1(25.0%)	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1.2%)
粘板岩	0	0	0	0	0	0	0	1(50.0%)	0	3(25.0%)	4(5.0%)	
その他	0	0	0	1(5.6%)	0	0	0	0	0	0	0	1(1.2%)
計	36(100.0%)	3(100.0%)	4(100.0%)	18(100.0%)	1(100.0%)	8(100.0%)	5(100.0%)	2(100.0%)	11(100.0%)	12(100.0%)	80	

なお今回の石器石材の分類は肉眼観察による分類を行っている。分類にあたっては、東北大学宮本毅氏より、一般に珪質頁岩と呼ばれるものは珪質凝灰岩と肉眼での同定が困難な場合があること、また珪質凝灰岩と玉髓や碧玉等の同定についても、同一母岩の中で、変成作用の程度の差異である場合があるなどの助言をいただいた。これを受け、本書では珪質頁岩や玉髓、碧玉等を広義の珪質凝灰岩として分類し報告した。また、これらの中でも特に珪質化が進んだものをメノウとして分類している。

2) 石器製作上の特徴

出土した石器のうち、製作において特徴的なものがみられた。第38図281、第44図336～341など、石斧や打製石斧にみられる原縫面を大きく残した石器である。稀に第44図339のように、素材となる礫端部の両面を調整し作製されるものがみられるが、大半は礫の片面に剥離を施し、片刃の石器としている。これらの石器は遺跡周辺の海岸部などで得られる平面長楕円の礫や、凹石などを転用し素材としており、素材となる礫の形状を生かした成形がなされる。これらの特徴は、田柄貝塚出土打製石斧中にも同様の特徴を示す一群（背面全体に自然面を残した縦長剥片が用いられる打製石斧）があり（宮城県教育委員会 1986）、気仙沼市域における当該期の大形打製石器の製作における特徴を示したものと考える。

3) 磨石について

遺跡からは磨石 20 点が出土し、5 点を図化し報告した。また、報告した磨石のほかに、遺跡からは多くの円礫が出土している。遺跡は丘陵上に立地し、遺跡周辺には沖の田川や滝根川があるも

の、遺跡内に河川跡等が確認できないことから、これらの円礫は自然にあるものではなく、遺跡の外から搬入され、残されたものと考える。出土した磨石、および遺跡に搬入されたとみられる礫のうち、形態による特徴がみられたので、第12表に示し述べる。

出土した磨石のうち、明確に稜を持つほど磨面が研磨されたものや球形の礫が使用されることはごく少数で、主体となるものは平面長楕円形で扁平な礫を用いるもの(全体の60%)であった。また、搬入された可能性のある礫群のうち、主体となるものは平面長楕円形で扁平な礫とやや不定形の円礫であった。このことから、平面長楕円形の礫を中心に、礫が遺跡に持ち込まれ、このうち平面長楕円で扁平な礫が高い頻度で磨石として用いられたと考える。また、これら平面長楕円形で扁平な礫は磨石として用いられるほか、前述のように打製石斧等にも活用されたと考えられる。これらの礫は遺跡周辺の海岸部などで得られる砂岩を中心とした堆積岩であり、剥片類にみられる石材と傾向が異なることから、遺跡周辺で得られる在地石材の利用の在り方の一端を示したものと考えられる。

第12表 磨石分類表

報告書報告磨石

a	b	c	d	計
2 (10.0%)	12 (60.0%)	1 (5.0%)	5 (25.0%)	20 (100.0%)

掲載外縄群 (完形品)

a	b	c	d	計
0	79 (43.9%)	12 (6.7%)	89 (49.4%)	180 (100.0%)

なお、田柄貝塚の報告において、完形磨石の平面形態を観察・分類した結果、楕円形のものが81%を占めること、縦横比が4:3に近いものが多いこと、横幅の齊一性が高いことが指摘されており（宮城県教育委員会 1986）、今回出土した磨石や礫群にみられた傾向も、これに対応するものと考える。

4) 黒曜石分析の結果を受けて

今回の調査で出土した黒曜石は10点以下と、客体的存在というより非常に少ないものである。肉眼で分別可能な3種類を抽出し、波怒薬舎遺跡と台の下遺跡・貝塚も併せて参考資料として分析を依頼した。これまで、市内出土の黒曜石の産地推定は、縄文時代中～晩期の田柄貝塚の5点のみであり、今回の分析方法と異なるものの、4点が岩手県零石町の小赤沢産の可能性が高いと報告されている。また、北隣の陸前高田市の縄文時代中期末の門前貝塚で、今回と同じエネルギー分散型蛍光X線分析装置による産地推定が行われている。123点中、40点が北上折居1群（岩手県、北上川エリア）、46点が北上折居2群（岩手県、北上川エリア）、1点が北上折居3群（岩手県、北上川エリア）、7点が湯の倉群（宮城県、宮崎エリア）、25点が金ヶ崎群（秋田県、男鹿エリア）、4点が今野川群（山形県、羽黒エリア）と分析されている。宮城県内の縄文時代の遺跡から出土する黒曜石は、県内産（加美町湯の倉産）が主体である（佐々木2013）が、沿岸部の氣仙沼では、岩手県南部の沿岸部と同じ地域から黒曜石が搬入されていることが改めて裏付けられ、今後の分析資料の蓄積と共に、交易ネットワークなどの解明を期待したい。

上述の諸特徴や傾向から縄文時代の衛館跡は、その痕跡は希薄ではあるが、縄文時代早期末に堅穴状遺構や集石、落とし穴などとともに少數の遺物を残す活動の場であった。しばらくの間、人間の活動の痕跡は見られないが、縄文時代後期前半に再び掘立柱建物跡や貯蔵穴を含む土坑群を伴う生活の場が形成される。後期の人々は田柄貝塚など気仙沼市域の人々と共有する石器石材や土器型式を用いていた一方で、黒曜石や三十稻場式類型の土器などがみられる遠隔地からの要素も用いていた。こうした人々の生活は後期後半まで続くことはなく、後期後半に入ると再び人間の活動痕跡は見られなくなってしまう。

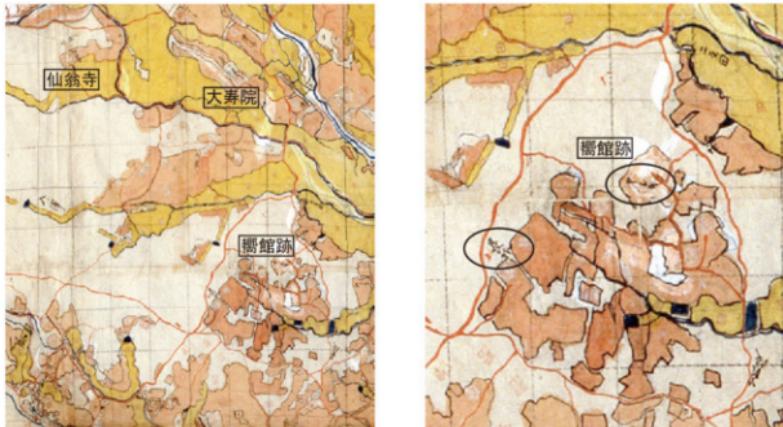
2. 近世の遺構について一大肝入小野寺宮内との関連—

櫛館跡の歴史的背景は第1章でも記載したが、再度、小野寺宮内に関して整理しておきたい。

櫛館跡の北1kmにある峰平館は、天文年間（1532～1555）年に、小野寺出雲守道重が大寿院（大壽院）として開基した修驗の寺（本山派）である。小野寺出雲守の子が右馬助、孫が但馬で、但馬は大和國の大峰入吉祥院中将公權大僧都という官位に補されている。但馬の子が小野寺宮内で、宮内が大肝煎になったため、山伏を孫の円寿院に、峰平館（通称峰屋敷）は子の彌惣エ門と孫に譲り、次男兵左エ門と長峰（長根か？）の里に移り住んだと『岩尻邑風土志』にある。この長根の里が櫛館のことである。また、櫛館跡で見つかった墓を改葬した仙翁寺は、安元2（1176）年に創立、應安5（1372）年に中興された寺で、小野寺家が檀那となっている寺であり、過去帳に小野寺宮内が記載されている。

この位置関係を明確にするために、巻頭に掲載した『本吉郡北方岩尻村分間絵図』（東北歴史博物館蔵）の部分写真を第55図に掲載した。この絵図は、下書きの可能性が高く、制作年代は不明である。絵図で櫛館跡の場所には、「長根」と「ヤシキ」の記載があることから、これが長根屋敷に該当するものと思われる。この屋敷を現在の地図と比較したところ、今回の調査区のC区にほぼ相当する。C区には、第5図に示した瓢箪形をした池や写真団版11に掲載した井戸が確認された。地元住民によると、この場所は長根の小野寺家の新家であり、小野寺家はその南側にあったという。C区からは、上記以外の近世の明確な遺構は確認できなかつたことから、削平された可能性が高い。なお、小野寺家は明治期に唐桑に移っている。

一方、峰平館には小野寺家の本家が今もあるが、大寿院は明治の神仏分離や修驗宗の廃止などで、廃寺となつたのであろう。ここには小野寺家の屋敷墓地があり、小野寺宮内、彌惣右衛門（宮内の長男彌惣エ門）、安説（宮内の四男、仙台二代藩主御侍医）などの墓が残っている。今回、櫛館跡が確定したことにより、峰屋敷（峰平館）と長根屋敷（櫛館）が従来時々混同されていたので、時系



第55図 櫛館跡周辺絵図（巻頭写真拡大）

列に整理したのが、第13表である。

第13表 小野寺宮内関連年表

元号	西暦	事項（鶴船路）	事項（峰尾敷）	根 源	出 典	備 考
寛永 15	1638		小野寺宮内の名初出（大肝入）		古館家文書	
寛永 16	1639		小野寺宮内の名初出（大肝入）		氣仙沼市史	
寛永 18	1641		「郡長、小野寺宮内（峰）」の文書あり		岩尻邑風土志	
慶安 間 ～1651	1648 ～1651	小野寺宮内が鶴船を築き、仲子（次男）兵左エ門重次と住み始める	小野寺宮内。峰の家を嫡子擁 恩門、其子円寿院に譲る		岩尻邑風土志	
承応 4	1655	古館家文書で小野寺宮内の名が頼出する最後の年			古館屋敷文書	
寛文元	1661	小野寺紀一文書に、宮内の名あり			小野寺 1979	
寛文 6	1666	小野寺宮内から子の兵左衛門 に大肝入の役目引き継がれる		大肝入知行日録 部狀？	本吉町誌	
延宝 7	1679	小野寺宮内、経塚を築く		経塚供養碑		
延宝 8	1680	小野寺宮内、享年 89 歳死去		仙翁寺過去帳	岩尻邑風土志	
天和 2	1682					清水川の高橋藤兵衛らが許 可を得て、波路上に製塩場をつくる
貞享 4	1687	古館家文書で小野寺兵左衛門 の名が頼出する最後の年			古館家文書	
元禄 9	1696		四代藩主伊達綱村が、峰尾敷 小野寺源内庄に泊まる。源内 が侍に取り立てられる。		氣仙沼市史	
元禄 11	1698	小野寺宮内の子兵左衛門死去			小野寺 1979	
享保 13	1728	五代藩主伊達吉村、岩尻村を 訪れる小野寺某の家に宿泊			続隠松集	

小野寺宮内が務めた大肝入（大肝煎）とは各代官所管轄下に置かれた役人で、地方の有力者から選任され、代官の命を受けて管内の行政、司法、警察の役割を果たした。では、小野寺宮内が大肝入を務めた管内とはどこを指すのかが問題となる。衙館は本吉郡にあるが、江戸時代のある時期以降には本吉北方（20 箇村）と本吉南方（13 箇村）に分かれ、代官所も北方と南方の2箇所にあつたことが知られている。長根屋敷や峰屋敷は岩尻村にあり、本吉北方に属していると理解されている。ところが、寛永 18（1641）年の検地の時にはまだ岩尻村ではなく、検地により大谷本郷が7箇村に分割され、その一村が岩尻村となつたのである。残念ながら、この分割（村割り）が、実際いつ行われたかは定かではない。

気仙沼市史などによると、熊谷又左衛門が承応 2（1653）年、清水藤内が天和 2（1682）年、熊谷儀兵衛が貞享元（1684）年、熊谷太兵衛が貞享 3（1686）年に大肝入を務めたとされるが、この間、小野寺宮内・兵左エ門親子も大肝入を務めている。唐桑町史によると、「本吉北方は氣仙沼本郷、新城、月立、赤岩、鹿折、唐桑、小原本の七ヶ村を称し、一名の大肝入が任命されていた。この行政区の変化は、恐らく寛永の検地以後である。ところが、隣村岩尻・平磯・波路上・長磯・最知・岩月・松崎七ヶ村の本郷は岩尻村で、これを大谷本郷と称し、大肝入が一名任命されていたが、元禄以後（年

代不明）本吉北方に編入された。故に本吉地方は岩尻以北小原木村までの十四ヶ村となり、広区域の行政区となつた。」（唐桑町 1968）とある。町史の根拠は不明であるが、小野寺兵左エ門が大肝入を辞める 1687 年頃までは、本吉北方⁽¹⁾ 城に 2 人の大肝入が存在したと考えるのが、理解しやすい。しかし、辻接が合わない点もある。小野寺宮内は、寛永 15（1638）年もしくは 16 年には大肝入となつておらず、寛文 4 年（1664）年頃に子の兵左エ門に引き継がれ⁽²⁾、貞享 4（1687）年頃まで務めたことは、同じ本吉北方の唐桑村古館屋敷に伝わる鈴木家文書（以下古館家文書と呼ぶ）で確認できる⁽³⁾。大谷本郷の北方編入時期に關係なく、一貫して小野寺宮内・兵左エ門親子が大肝入として登場している。北部の気仙沼域に大肝入が存在したのであれば、古館家文書に小野寺親子の名前しか見当たらないのは、不自然なことである。また、承応 2（1653）年の気仙沼域の大肝入は熊谷又左衛門であり、承応 2・3 年に古館家文書で小野寺宮内の名前が登場することから、少なくとも承応 2 年には 2 人の大肝入が存在していたことは確実である。小野寺昭英は、寛文元（1661）年の知行目録（小野寺紀一家文書）の中に、宮内の肩書が「元良北方大肝入」と読めるとしている（小野寺 1997）。ことから、仮に大肝入が 2 人存在した時期でも、本吉北方大肝入と称し、役割を分担したのではなかろうか。その場合であっても、大肝入は膨大な職務をこなさなければならず、ベテランの宮内が主たる任を担っていたため、古館家文書に名前が登場すると理解しておき、資料の蓄積を待ちたい。

さて、大肝入は藩から高五貫文（五十石）の土地もしくは年金五両が給料として支給され、その他に三両以内の補助金を区域内から徴収することが認められ、年貢諸役の免除、苗字帯刀御免、絹紬着用御免などの特権が与えられた。大肝入役所は専用の建物があったのではなく、自宅を使用したと言われる。役所には手代や増手代の書記、犯人捕縛の手伝いをする締役、小使などを雇用することができたことから、役所はかなりの規模の建物であったことが推測される。そのため、峰屋敷から長根屋敷に移った際に、それ相応の規模の建物を建てたと考えるのが妥当である。今回 D 区で確認された SB10 を長根屋敷とするには、あまりにも小規模であり、前述のように屋敷推定地は C 区であることなどから、長根屋敷だと考え難い。個人的には、隠居後の宮内が、20 年以上にわたり法華経を読経し、石に写経した場所ではなかつたかと想像している。

次に、経塚（礫石経）について述べたい。経塚はトレント調査だけのため、全体的な構造は不明である。平坦面に五段階にわたり版築状に突き固めた盛土を行い、方墳状の高まりを形成している。頂部の表土を取り除いた段階で石組が見つかっているが、これは供養碑の基礎部分と考えている。碑文から、経石を埋納したと考えられるが、経石を確認するまでの掘削はしていない。表面や表土中から扁平な石が多数確認されたが、これらには墨書の痕跡は認められなかった。経石を確認していないため推論でしかないが、これらの扁平な石は、経石として利用するために海岸など遺跡外から持ち込まれたものであり、経石として利用しなかつたものを経塚の構築時に埋めたのではないかと考えている。

また、供養碑には大乗妙典一千部読誦供養と八巻を写経した石を入れるという、読誦と納経の 2 種類のことが記されている。この大乗妙典とは法華経（妙法蓮華経）のことであり、法華経は特定宗派に限定されず、天台宗や禅宗など幅広く用いられた經典であり、修験との関わりも強い。大寿院は本山派の修験寺であり、本山である吉野大峯山では、法華経を読むことが修行の一つと知られ

ていることから、宮内も法華経を選んで読誦したのであろう。また、経塚信仰は、釈迦が『法華経』を説いたところ、多宝塔が湧き出たと『法華経』に記載されていることから、弥勒菩薩がこの世に下生し、救済してくれるこを頼って經典を埋めたことが、起こりと言われている。それが近世になると、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穰・村内安全などの現世の利益を追求することや父母などの追善供養になったと言われており、宮内の築造目的は前者であった。一般に經文の読誦と書写の功德は同じであることから、読誦か納經のどちらか一方の銘文となることが多い。近世には、写経した經典を埋納したことなどを銘文とする納經塔（一字一石塔など）よりも、經典を読誦したことや回数を銘文とする読誦塔の方が多くなる傾向が見受けられる。宮内が経塚を造立するまでの災害を見てみると、延宝年間には毎年のように災害に見舞われており、この直近の情勢が、宮内の経塚築造の契機となったのではなかろうか。そして、子孫への強い思いが故に、読誦を兼ねた經碑となつたのであろう。

第14表 江戸時代初期の災害・凶荒の被害年表

元号	西暦	内 容	根 案	出 典
天正 13	1585	津波有	口碑	本吉郡誌 唐桑町史
慶長 16	1611	三陸沿岸で地震後、大津波。仙台藩内で、1783人死亡。		気仙沼市史 本吉町誌
元和元	1615	凶作。大飢饉で人馬が餓死。		唐桑町史 本吉町誌
元和2	1616	三陸地方に強震後、大津波		本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
元和3	1617	凶作。大暴風雨・洪水。		唐桑町史
元和4	1618	彗星出現		唐桑町史
寛永元	1624	冷害、凶作	東藩史稿	気仙沼市史
寛永14	1637	仙台藩で飢饉		唐桑町史
寛永17	1640	大凶作		唐桑町史
寛永19	1642	凶作		唐桑町史
慶安4	1651	亘理郡（宮城県南部）で津波		本吉郡誌
延宝3	1675	4月15日、本吉郡沿海部に、迅雷、大きさ5~7寸の雹が降る。行人傷つき、飛鳥死す。		気仙沼市史
延宝4	1676	10月、常陸、岩城、陸奥の沿岸に津波。人畜溺死、家屋の流出。	古文書	本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
延宝5	1677	3月12日、陸中南部領で、數十回の地震。その後の津波により、宮古・大槻方面で家屋の流出。	口碑	本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
		5月11日、本吉郡、迅雷、大風、雹が降る。長さ20cm、厚さ5cm、木や田畠に被害あり。		気仙沼市史 唐桑町史
延宝7	1679	大凶作		唐桑町史

市内には近世の経塚（礎石経）は28箇所（悉皆調査では25箇所）あり、今回確認されたものは市内最古のものである。経塚（礎石経）は、経石とその記念碑である経碑がセット関係にあるが、開発などにより経碑だけが移転されてしまい、下部の経石は頼みられないことが多い。市内に分布する経塚も、経碑だけ移転され、嚮館跡のように塚状のマウンドを有するような良好な保存状態のものは珍しい。さらに、ほとんどは造立者が不明であり、今回のように元大肝入と特定できたのは、稀有である。また、赤岩館経塚のように、開発に伴う発見・調査事例も多く、復興事業における市内初の保存例として、経塚を保存できたことは意義がある。

註

- (1) 幕末における本吉北方は現在の南三陸町の歌津以北を指し、唐桑町史にある北方の範囲の変更が行われた時期は不明であり、岩尻村より南の人物が大肝入なった記録は、現時点では見当たらない。
- (2) 古館家文書 317 の寛文 4 年（1664）年で、大肝煎兵左衛門が初出する。本吉町誌では、寛文 6（1666）年の「大肝入知行目録添状？」に「……本吉大肝入源内隠居跡肝入願之知行高五貫文同子兵左エ門ニ御本帳右役目相勤候内計 地形引続相渡可被申候以上」とある。
- (3) 古館家文書はこの頃から少くなり、大肝入の記載と文書の多寡が比例する可能性はある。

引用・参考文献

相原厚一 2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期後葉に関する土器編年」『研究紀要』10 東北歴史博物館

相原厚一 2015 『東北地方における最古の土器の追究』

石坂圭介 2008 「三十稻場式土器」『絶賛 縄文土器』

福村晃嗣 2008 「門前式土器」『絶賛 縄文土器』

小野寺昭英 1997 『地域史断章』

蟹沢聰志 1986 「田柄貝塚から出土した石器類の材質について」『田柄貝塚II』宮城県教育委員会

久保雅一（写）『岩尻邑風土志』

古泉弘 2001 「喫煙2 煙管」『国説 江戸時代考古学研究事典』柏書房

紫桃正隆 1973 『史料 仙台御内古城館』第2巻

唐桑町 1968 『唐桑町史』

気仙沼市 1986～1998 『気仙沼市史』

気仙沼市教育委員会 2011 『唐桑の石碑』

佐々木繁喜 2013 「岩手県門前貝塚および宮城県大木開貝塚出土の黒曜石の产地推定分析」『岩手考古学』24

佐々木繁喜 2013 「宮城県の黒曜石について」『宮城考古学』15

佐藤宏一 1983 「仙基領北部における近世修驗の消長に就いて」『研究紀要』9 東北歴史資料館

丹野雅人 2008 「土器片加工円板・鍤」『絶賛 縄文土器』

藤沼邦彦 1975 「宮城県の経緯について」『研究紀要』1 東北歴史資料館

宮城県教育委員会 1980 『歴史の道調査報告書 気仙道（小野～唐桑）』

宮城県教育委員会 1981 『東北地建バイパス関係調査調査報告書』

宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚I・II』

宮城県教育委員会 2007 『山居遺跡（縄文時代編）ほか』

宮家准 2001 『修驗道』講談社学術文庫

本吉町村長會 1949 『本吉郡誌』

本吉町 1982 『本吉町誌』

本吉町教育委員会 1989 『本吉町の石碑』

本吉町教育委員会 1999 『平貝遺跡・平貝宗跡』

陸前高田市教育委員会 1999 『郷の前貝塚II』

SUMMARY

Kesennuma City is located at the northeast tip of Miyagi Prefecture, along the Pacific coast, neighboring Iwate Prefecture to its north. A rias coastline extends north-south from Aomori to Iwate to Miyagi Prefectures, and the part where Kesennuma is located, called the Sanriku Coast, is particularly deeply indented, with alternating narrow harbors and peninsulas making the coastline resemble tree-branches. This area has historically been prone to the ravages of tsunamis.

The Great East Japan Earthquake which occurred on March 11, 2011 caused a massive tsunami which reached the eastern coast of Japan, including Kesennuma City. The city was catastrophically damaged, especially near the coast. Approximately 16,000 homes were destroyed, 9,000 households were affected, and 1,200 lives were lost. There are large-scale development works underway in Kesennuma today, towards recovery and reconstruction, including the rebuilding of homes by individuals, communal relocation to higher elevations, and the rebuilding of commercial and industrial facilities and infrastructure. To ensure that the accompanying buried cultural properties excavation surveys and assessments are conducted with necessary speed, Kesennuma has welcomed assistance from local governments across Japan in the form of temporary assignments of specialist staff for this purpose.

This volume is a report of the buried cultural properties survey conducted as part of the reconstruction effort in fiscal year 2014. This is the first report from the administrative unit Motoyoshi Town, which has been formed on September 1, 2009 by municipal merger.

The site of *Mukaitate-Ato*, reported in this volume, is located on a gentle hill about one kilometer inland from the coast, with great views of the Pacific Ocean. The site was understood as the former residence of Onodera Kunai, who was the *Oo-Kimoiri* (the top local official from the farmer (peasant) class overseeing several villages) in the early Edo period. The survey confirmed this through the excavation of features and artifacts dating to the late 17th to early 18th centuries. A *Kyo-Zuka* (mound where Buddhist scriptures were buried) was newly discovered, with inscriptions on the accompanying monument noting its construction by Onodera Kunai in 1679; this feature will be preserved *in situ*, due to its historical significance.

Additionally, features and artifacts from End Incipient Jomon, Early Late Jomon, and Ancient periods have been identified. It was unknown until this excavation survey that *Mukaitate-Ato* was occupied transitionally in the final stages of the Incipient Jomon period and for a certain period of time in the early part of the Late Jomon period, and thus these findings are highly significant. Features including pit houses from the Jomon period were unfortunately unidentifiable, likely erased by construction in later periods, but artifacts were found in a debris deposit within a shallow valley, giving a glimpse of life in the Jomon. Characteristic pottery and stone tools were identified, and while being a relatively small occupational site, its obsidian was sourced from outside the Prefecture.

This volume thus constitutes a significant addition to the historical record of Kesennuma, where buried cultural property surveys have rarely taken place. It indicates that perhaps a rich archaeological record remains to be discovered here. It is the author's hope that this volume will, together with the many other volumes coming out from the reconstruction effort, sheds light on the early history of this region.

気仙沼市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1.はじめに

嚮館跡は、気仙沼市南部の本吉町長根に所在する縄文時代後期前葉の集落跡である。また、波怒棄館遺跡は気仙沼市北部の唐桑町荒谷前に所在する縄文時代前期～中期初頭の集落跡・貝塚、台の下遺跡は唐桑町台の下に所在する縄文時代中期後葉の貝塚のある集落跡である。これら気仙沼市内に所在する3遺跡から出土した縄文時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、嚮館跡出土の3点、波怒棄館遺跡出土の2点、台の下遺跡・貝塚出土の2点の、合計7点の黒曜石製石器である（表1）。

試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー

株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$\text{1) Rb 分率} = \text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$\text{2) Sr 分率} = \text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

表1 分析対象

No.	遺跡名	時期	出土地点	備考
1	嚮館跡	縄文時代早期 末～後期前葉	D区 SK02	落し穴
2			B区 SK21	
3			B区 SK24付近	
4	波怒棄館 遺跡	縄文時代前期 ～中期初頭	SK432	石鏃
5			SX88	貝屑
6	台の下遺 跡・貝塚	縄文時代 中期後葉	4区 SI63	
7			4区 SI62	



強度 +Y 強度 +Zr 強度)

3) Mn 強度 × 100/Fe 強度

4) log(Fe 強度 /K 強度)

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度 × 100/Fe 強度 の判別図と横軸 Sr 分率 - 縦軸 log(Fe 強度 /K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度 /K 強度) の値が減少する（望月 1999）。試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表 2 に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図 1 に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表 3 に石器の測定値および算出した指標値を、図 2 と図 3 に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。なお、視覚的にわかりやすくするために、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、1 点が金ヶ崎群（秋田県、男鹿エ

表 2 東日本黒曜石产地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白龍	白龍1 白龍2	赤石山脈(43), 六呂戸露頭(15) 7号沢川支流(2), 10号露頭(10), 十勝石沢露頭下河床(11), アシサイの滝露頭(10)
		赤井川 上土幌	赤井川・土木川(24) 十勝三段(4), タウシュベツ川右岸(42), タウ シュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	置戸山 所山	置戸山(5) 所山(5)	
		鹿浦 旭川	鹿浦(10) 旭川 近文台(8), 雨森台(2)
		名寄 秩父1 秩父2 秩父3	名寄(19) 秩父1 秩父2 秩父3 中山(66)
	遠軽 生田原	遠軽 生田原	遠軽 社名瀬川河床(2) 生田原 仁田布川河床(10)
		留辺蘿 留辺蘿2	留辺蘿1 ケショウマツ川河床(9) 留辺蘿2
	釧路 木造 深浦	釧路 木造 深浦	釧路市新スキーリゾート, 釧路川右岸(2), 阿寒湖左岸(8) 出来島 八森山 桜崎(7), 八森山公園(8)
		青森 男鹿	青森 天田内川(6) 男鹿 金ヶ崎 鷲巣
		岩手 北上川	岩手 鶴巣 北上折居1 北上折居2 北上折居3
	宮城 仙台	宮崎 色麻 秋保1 秋保2	湯ノ食 湯ノ食(40) 根岸 根岸(40) 仙台 秋保1 秋保2 壇場
		山形 羽黒 新潟 新潟	月山 月山荘前(24), 大姫沢(10) 棚引 たらのき代(19) 新潟坂 板山 板山牧舎(10) 新潟 金津 金津(7)
		福島 高岡原	甘瀬沢 甘瀬沢(22) 七尋沢 七尋沢(3), 宮川(3), 桂持沢(3) 西郷屋 美春バーライト土砂集積場(30) 鳶山 鳶山(14), 東郷屋(54)
長野	和田 上田屋 小深沢	小深沢 土屋橋1 土屋橋2	小深沢(42) 土屋橋1 土屋橋西(10) 新和田トントネル北(20), 上田屋橋北西(50), 土屋橋西(1) 和田屋トントネル上(20), 古峰(30), 和田神スキーリゾート(28)
		古峰 牧ヶ沢 高松沢	牧ヶ沢(20) 高松沢 高松沢(19)
		諏訪 蓼科	星ヶ台 星ヶ台(35), 星ヶ塔(20) 南山 南山(20), 茅草跡(20), 花菱鉄軒(20)
	神奈川 箱根	芦ノ瀬 根府 根治屋	芦ノ瀬 芦ノ瀬(20) 根府 根府(51) 根治屋 根治屋(20)
		上多賀 柏崎 葛林	上多賀(20) 柏崎(20) 葛林(20)
		東京 神津島 鳥根	恩施島 恩施島(27) 砂輪崎 砂輪崎(20) 久見 久見 葉瀬 久見バードアイ中(6), 久見採掘現場(5) 葉瀬 葉瀬海岸(3), 加茂(4), 岸高(3)

表 3 測定値および产地推定結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn#100 Fe	Sr分率	log E _K	判別群	エリア	No.
1	81.9	45.4	1008.1	177.0	201.6	166.1	458.4	17.65	4.50	20.10	1.09	北上折居2	北上川	1
2	222.8	143.0	1234.4	517.2	535.4	277.7	623.8	26.47	11.58	27.40	0.74	櫛引	羽黒	2
3	135.0	76.2	1748.3	292.2	355.1	266.2	775.1	17.31	4.36	21.03	1.11	北上折居1or2	北上川	3
4	181.6	112.6	1041.5	407.7	410.7	221.0	485.4	26.74	10.81	26.93	0.76	櫛引	羽黒	4
5	198.1	115.1	2681.9	427.0	563.4	386.3	1168.8	16.77	4.29	22.13	1.13	北上折居1	北上川	5
6	279.1	192.9	1207.6	888.9	548.1	376.5	675.5	35.71	15.97	22.02	0.64	金ヶ崎	男鹿	6
7	171.8	94.0	2005.4	369.3	408.3	346.4	946.4	17.83	4.69	19.72	1.07	北上折居2	北上川	7

リア)、1点が北上折居1群(岩手県、北上川エリア)、2点が北上折居2群(岩手県、北上川エリア)、1点が北上折居1群と同2群の重複域、2点が櫛引群(山形県、羽黒エリア)の範囲にそれぞれプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表4に時期・遺跡別の産地を示す。点数が計7点と少ないにもかかわらず、岩手県、秋田県、山形県産とさまざまな産地の黒曜石が確認された。今後、この地域の黒曜石の

測定例が増えれば、ほかの産地の黒曜石の存在や、時期による傾向などが確認できる可能性がある。

表4 時期・遺跡別の産地

時期(縄文時代)	遺跡	北上川	羽黒	男鹿	計
前期～中期初頭	波怒東館遺跡	1	1	—	2
中期後葉	台の下遺跡・貝塚	1	—	1	2
後期前葉	鶴館跡	2	1	—	3
計		4	2	1	7

4. おわりに

気仙沼市内の3遺跡より出土した縄文時代の黒曜石製石器計7点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点が北上川エリア、2点が羽黒エリア、1点が男鹿エリア産と推定された。複数の産地の黒曜石が持ち込まれており、今後のデータの蓄積が期待される。

引用文献

望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2
—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会。

18

2.2

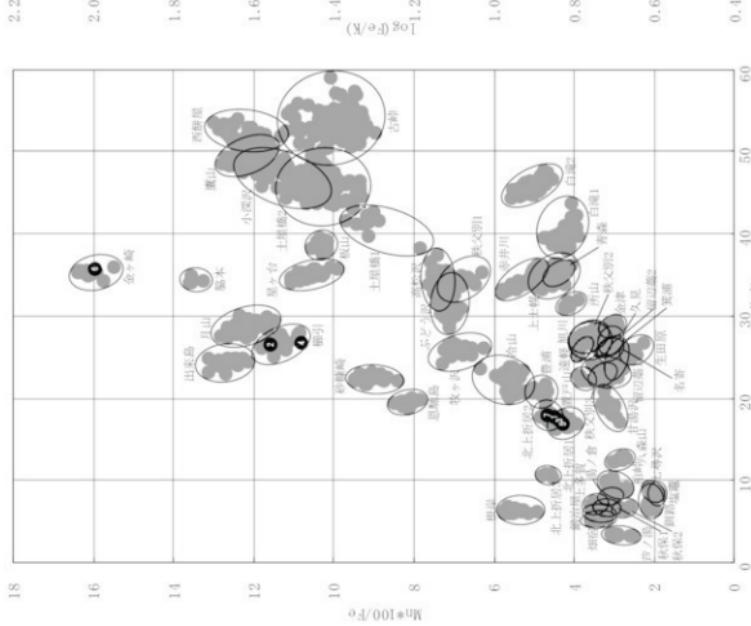


图2 黑曜石产地推定判别图(1)

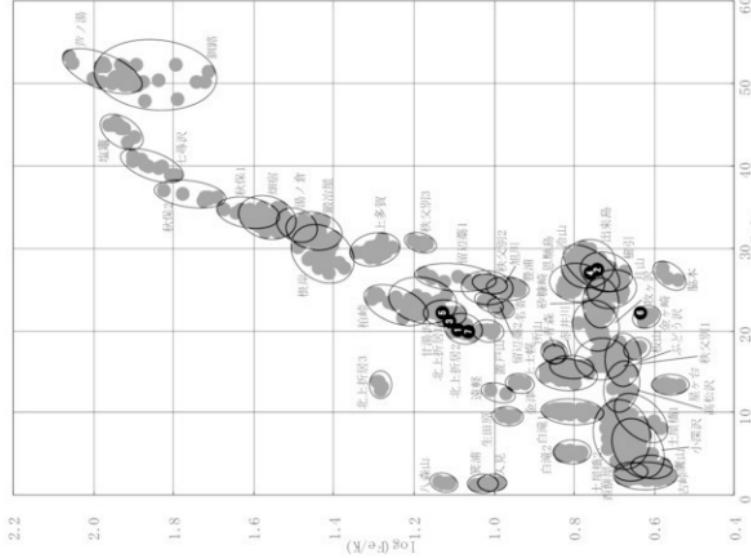


图3 黑曜石产地推定判别图(2)

写 真 図 版



西から



北東から

図版2
櫛館跡空中写真2



B区・D区・経塚全景



B区全景



SX41(東から)



SX41(空中から)



SB43(東から)



SX40(東から)



SX55 確認状況 (北から)



SX55 遺物出土状況 (北から)



SX55 完掘状況 (北から)



SX42 集石確認状況 (東から)



SX66 半截状況（南から）



SK56（南から）



SE60（南から）



SK14（南から）



SK22（南から）



SK27（南から）



SK31 半截状況（南から）



SK31 完掘状況（南から）



SK33(南から)



SK34(南から)



SK37(北から)



SK38(南から)



SK39(東から)



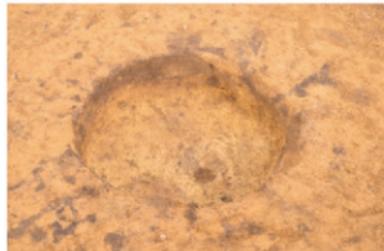
SK49(南から)



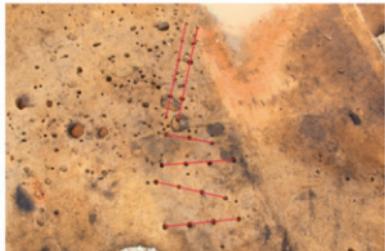
SK62(南から)



SK65(南から)



SK76(南から)



SA47・48・50～52・54(空中から)



SA50～52(南から)



SK16(東から)



SK24(南から)



SK30(東から)



SK35(南から)



SK59(東から)



SK68(東から)



SK70(南から)



SK79(南から)



SX13 土器出土状況 1



SX13 土器出土状況 2



SX13(空中写真)



SX13(南東から)



SX13(北東から)

図版 8 D区空中写真



D区空中写真



SB10・11 空中写真



SB10(南から)



SB10・11(北から)



SB11(南から)



SK5・SB12(南から)



SI08(西から)



SI08 挖り方(西から)



SD01・SK02・03(西から)



SK07(東から)



経塚確認状況



経塚古銭出土状況



経塚トレンチ調査状況



左 右
供養碑文

大乘妙典讀誦一千部供養
奉稱阿彌陀六字妙號供養
右意趣者
佛前或書寫八卷石入塚□旗為每日是旨勤無怠
願□茲善利現當安種子孫繁榮要如意指諸掌者也
施主小野寺宮內義重 法名明應常程居士八十八齡
當歲維延寶七己未八月二十五日□□ 敬白
岩尻村長根屋敷



経塚東西トレーニチ（南西から）



経塚頂部石組確認（南西から）



経塚東西トレーニチ（西から）



経塚保存状況（東から）



C区井戸截ち割り



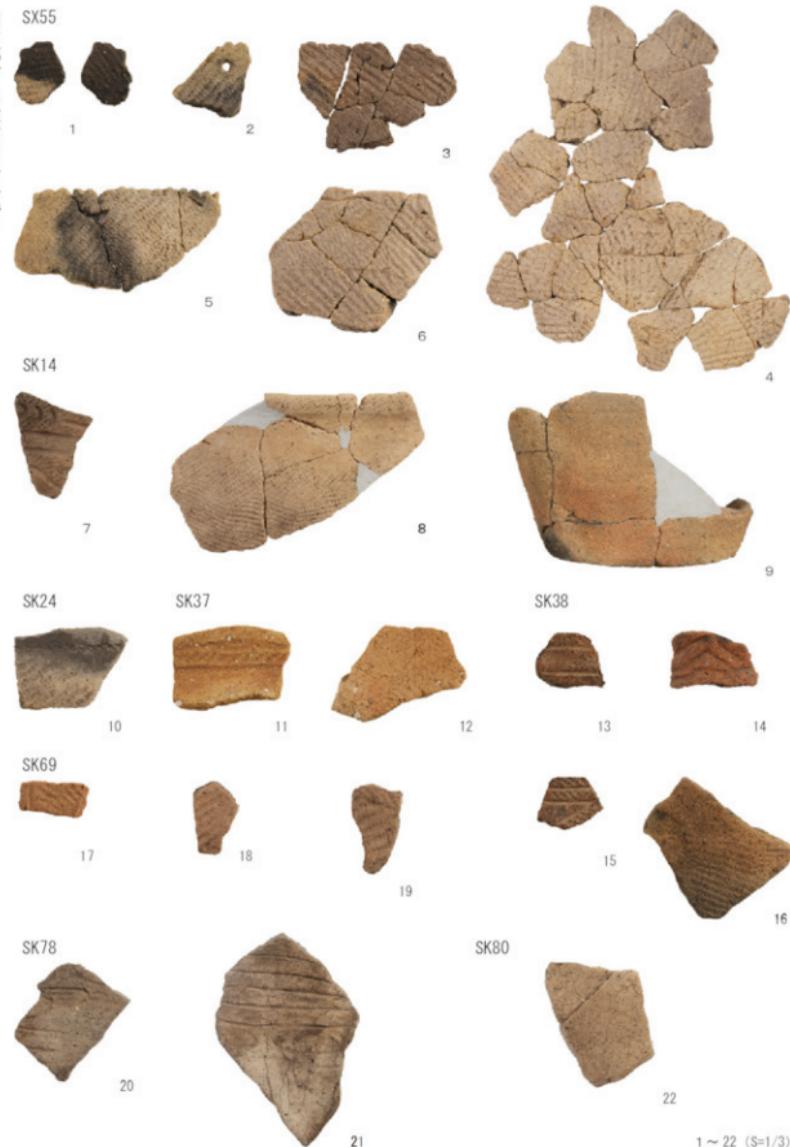
小学生体験発掘



現地説明会

図版
12

遺構出土土器
1



1 ~ 22 (S=1/3)

SX66



23

遺構保存地区出土



24

23 · 24 (S=1/3)

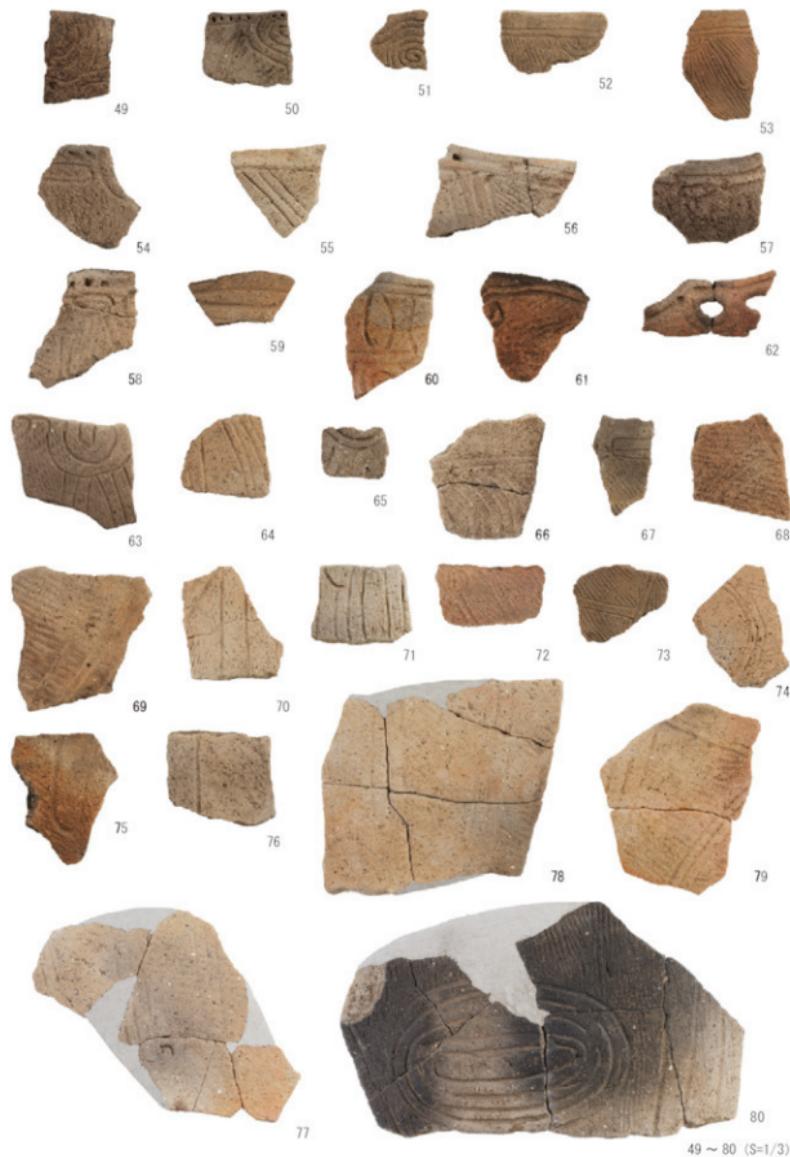
圖版
14



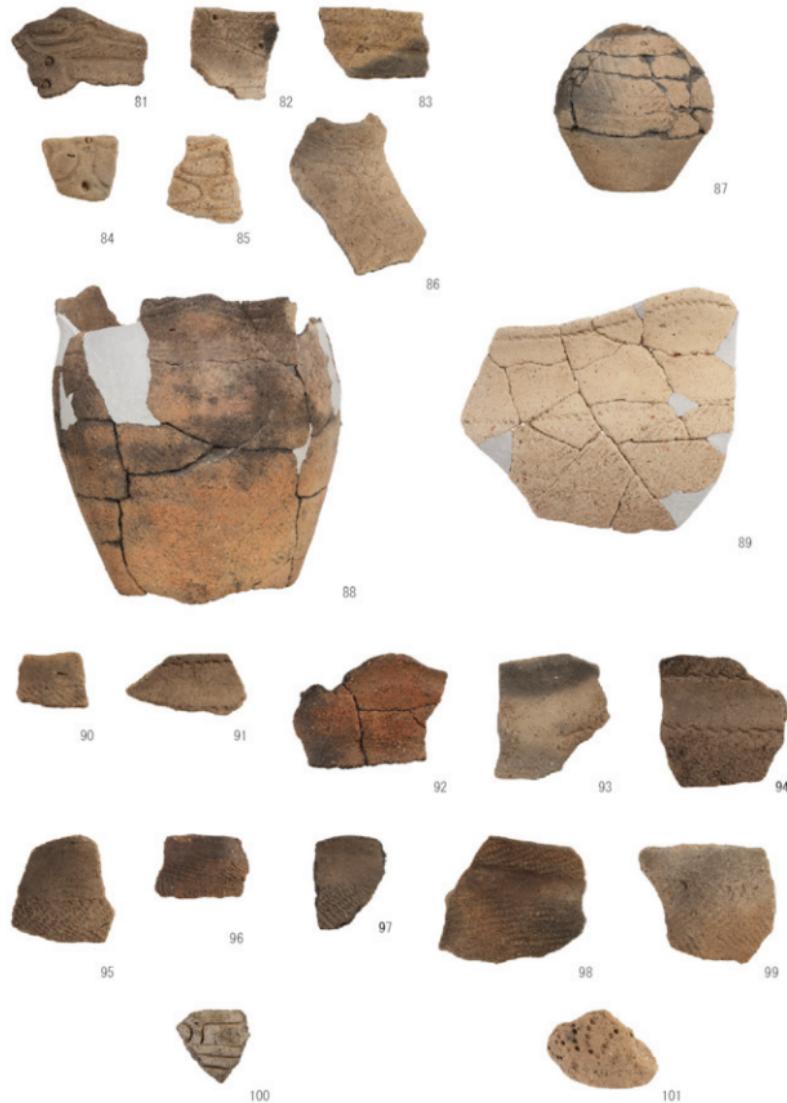
S
X
13
包含層上層出土土器
1



図版 15
S X 13 包含層上層出土土器 2



圖版 16
S X 13 包含層上層出土土器 3



81 ~ 101 (S=1/3)



圖版 18
S X 13
包含層中層出土土器 1



129 ~ 139, 141 ~ 158 (S=1/3)



159 ~ 185 (\$=1/3)

圖版 20
S X 13 包含層中層出土土器 3



186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198



199



200



201



202



203



204

205

186 ~ 205 (S=1/3)

圖版 21
S X 13 包含層中層出土土器 4・下層出土土器・土師器



206 ~ 234 (S=1/3)

図版
22

土
製
品



239 ~ 272 (S=1/2)



圖版
24
S X 13
包含層出土石器
1

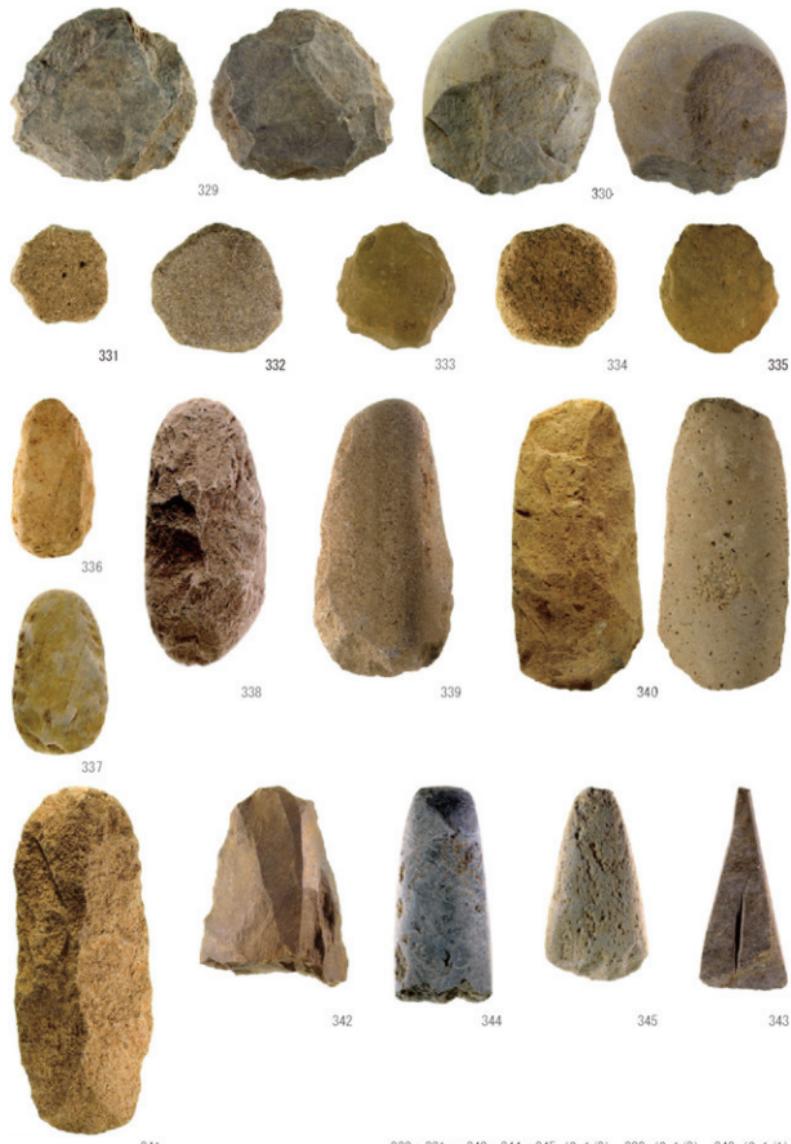


293 ~ 318 (S=4/5)

図版 25
S X 13 包含層出土石器 2



319 ~ 323 · 325 ~ 328 (S=4/5)、324 (S=2/3)



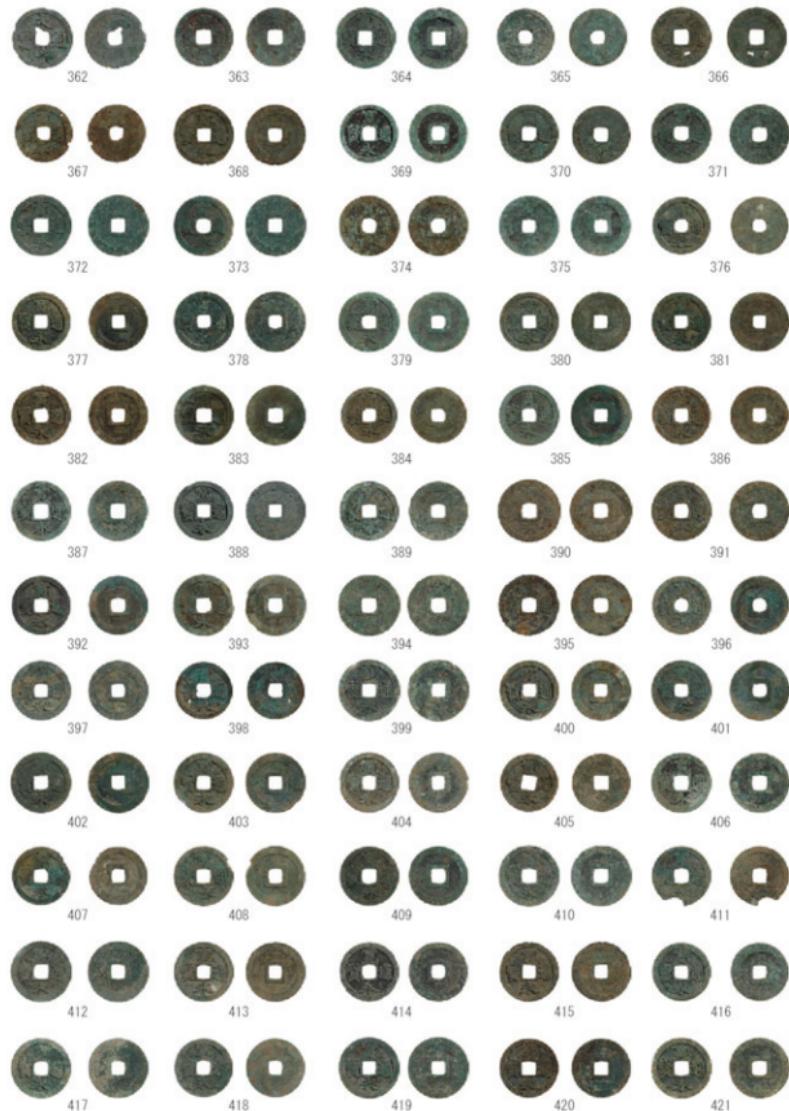
329・331～342・344・345 (S=1/2)、330 (S=1/3)、343 (S=1/1)

図版 27 SX13 包含層出土石器 4

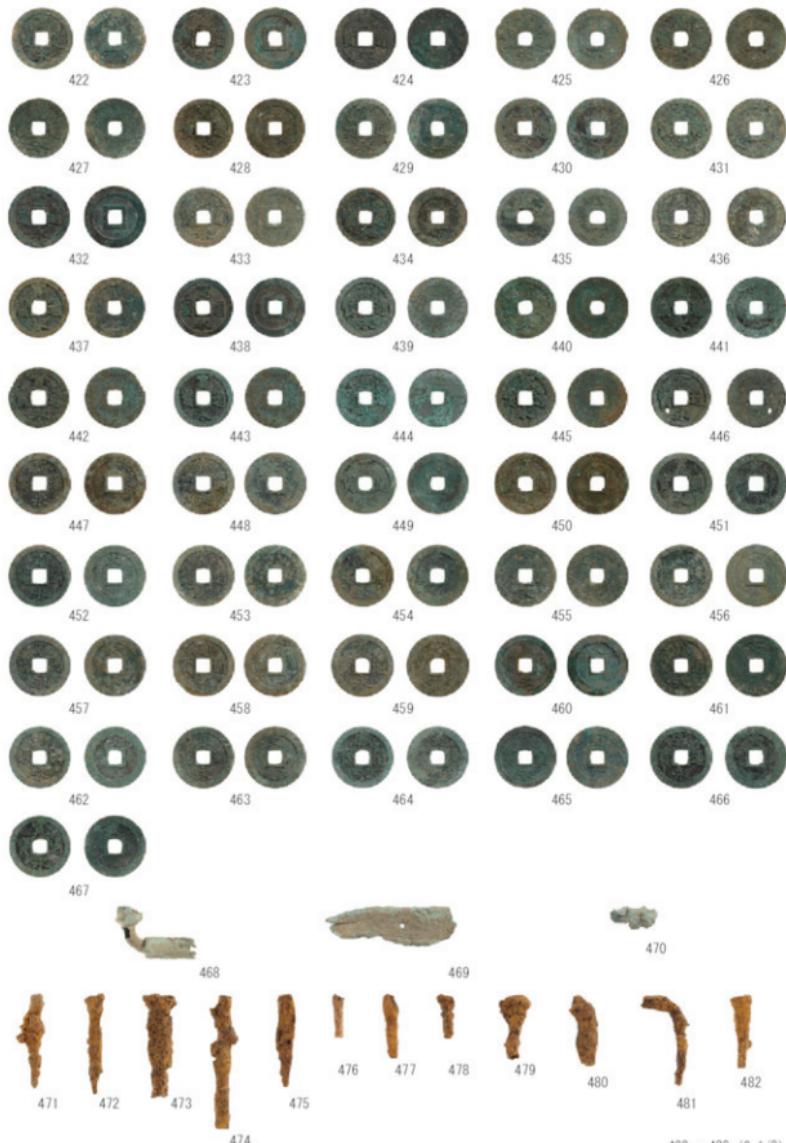


346 ~ 356 (S=1/3)、357 ~ 361 (S=1/2)

圖版
28



362 ~ 421 (S=1/2)



422 ~ 482 (S=1/2)

報告書抄録

ふりがな	むかいたてあと					
書名	鶴館跡					
副書名	防災集団移転促進事業・灾害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う発掘調査報告書					
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書					
シリーズ番号	8					
編著者名	野崎進（編） 堤英明 竹原弘展					
編集機関	気仙沼市教育委員会					
所在地	〒 988-8502 宮城県気仙沼市魚市場前1番1号 TEL 0226-22-6600					
発行年月日	西暦 2016年7月28日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間 発掘面積 m ²
むかいたてあと 鶴館跡	みやけいんせきとよしきうちながね 宮城県気仙沼市本吉町長根	04256	62035	38° 49' 17"	141° 34' 8"	20140701 2,184 20140806 20140901 ～ 20141225 5,697
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
鶴館跡	集落・屋敷・経塚	縄文時代早期・後期、古代、近世	堅穴建物跡2、 掘立柱建物跡5、 堅穴状遺構2、 貯蔵穴13、 落とし穴4、 集石土坑2、 土坑、ピット、 井戸跡2、柵列6、 経塚1	縄文土器、石器、 土製品、土師器、 陶器類、古錢、 金属製品	大肝入の屋敷推定地であり、掘立柱建物跡や柵列、経塚などを発見。	
要約	鶴館跡は宮城県北東部の太平洋沿岸の丘陵地に位置し、中世の里敷地と周知されていた。東日本大震災による防災集団移転促進事業に伴う発掘調査により、縄文時代、古代、近世の遺構が確認された。縄文時代は後期前後の遺構が主体で、SX13 包含層から出土した遺物が全体の8割を占めている。この他、堅穴状建物跡、貯蔵穴、落とし穴などが見つかり、早期末の遺構も見つかっている。近世は、掘立柱建物跡や堅穴状遺構、柵列、経塚などが確認された。仙台藩で本吉郡北方の大肝入を務めた小野寺宮内の屋敷跡を特定することはできなかったが、17世紀後半から18世紀にかけての陶器や古錢、金属製品などが発見された。特に、小野寺宮内が延宝7（1679）年に築造した経塚は、市内最古の縄文石經であり、築造者が大肝入と判明した稀有な例のため、市の集団移転事業では初の保存事例となった。					

気仙沼市文化財調査報告書第8集

嚮 館 跡
Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業
(大谷地区)に伴う発掘調査報告書

発 行 日 2016年7月28日
編集・発行 宮城県気仙沼市魚市場前1-1
印 刷 気仙沼市教育委員会
印 刷 宮城県仙台市若林区六丁の目西町8番45号
笠氣出版印刷株式会社